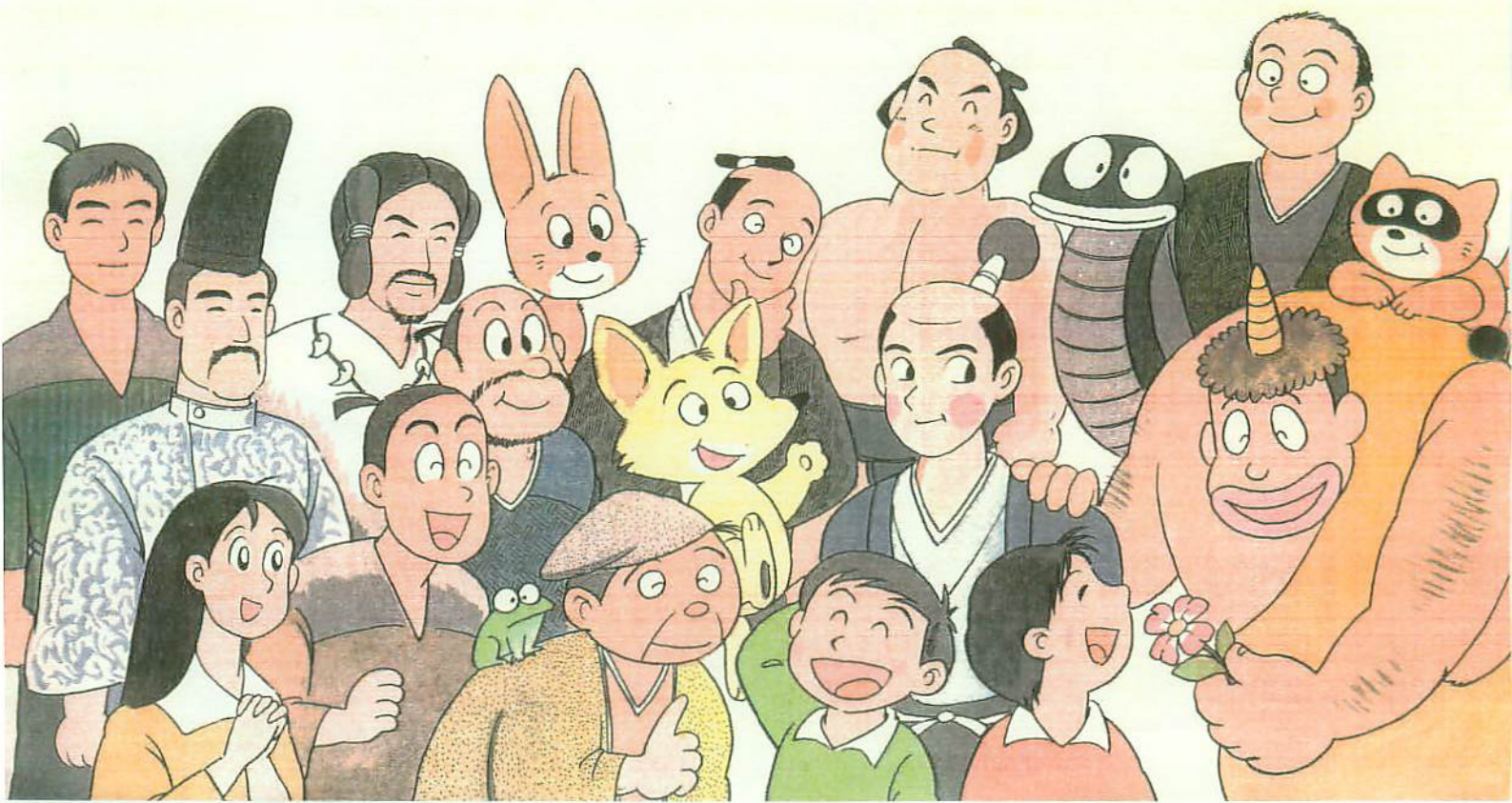


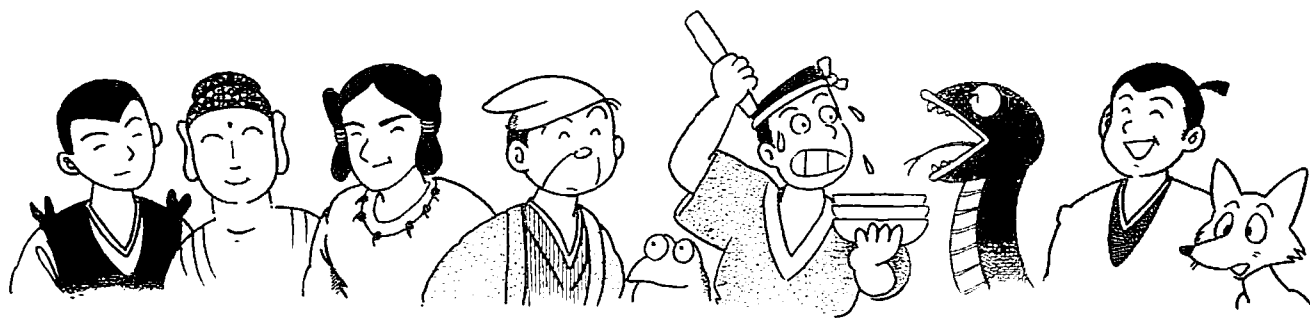
まんがはとうちょうの むかしばなし



まんが「はつとうちょうのむかしばなし」

目次

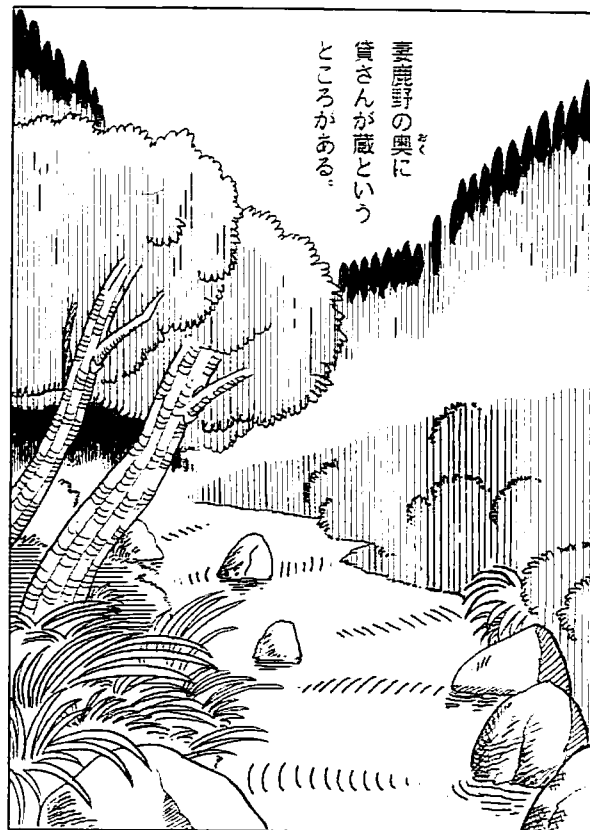
妻鹿野奥の貸さんが蔵(妻鹿野)	1
稗谷大雪ずり(稗谷)	3
とうていさん(志谷)	5
蛇山と観音さま(中)	7
ごんげんさんの名水と一つ目のウグイ(用呂)	9
宮枝市(宮枝)	10
虚空蔵さん(日田)	12
大関一つ山(北山)	15
太刀太刀大明神(重夜)	17
流された島村(島)	19
船川と八束の鬼(南)	21
南神社の氏子族(南)	23
新井手づくり(徳丸)	25
百姓大將与兵衛(徳丸)	27
皆原薬師(皆原)	29
地福寺の仏像(奥野)	31
円智の金かし(茂谷)	32
佐崎のすもうとりの話(佐崎)	34
清徳寺のふしぎ(清徳)	36
ネブト石(柿原)	39
お雪つばき(三山口)	41
サルとどんびき(三浦)	44



因幡小鍛冶景長 (鍛冶屋)	47
長源寺の森 (岩渕)	49
狐師の清左衛門 (岩渕)	54
松田勘右衛門 (東)	57
万灯流し (東)	61
イホ地藏 (才代)	63
たら淵のゆらい (才代)	65
竹市の渡し (竹市)	67
口惜しのじだんだ (茂田)	68
鉾山があつたはなし (茂田)	70
太鼓になつた大けやき (横田)	72
小列府村の移住 (小列府)	74
大空寺の賢救 (新興寺)	76
大内田家の井戸 (安井)	78
日下部の青木どい (日下部)	80
千人塚 (日下部)	82
巨人の足あと	84
檜州街道	86
木地師のはなし	87
ひとつ目のはなし	88
伊勢みち道標	90
あばれる八東川	92
八東川の三大堤防	94
むかしの学校	96
寄宿舎と分校	98
八東町まんがマップ	99



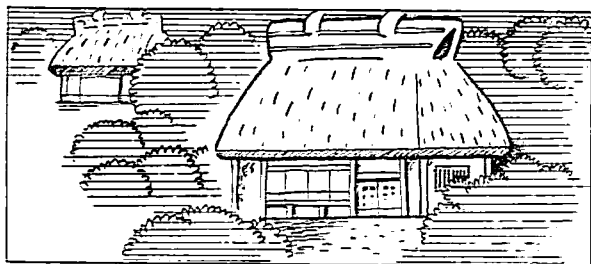
妻鹿野奥の貸さんが蔵 (妻鹿野)



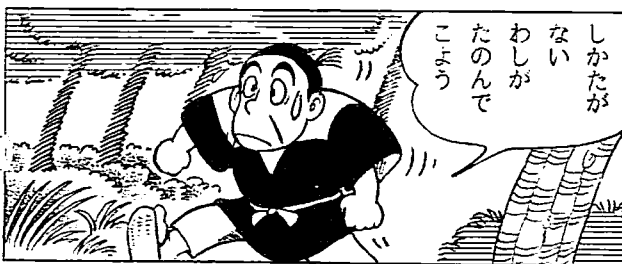
妻鹿野の奥に
貸さんが蔵という
ところがある。



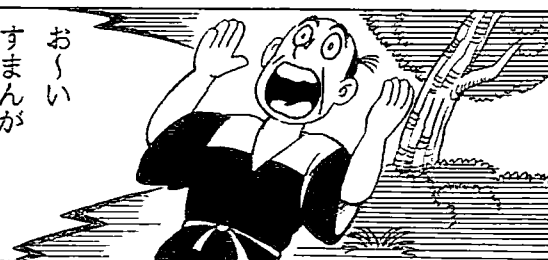
しかし、
妻鹿野の人が
お客をする時
膳や椀が
足りなければ
この貸さんが蔵
から借りた
いう



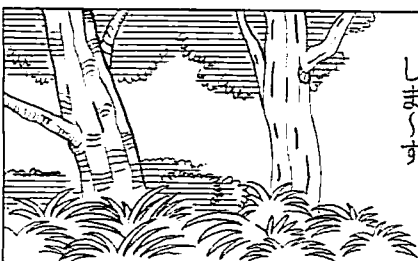
明日のお客に
お椀が三十個
足りない
困った
なあ

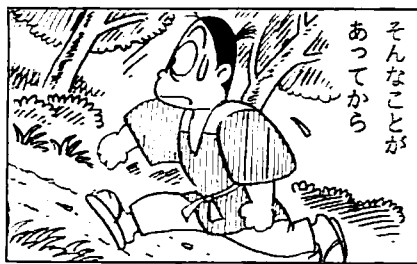
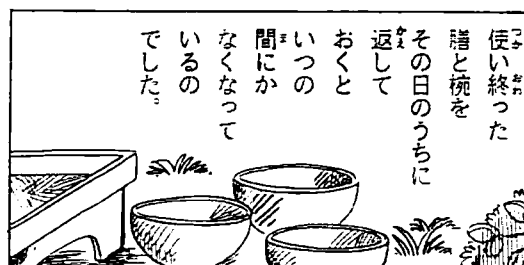
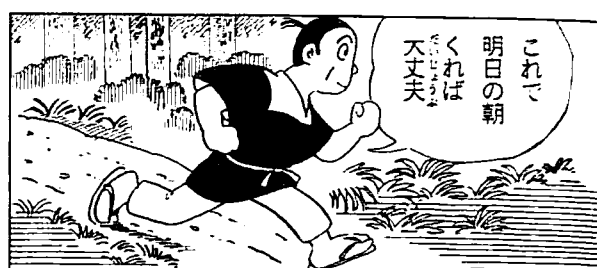
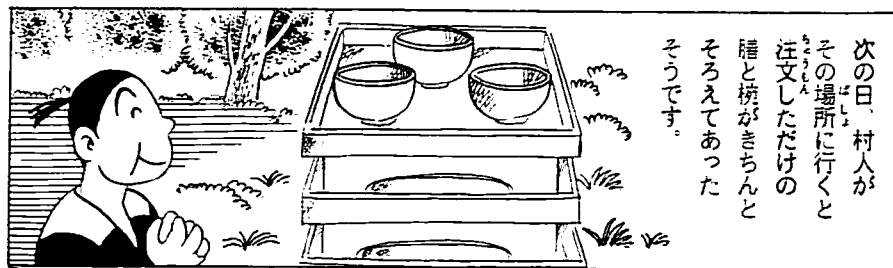


しかたが
ない
わしが
たので
こよう



おい
すまんが
明日の朝
膳と椀、三十人分
貸してください
おねがい
します

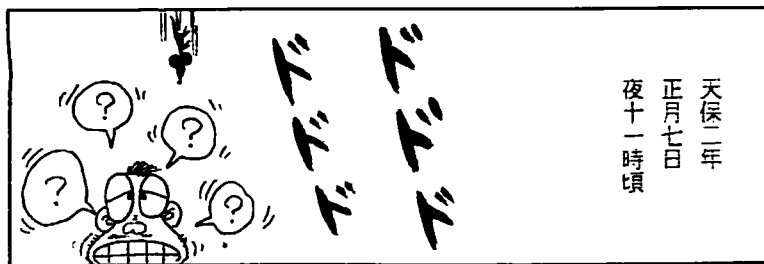
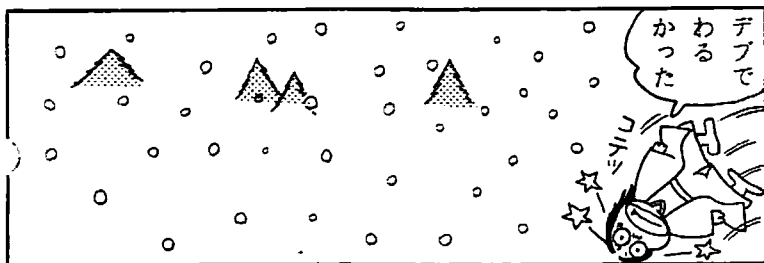
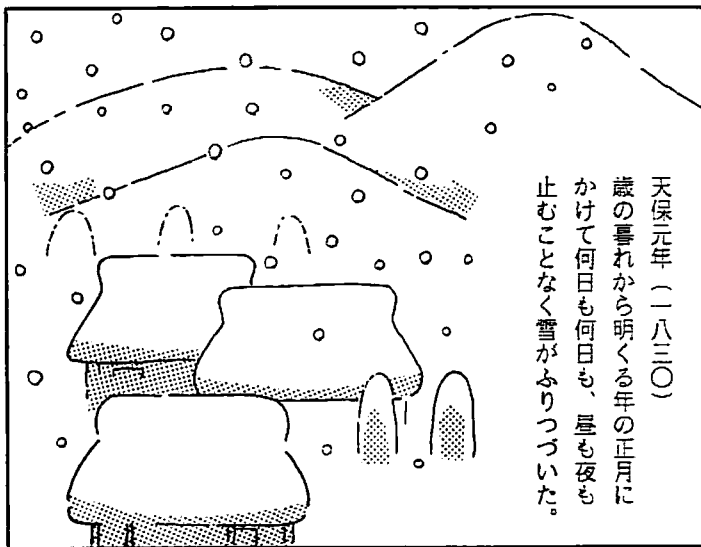




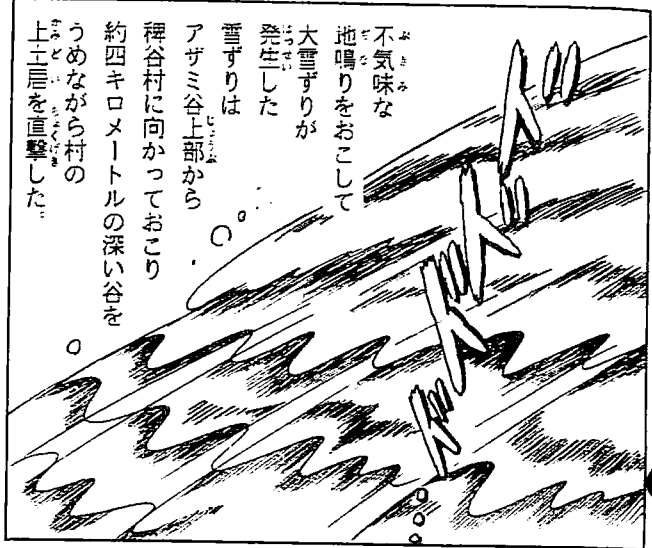
稗谷大雪ずり(稗谷)

ひえ だに おお ゆき

天保元年(一八三〇)
歳の暮れから明るる年の正月に
かけて何日も何日も、昼も夜も
止むことなく雪がふりつづいた。



天保二年
正月七日
夜十一時頃



不気味な
地鳴りをおこして
大雪ずりが
発生した
雪ずりは
アザミ谷上部から
稗谷村に向かっており
約四キロメートルの深い谷を
うめながら村の
上へ雪を直撃した！



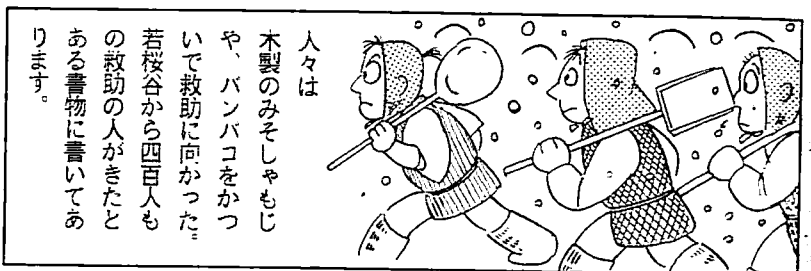
上土居に
大雪ずりが
あった
ようだ
ようすを
みに
いかなあ
しかし
夜もおそく
ようすがよく
分からなかった
ので本格的救助は
翌八日から
始まった！



みんな～
バンバコもったか～
では
いくぞ



よい
しょ



人々は
木製のみそしやもじ
や、バンバコをかつ
いて救助に向かった。
若桜谷から四百人も
の救助の人がきたと
ある書物に書いてあ
ります。



けむりが
目にしみる
なあ
涙がでる
よ！



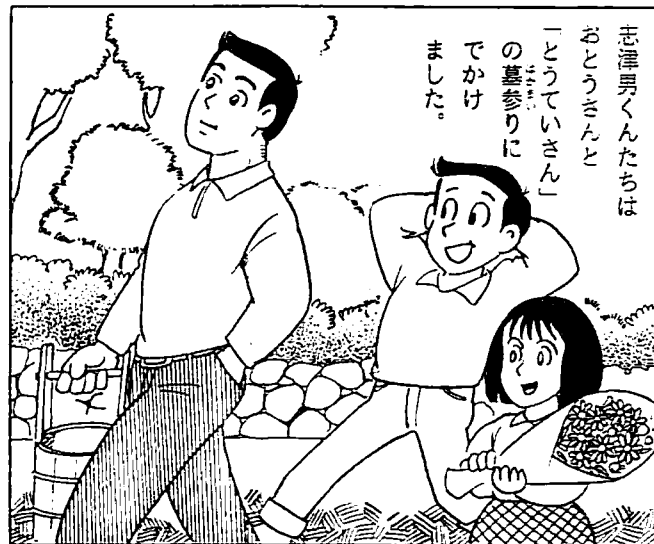
きてみる
丸やきにして
やるぞ
遺体は夜になると
オオカミがねらう
ので大きな火をたいて
守ったそうです。



雪ずりによる
被害は
こわれた家六軒
亡くなった人十九人
家畜 牛六頭

とうていさん（志谷）

志澤男くんたちは
おとうさんと
「とうていさん」
の墓参りに
でかけ
ました。



唐川山（からがわさん）のふもと
志谷（しや）から山志谷（やましや）へ
越える道の途中にある
医者の墓である。
志谷の人々は
盆（ぼん）と彼岸（ひがん）に
花やお供え物をもって
みんなでこの墓に
参るそうです。



墓石には
「永原東亭六郎墓」
と刻んであります。
東亭さんは
慶応元年、
奥さんは、明治六年
に亡くなりました。

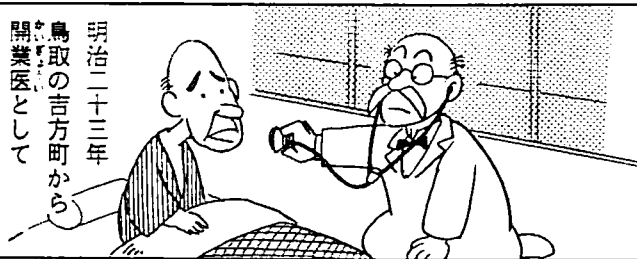


東亭は
鳥取藩（とりきはん）東分知家の
外科医、永原文圭の
弟で婦人病の名医で
あった。

どうして江戸末期に
志谷へやってきたの
かはナゾだな。



東亭の墓の横に
「岡三東泉の墓」
があります。
東泉は永原文圭の
次男で、東分知家の
内科医岡田省吾の
養子となり、
内科、外科医を
していた。



明治二十三年
鳥取の吉方町から
開業医として
日田にきて
明治二十九年
六十三才で
亡くなっている。

東亭さんと東泉さんは
おじ、おいの間柄だが
東亭さんの墓は
地元（じよん）の人が、
東泉さんの墓は
親族（いんぞく）の人が
たてたらしい。

あれ
この金属製の
鳥居（とりい）は
なに？

仏さんの前に
神さんの物が
おいてあるのは
おかしいよ



まえに上土居の
おばあさんに
きいた話を
してあげよう



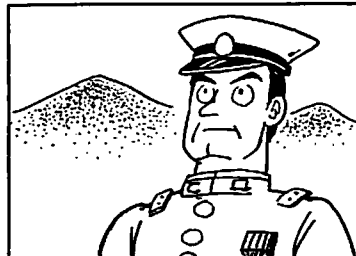
東泉さんは日田で開業しとんかった
お医者さんで、とっても評判のええ人
だったけど、重い皮膚病にかかれて
苦しんで亡くなられた。
亡くなる前に「志谷の生まれだから
志谷の村に葬ってくれ、それから皮
膚病で困った人がたのみにこられた
ら治してあげる」と
言われたさあな。
それで志谷に
まつてあるだ。



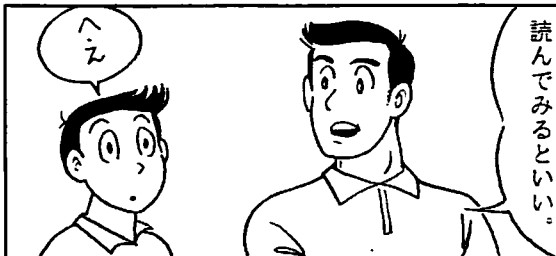
病気でこまった人が
願かけに采られるようになって
病気が治って願いがかなうと
神社にお礼をするのと
同じように鳥居をもって
参るようになった。
だから墓の前に鳥居が
あるようになったと
いうことだそうだ。



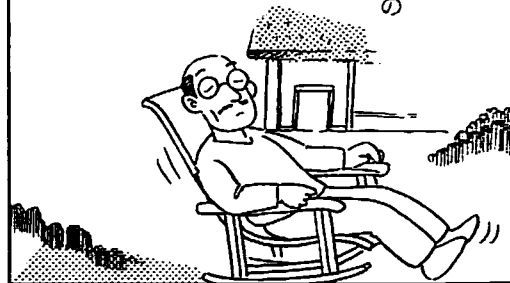
その後、
東泉の孫の「資」
(タスク)という
人は出世して
陸軍中将になった
そうだ。
第二次大戦後
戦犯として刑を
受けたということ
である。



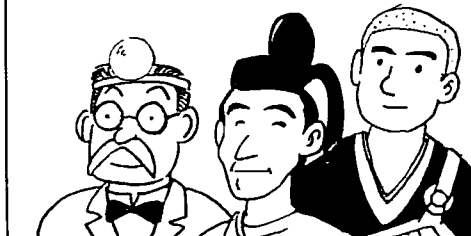
大岡昇平が
「ながい旅」という
小説に書いて
いるので
読んでみるといい。



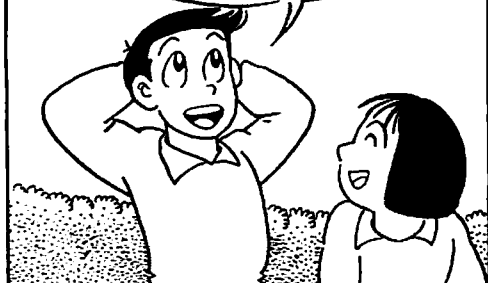
志谷には
東亭さん、東泉さんの
あとにも
衣川熊次郎と光蔵の
二代医者がおられ
光蔵の実父である
東大路の医者、石原
玄長も晩年
寄留しておられた。



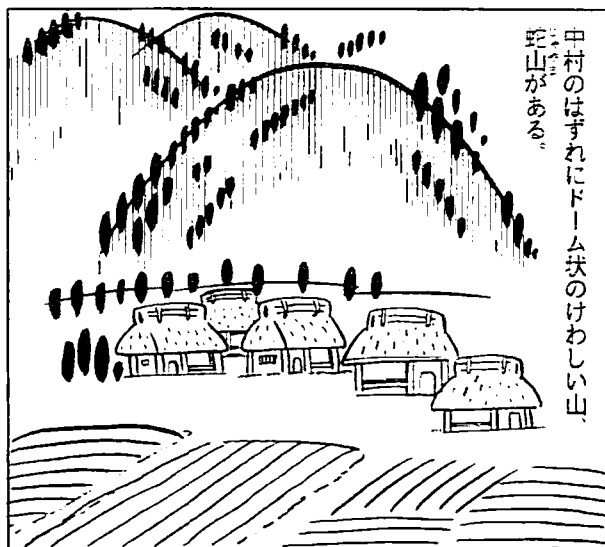
医者あり
細見神社の神官あり
妙光寺の僧侶あり、
最初の小学校
志谷小学校ありで
こんなにそろった
村はめったにないと
言の人は
じまんして
いたそうなの



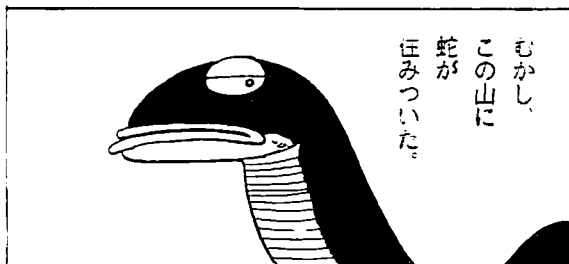
へえ
おもしろいね
もっと村について
いろいろ
知りたく
なったなあ



蛇山と観音さま(中)



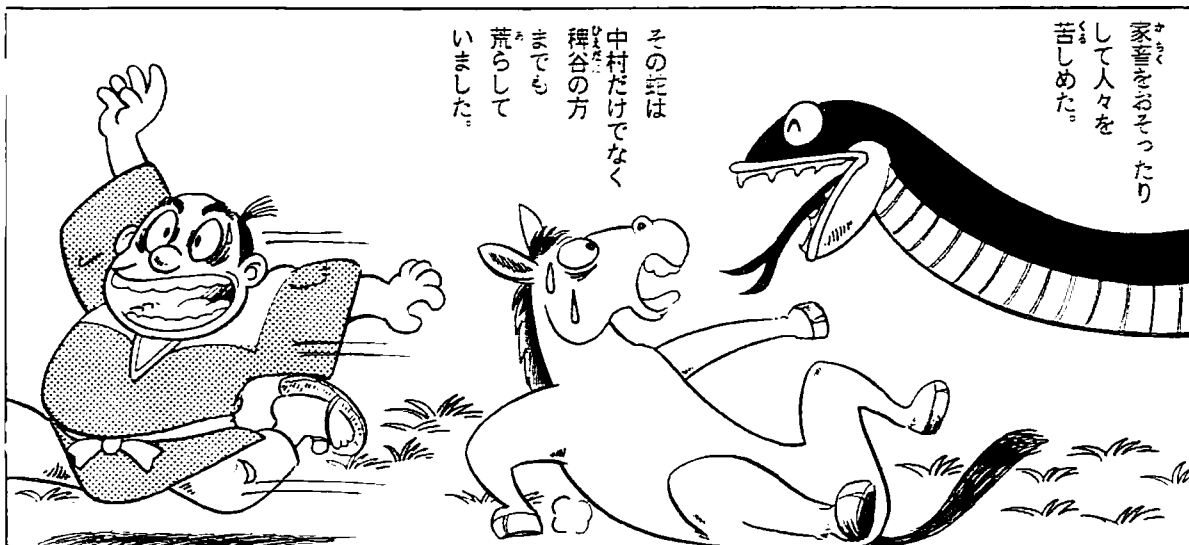
中村のはずれにドーム状のけわしい山、蛇山がある。



むかし、この山に蛇が住みついた。

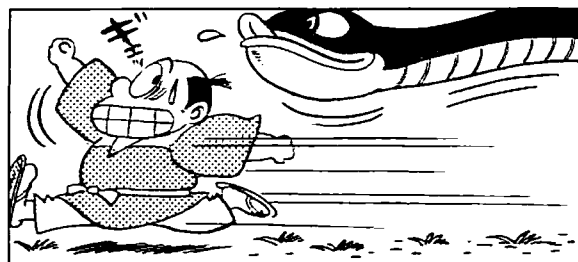


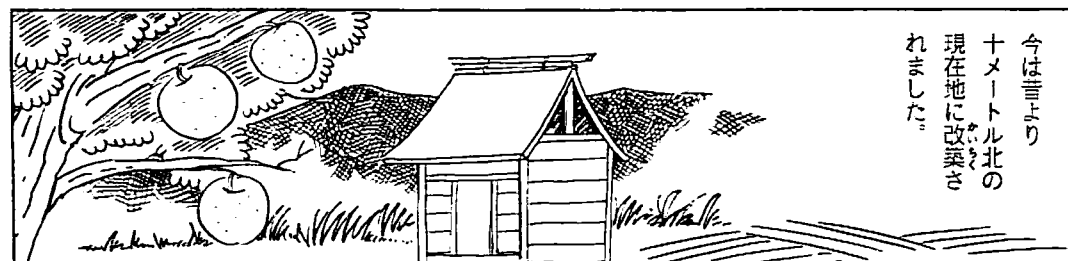
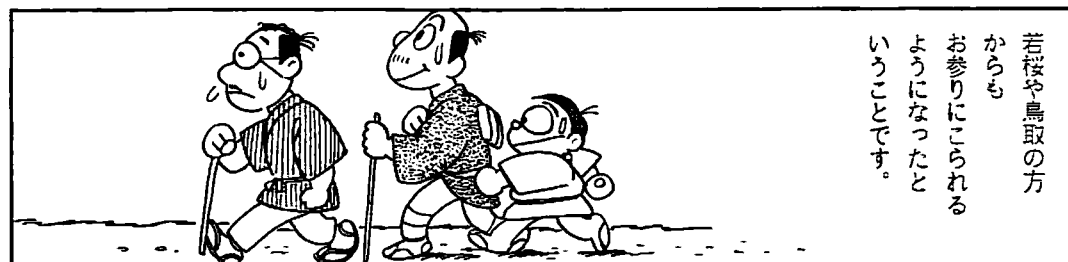
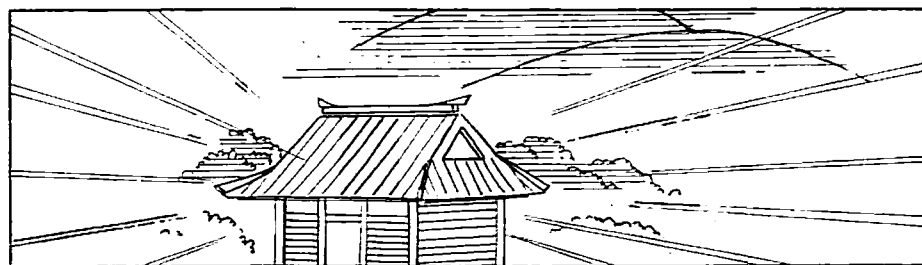
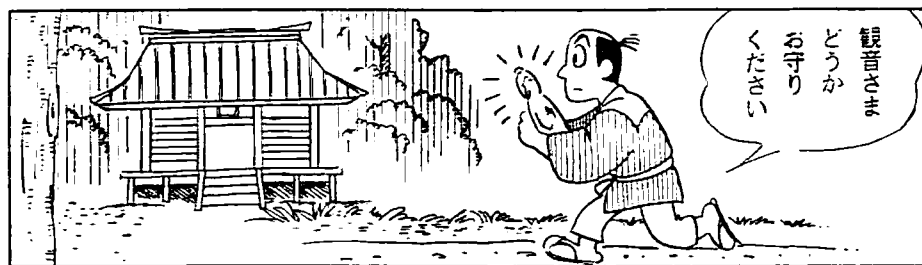
夜になると村里におりて作物を荒らし



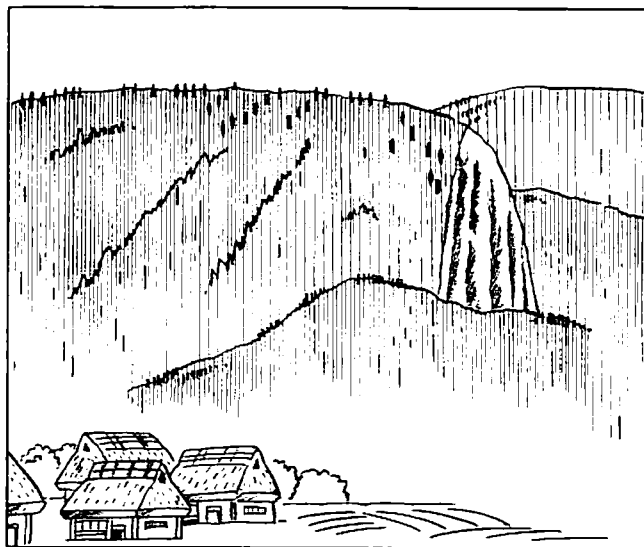
家畜を食ったりして人々を苦しめた。

その蛇は中村だけでなく、隣の村の方までも荒らしていました。

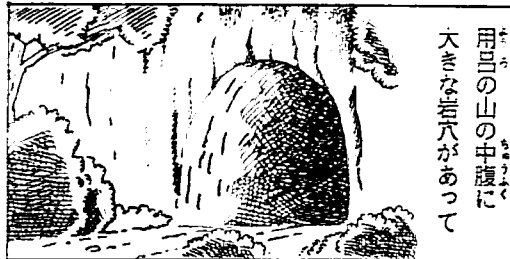




こんげんさんの名水と二つ目のウグイ (用呂)



用呂の山の中腹に
 大きな岩穴があつて



四社権現 (岩合神社)
 がまつつてあります。



この四社権現の
 おかげで、村の
 下三に立派な
 清水が湧き出て
 います。

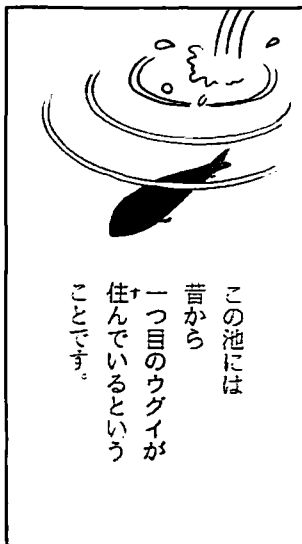


なんちゅう
 うめえ
 だいや

その清水をたたえた
 お手洗いの池は
 どんなに干ばつに
 なつても涸れた
 ことがない
 ことです。



この池には
 昔から
 二つ目のウグイが
 住んでいるという
 ことです。



たいへん
 冷たい水なので
 村の人たちは
 そうめんを冷やしたり
 スイカを冷やしたり
 します。



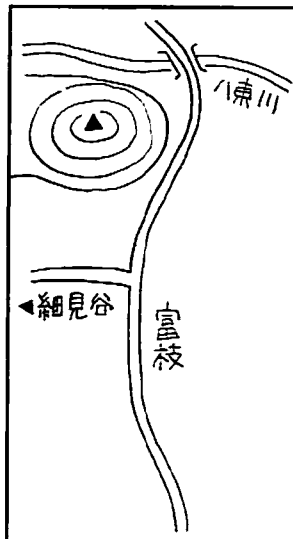
富 とみ

枝 えだ

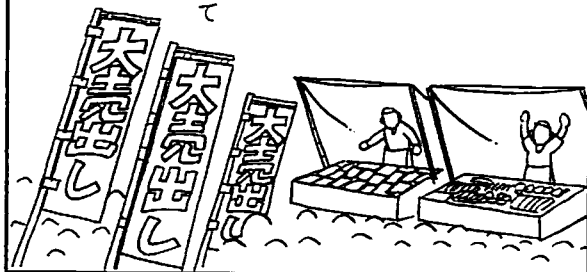
市 いち

(富枝)

八東町はいぜんの丹比、八東、安部の
三ヶ村が合併してできた町です。
まだ丹比村といっていた頃の富枝の村は
商工業がさかんで二十軒ちかい商店が
並んでいたそうです。



この富枝で毎年
盆前と正月前に
にぎやかな市が
たった。
(才代とか徳丸
にもあった。)
場所は細見谷入りぐち
交差点から東に
百メートルくらいの
ところにテントをはって
のぼりを立てて
ずらりとお店が
並んだそう。



こどもたちは
この年に二回の
市がとて
たのしみだった
そうです。

もうすぐ
市だなあ

肩もみ
しようか

おう
おう

これで
ゲンジが
買える



こどもたちの
たのしみは
たいやき屋、
キャンデー屋、
オモチャ屋

オモチャ屋

おじさん
ゲンジの
大判
ごせ

などで
あった
そう。

この
風
ほしい
な

ブリキの
おもちゃ
がええ

人形
かって



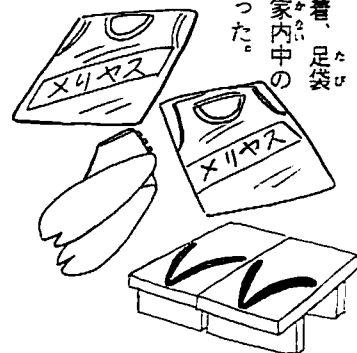
大人たちも
盆用品、正月用品を
この市でそろえた。

かあ
ちゃん
この
コシマ
キどう

お客さん
そりゃ
 Fondシ
だ



呉服屋では
メリヤスの肌着、足袋
下駄屋では、家内中の
はきものを買った。



金物屋の店先では
農作業用のカマ、クワ、
ナタとかノコギリなども
よく売れた。

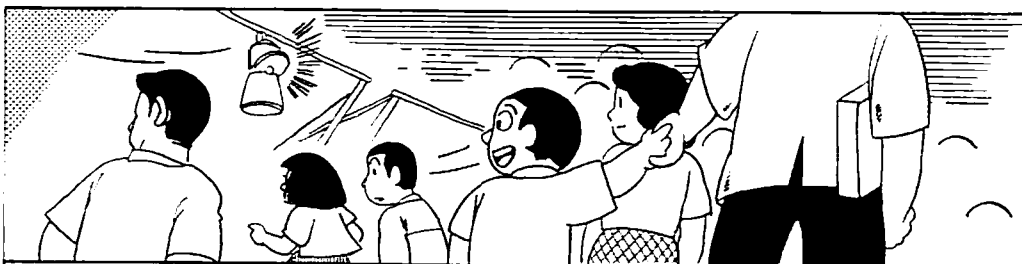
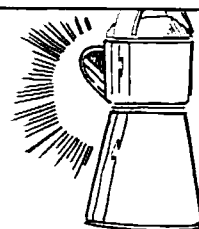


なかでも一番蔵勢がよく
人を楽しませてくれたのが
谷口旅館の前に店を
だしていたカラツ屋さん
だった。

皿、茶碗、
どんぶりなどの
日用陶器を
いせよく
売りさばいた。



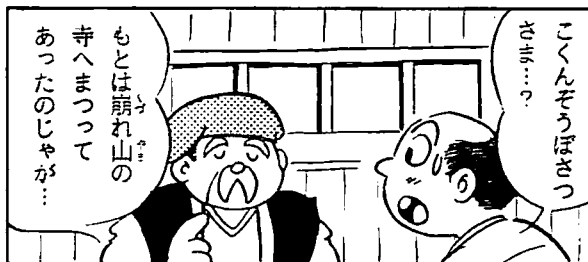
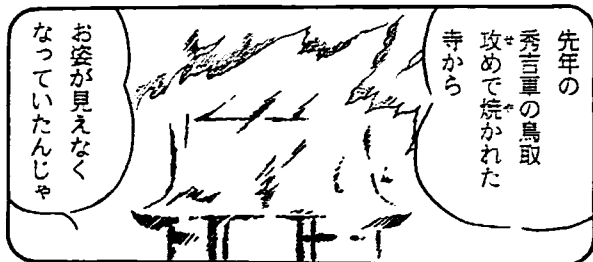
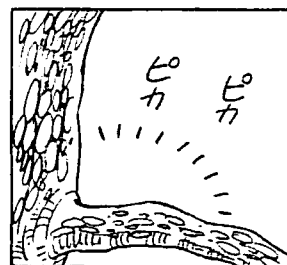
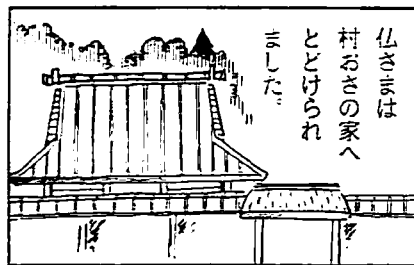
夕方になると
店先にガスランプを
下げて夜店の
にぎわいを
もりあげた。

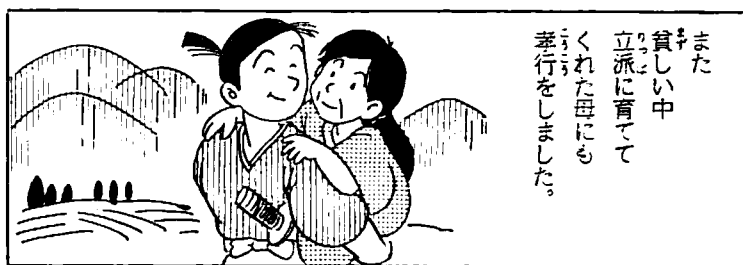
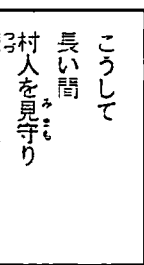
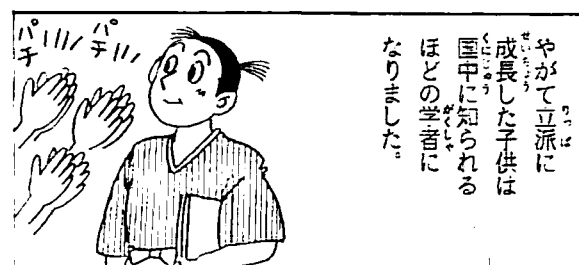
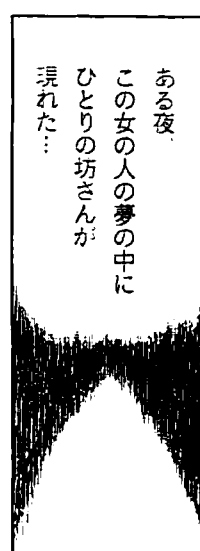
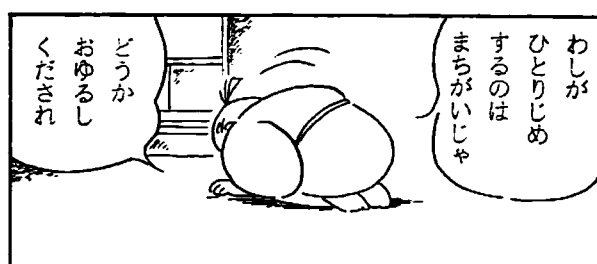
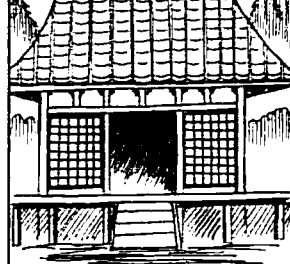
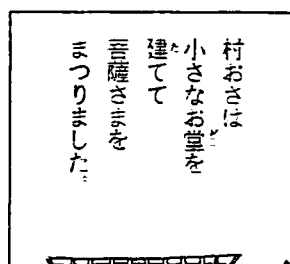
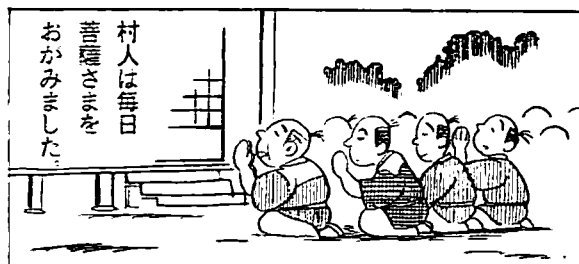


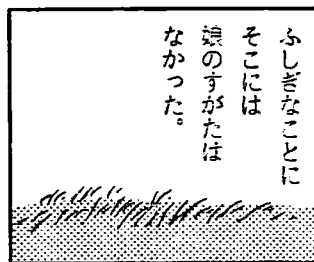
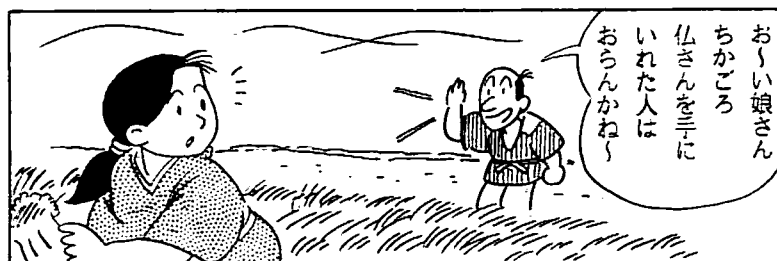
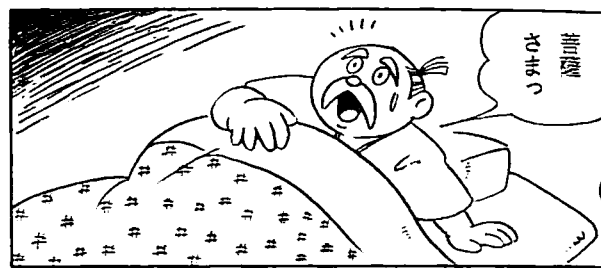
田舎の人たちに
たのしみと品物を
届けていた市も
時代の進展とともに
姿をけして
いきました。



虚空蔵さん(日田)

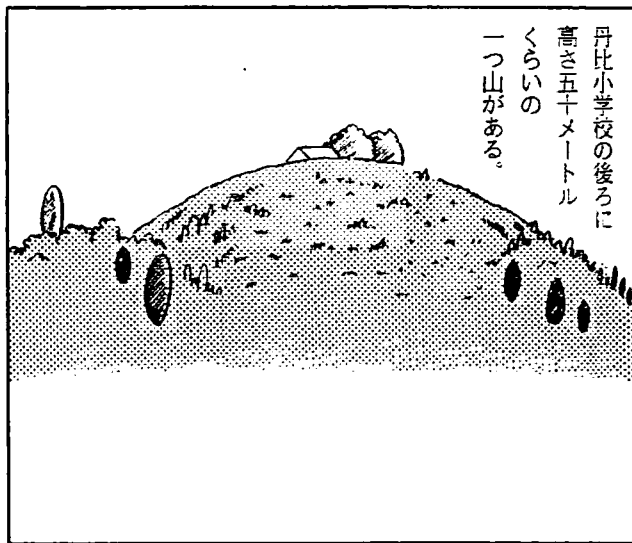






大関一ツ山おおせきひとやま(北山)

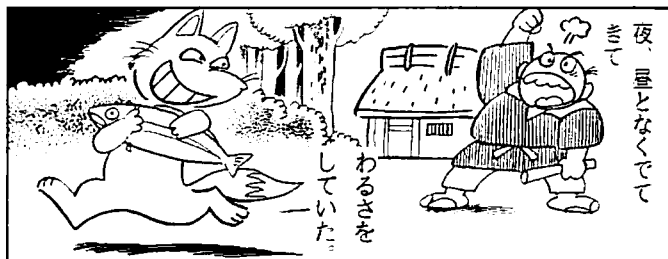
丹比小学校の後ろに
高さ五十メートル
くらいの
一ツ山がある。



むかし、たぬき魔山城主丹比孫之丞の
お姫さまのお屋敷があつたらしいが
孫之丞が滅んだあと、この山に
きつねがたくさん住みついた。



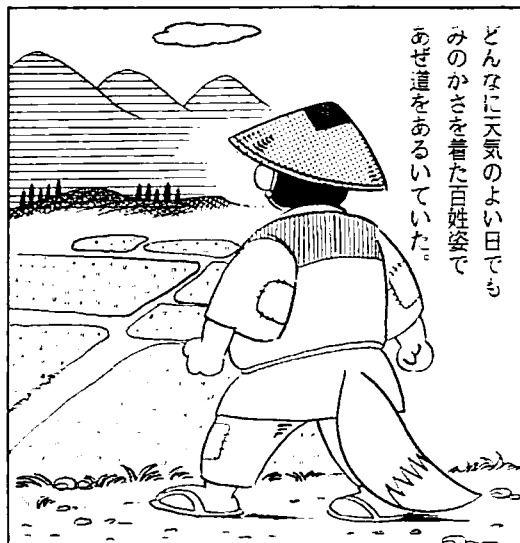
夜、星となくでて
きて



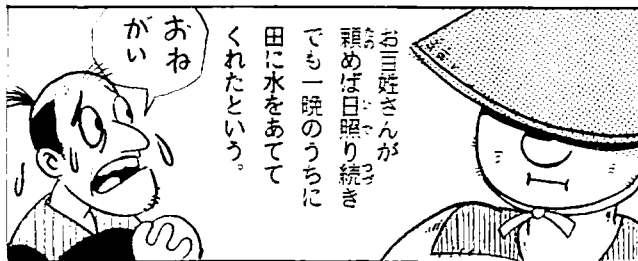
ところが
次郎左衛門という
体の大きなキツネは



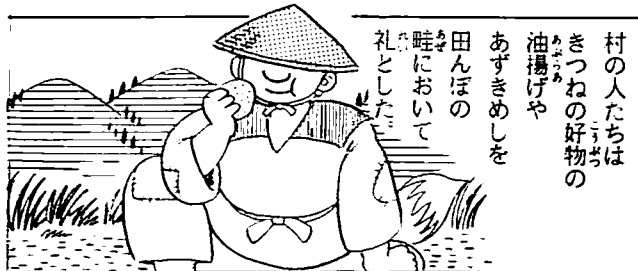
どんなに天気の良い日でも
みのかさを着た百姓姿で
あぜ道をおるいていた。

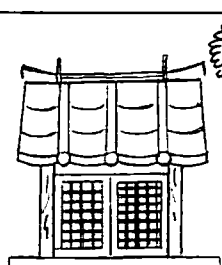
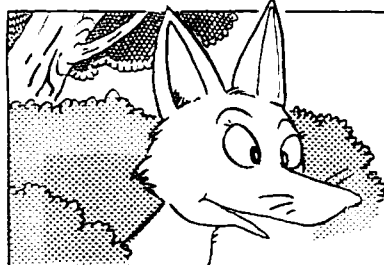
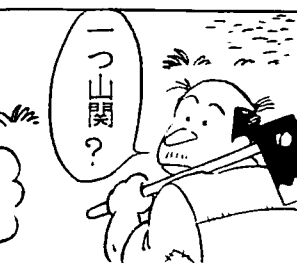
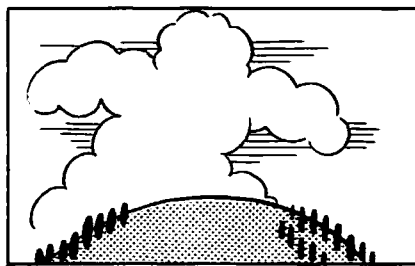
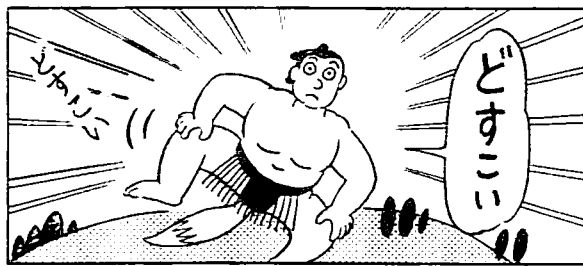
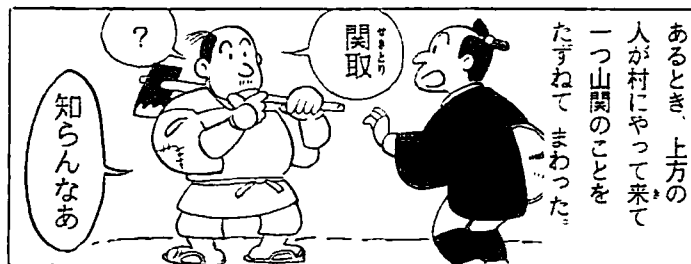


お三姓さんが
頼めば日照り続き
でも一晩のうちに
田に水をあてて
くれたという。



村の人たちは
きつねの好物の
油揚げや
あずきめしを
田んぼの
畔において
礼とした。

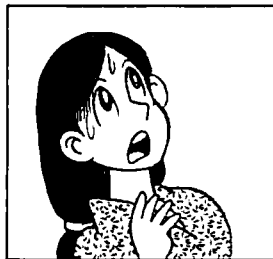
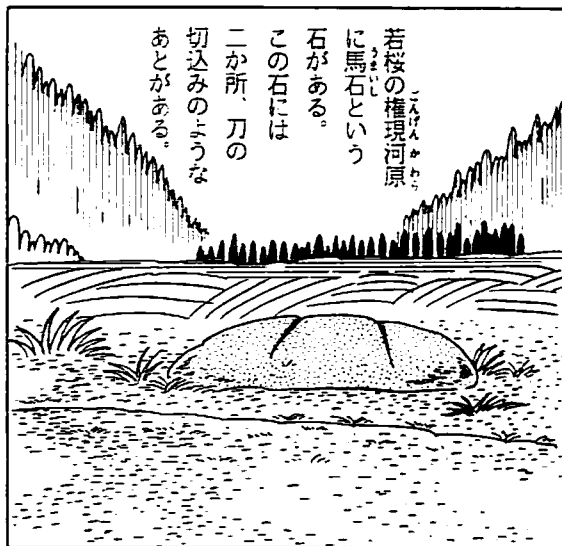


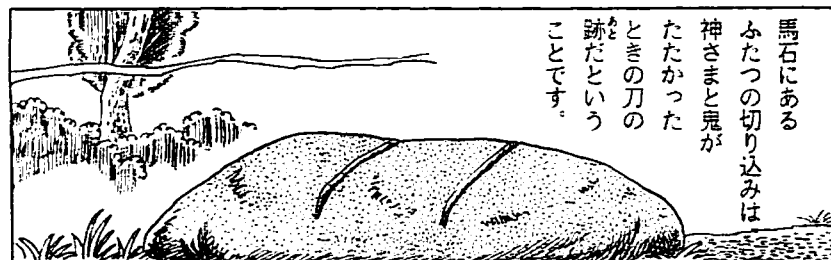
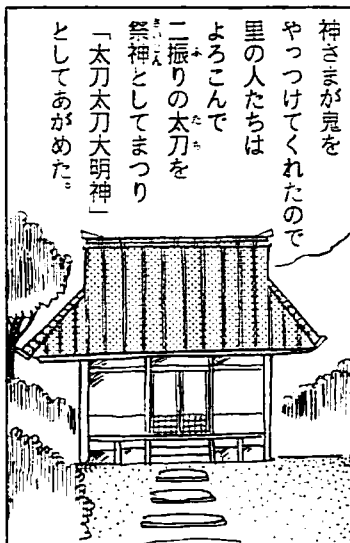
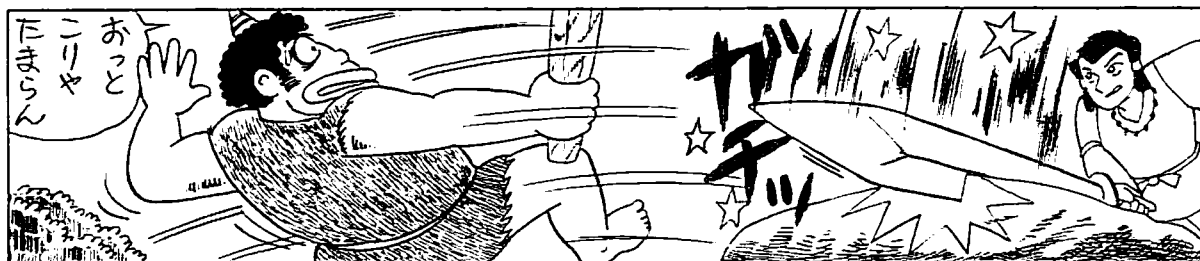
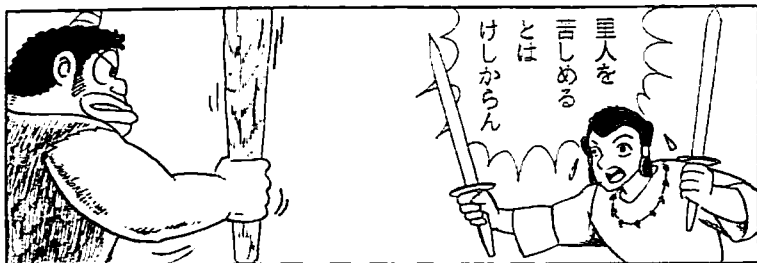


一つ山関が亡くなった
のを知った村人は山の
上に祠を建てて次郎左
衛門をまつたという
ことです。



太刀太刀大明神（重枝）



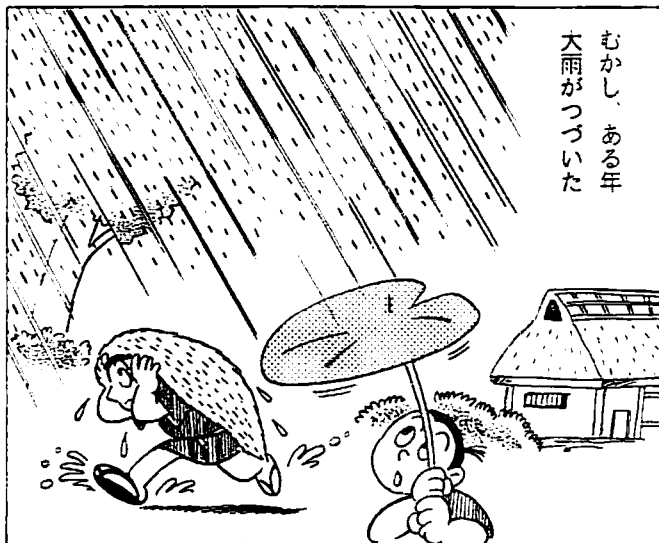


流された島村（島）

今は島村と
日田村とはなれて
いますが
むかしは
いっしょの村だった
という
おはなしです。



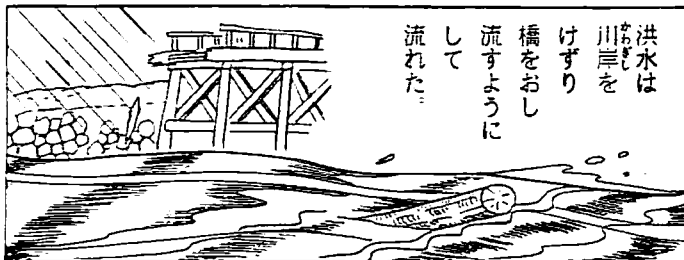
むかし、ある年
大雨がつづいた



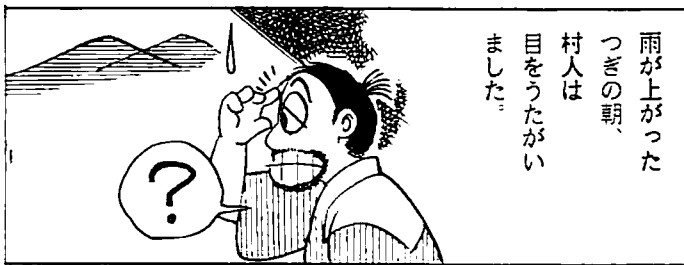
八束川は水が増し
うずまいてまるで
竜があられるような
大洪水となった。



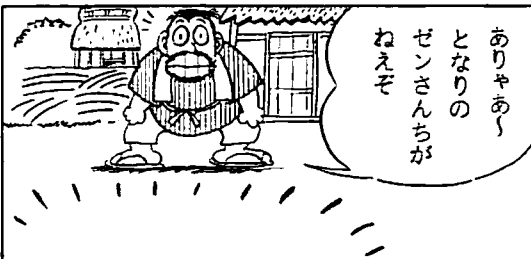
洪水は
川岸を
けずり
橋をおし
流すように
して
流れた。



雨が上がった
つぎの朝、
村人は
目をうたがい
ました。



ありやあゝ
となりの
ゼンさんが
ねえぞ



ゲッ
ゲッ
ゲッ

あれっ
ひょっと
して



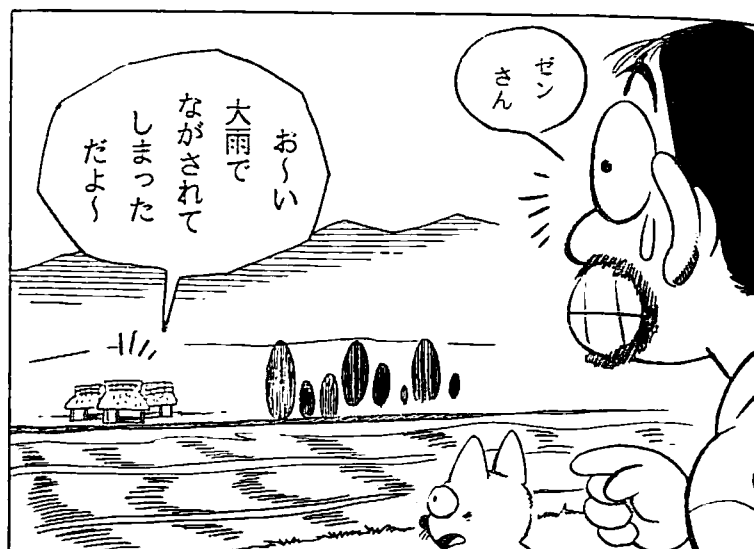


その後八栗川に丸木橋をかけて行き来をしていました。



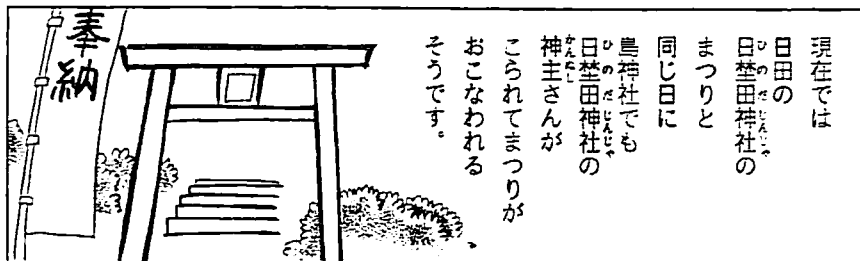
それまで日田村の一部であった島は大洪水で流されてしまったのでした、その時から「島」とよぶようになったということです。

ずいぶんと流されたもんだなあ

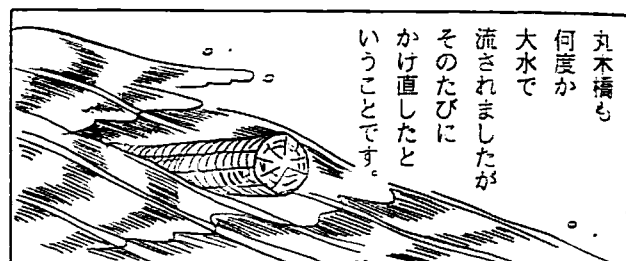


ゼンさん

大雨でながされてしまっただよ



現在では日田の日笠田神社のまつりと同じ日に島神社でも日笠田神社の神主さんがこられてまつりがおこなわれるそうです。



丸木橋も何度か大水で流されましたが、そのたびにかけ直したということです。



すごい話があるもんだね

そうだね、災害はこわいね



そのしょうくに日笠田神社の大鳥居は島村の山根繁巳さんと田中嘉男さんが寄進されたことが刻んであります

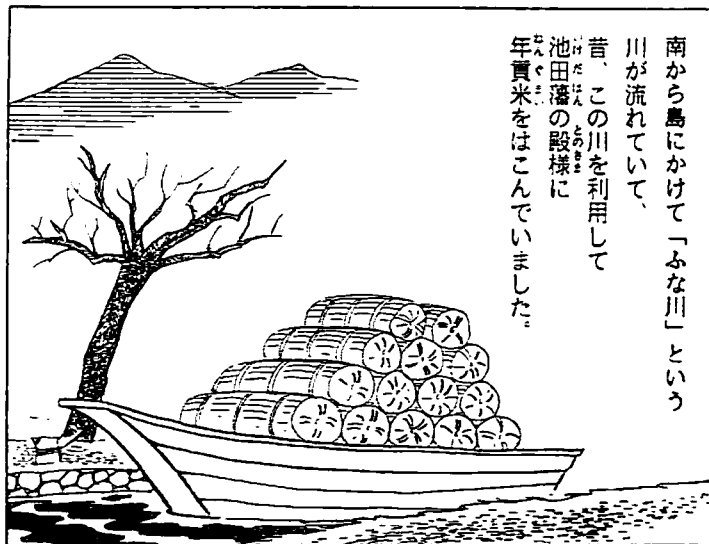


むかしは島の村は日笠田神社の氏子だったんだよ

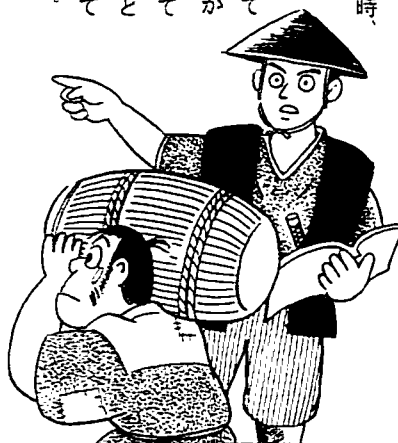
へえ

船川と八東の鬼（南）

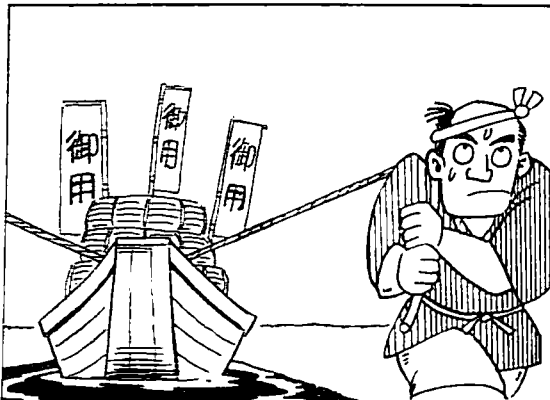
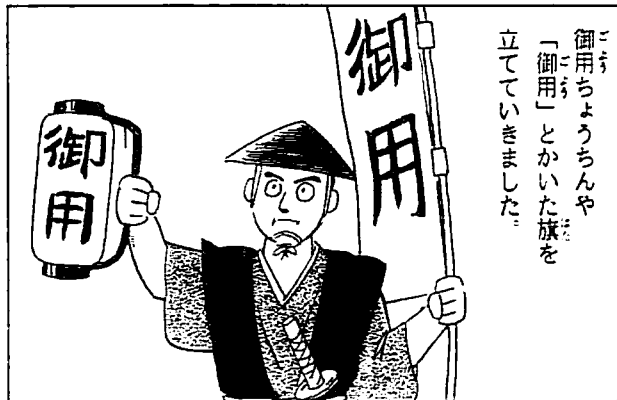
南から島にかけて「ふな川」という川が流れていて、昔、この川を利用して池田藩の殿様に年貢米をはこんでいました。



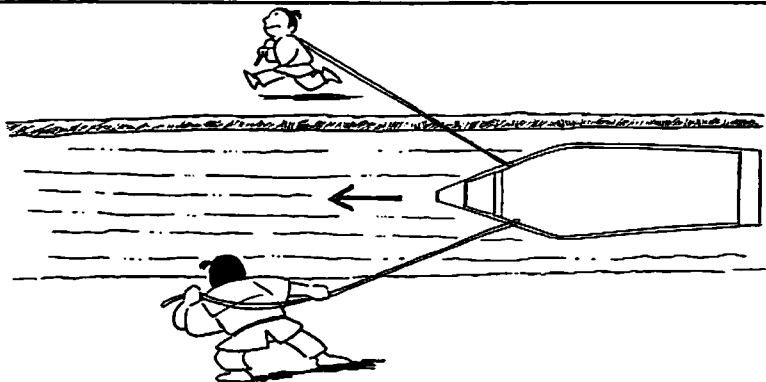
その当時、苗字や刀を許されていた人が指揮して運んだといわれています。



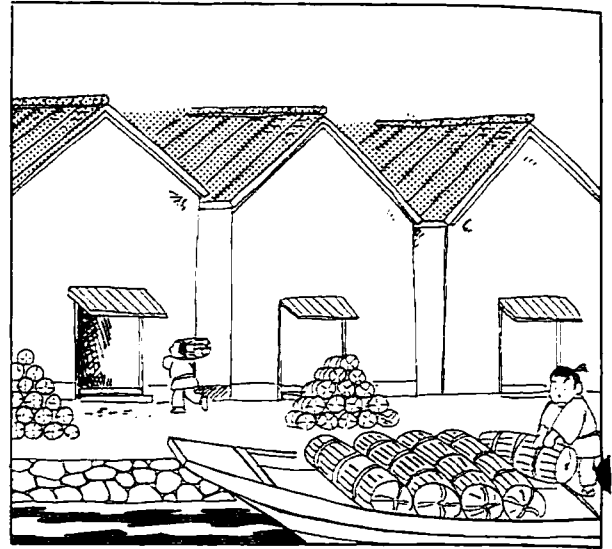
御用ちようちんや「御用」とかいた旗を立てていきました。



米をつんだ高瀬船につなをつけて両岸から人がひっぱって

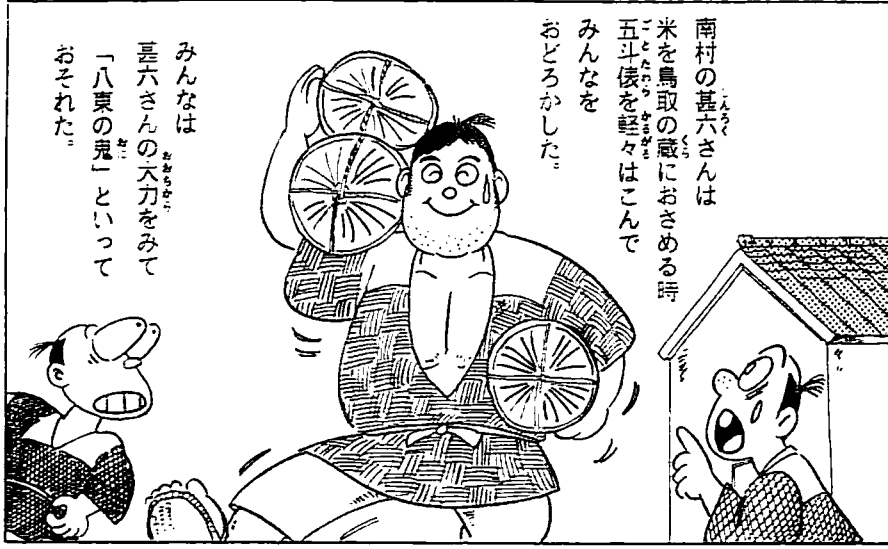


そうやって、八東川まででて鳥取の方へ下っていったのです。



南村の甚六さんは
米を鳥取の蔵におさめる時
五斗俵を軽々にはこんで
みんなを
おどろかした。

みんなは
甚六さんの大力をみて
「八束の鬼」といって
おそれた。



年貢米は
米を一升俵で
はかり直して
不足がないか
たしかめた。



おい
ちゃんと
かぞえて
いるか

あんまり
早くて
わしには
ついていけん



三く
しねえと
日が暮れて
しまい
ますで…
わはは



ん…
それも
そうだな

わしも
はやく
おわりた



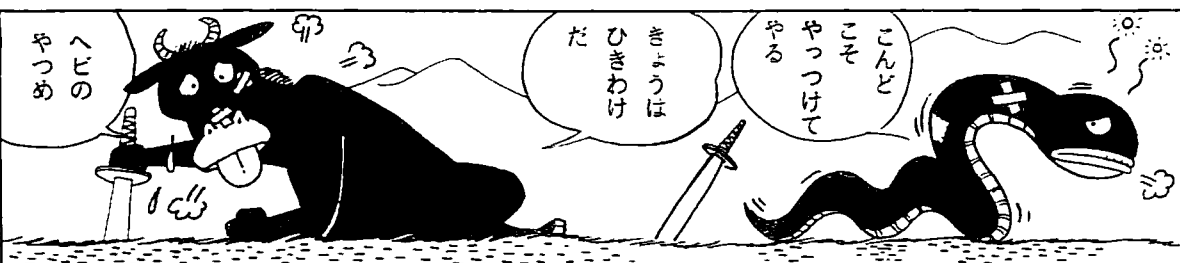
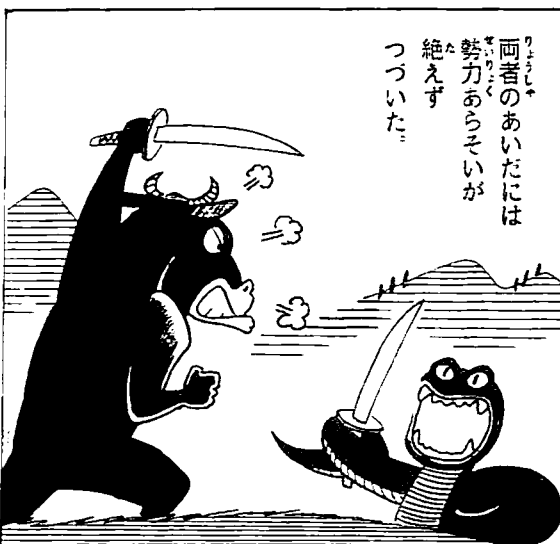
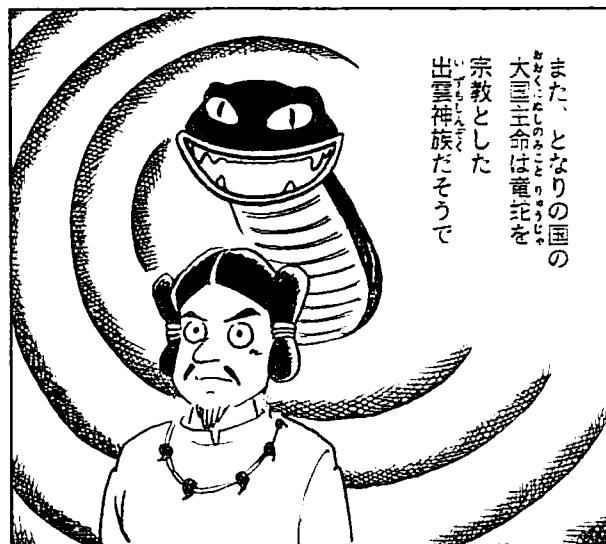
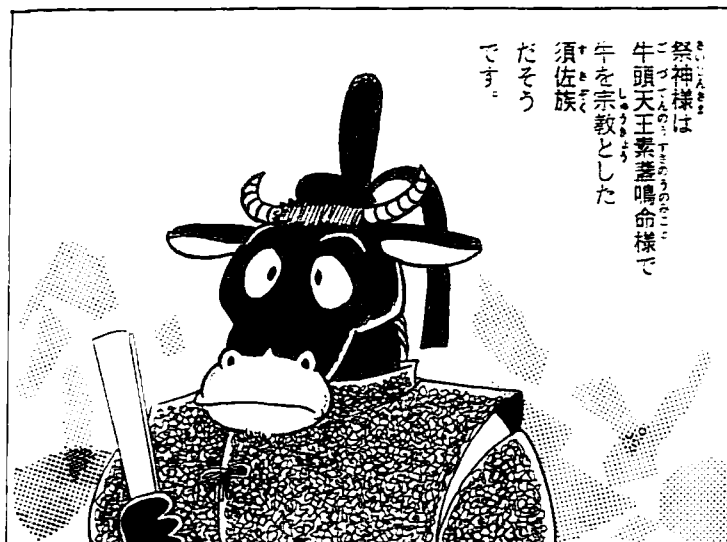
お百姓さん
たちは
十回に一回くらい
ごまかして
「カラ」を
かぞえて
いたそうです。

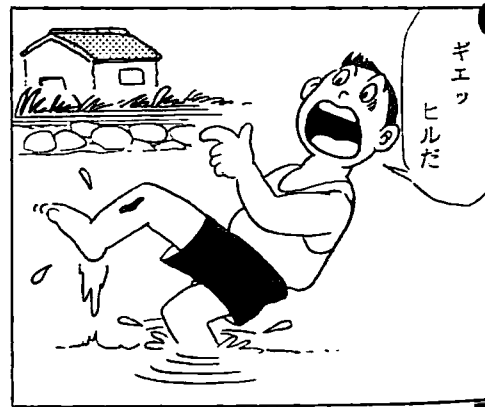
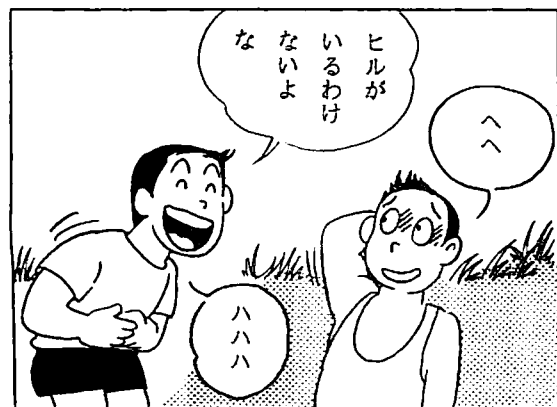
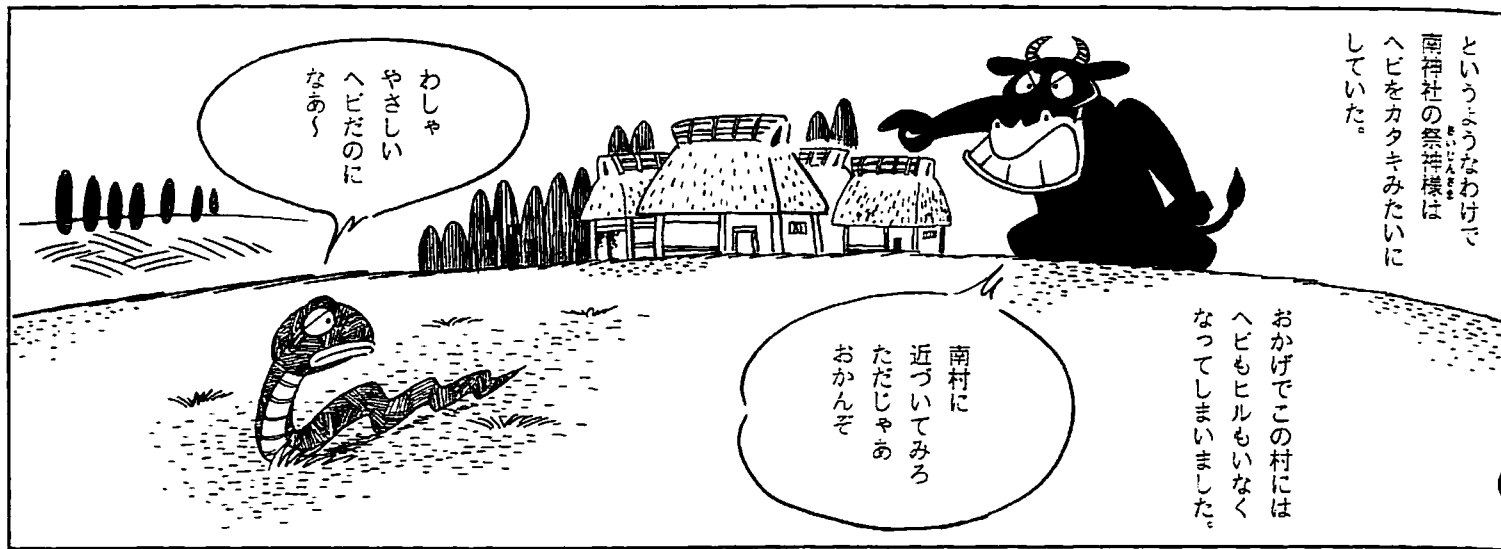
もう

おわった
おわった
これで南村に
帰れるで…



南神社の氏子族（南）





新井手づくり(徳丸)

上徳丸の山田次郎兵衛さんは
天保十一年(一八四〇)大庄屋に任命されました
上徳丸は
かねてから
水便利が
悪く、
日照りが
つづくと
田んぼの稲が
枯れてしまって、大変困って
いました。



次郎兵衛さんは
なんとか水便利を
良くしたいと考え
南村の中庄屋
杉原権四郎さんや
島村の庄屋さんと
いろいろ相談を
しました。



細見川の
水だけじゃあ
たりないので、
八東川から
新しく
水路を
作るより
ほかに
方法が
ないと
いうことに
なって、
殿様に
願ひ出る
ことに
しました。



残念じゃが
財政が苦しい



すまんが
がまんしてくれ



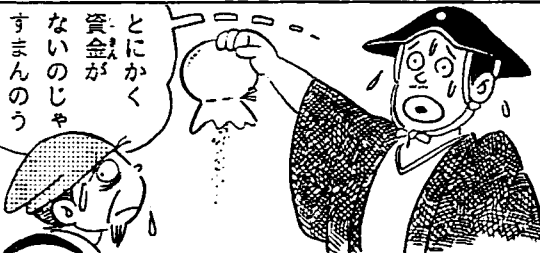
そう
おっしゃられ
ましても

やつこのことで御普請奉行の紫野為三郎や
御吟味役の二宮源蔵が、
どんなに水便利が悪いか調べに
やって来ました。

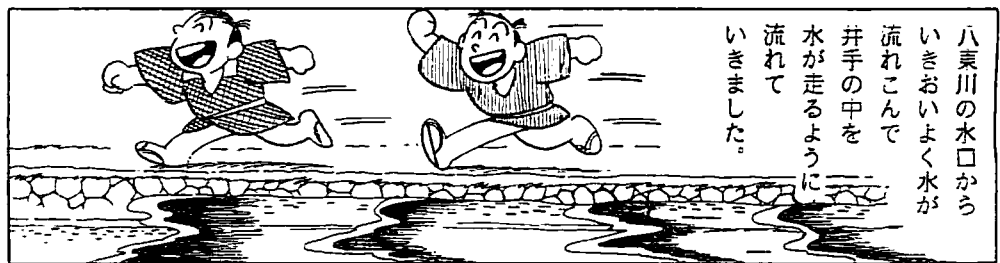
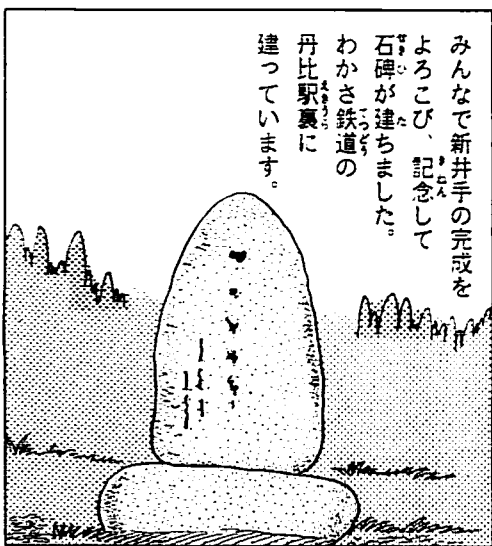
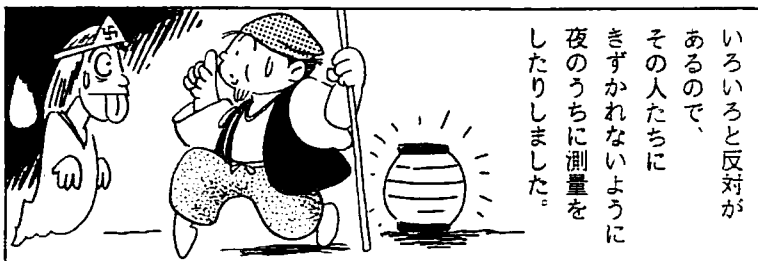
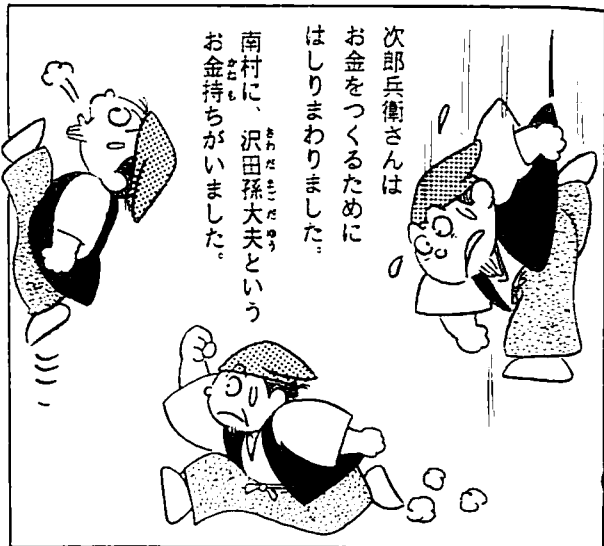
次郎兵衛さんは
困っているようすを
くわしく話してお願ひしましたが
なかなか許可されそうにありません。



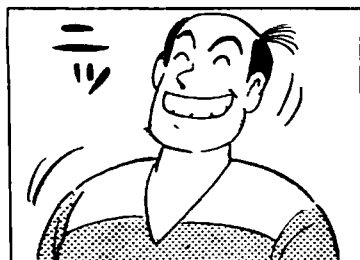
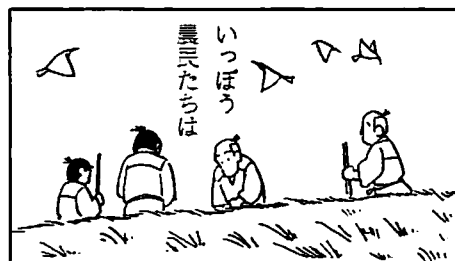
困った
なんとか
ならんか

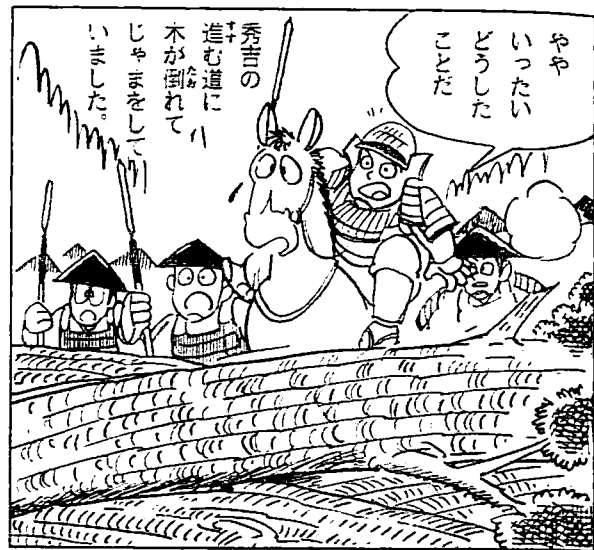


とにかく
資金が
ないのじゃ
すまんのう

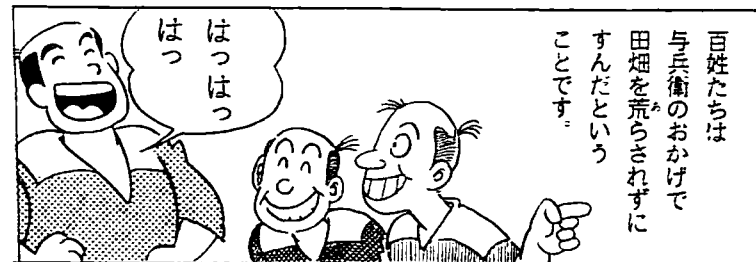
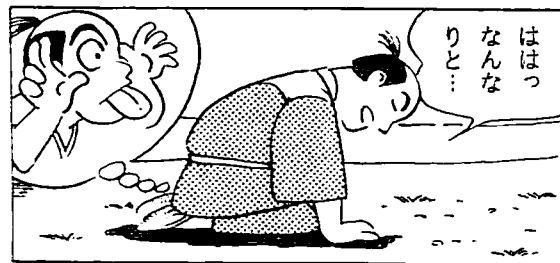


百姓大将与兵衛（徳丸）

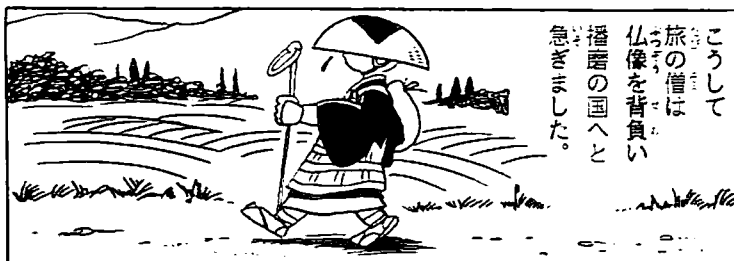
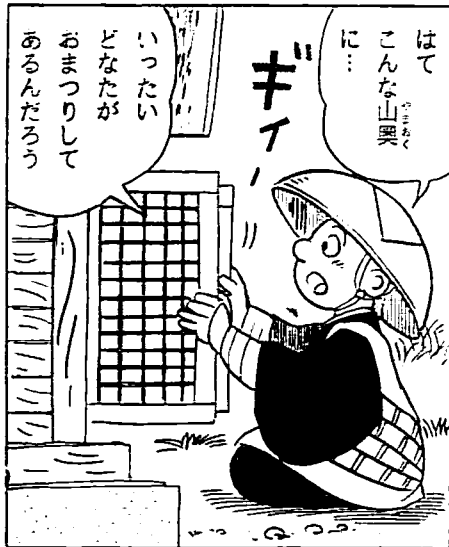
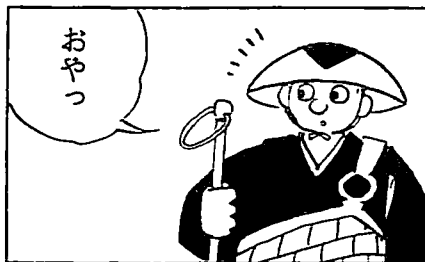


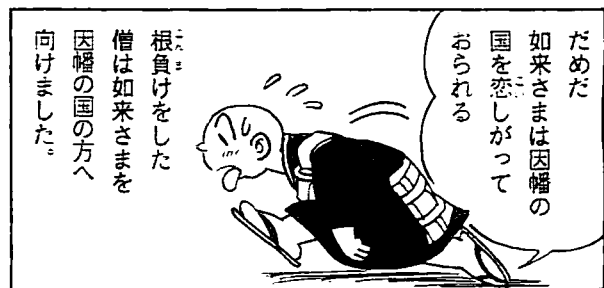
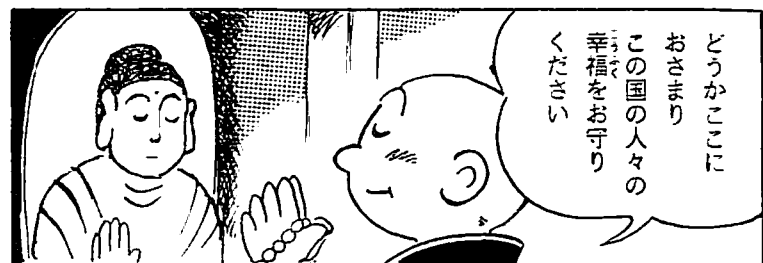
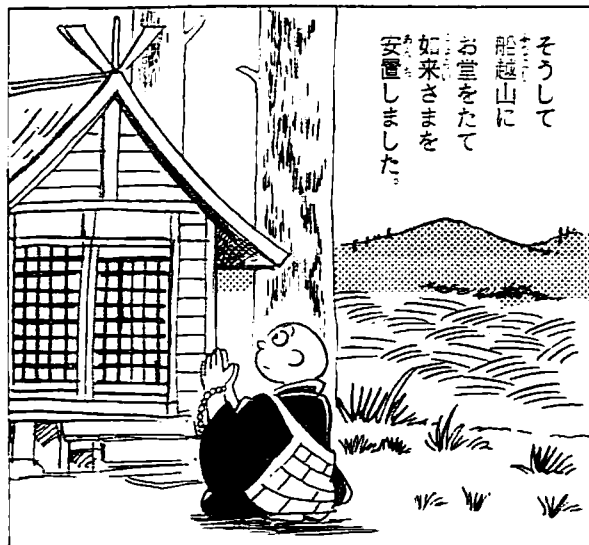
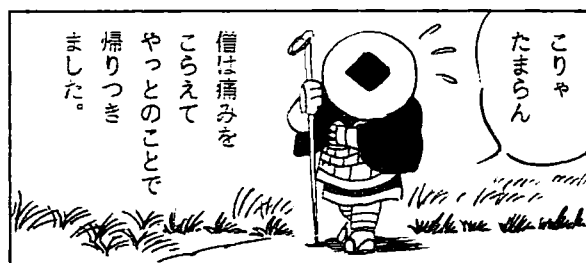


一方、夜になると…

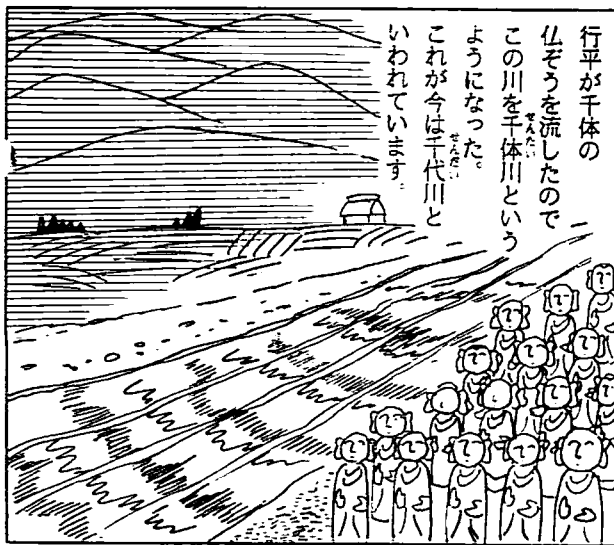


皆^{かい}原^{はら}薬^{やく}師^し（皆原）

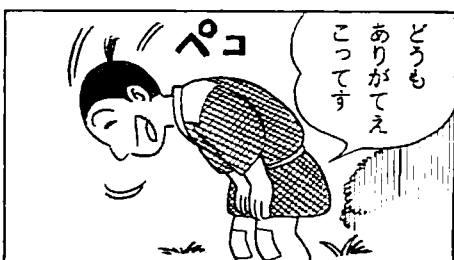
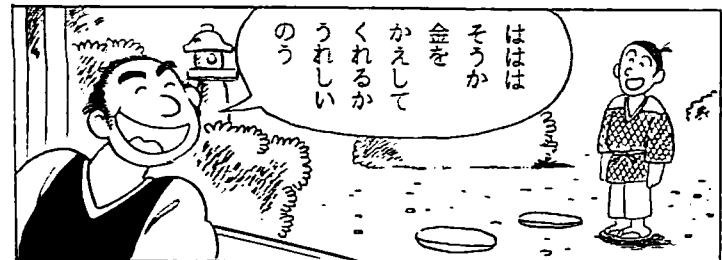
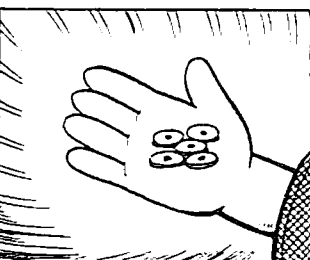
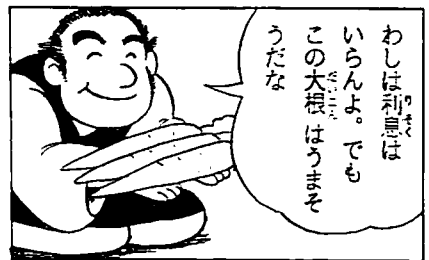
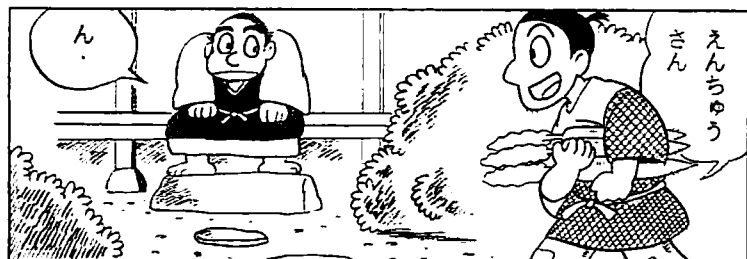
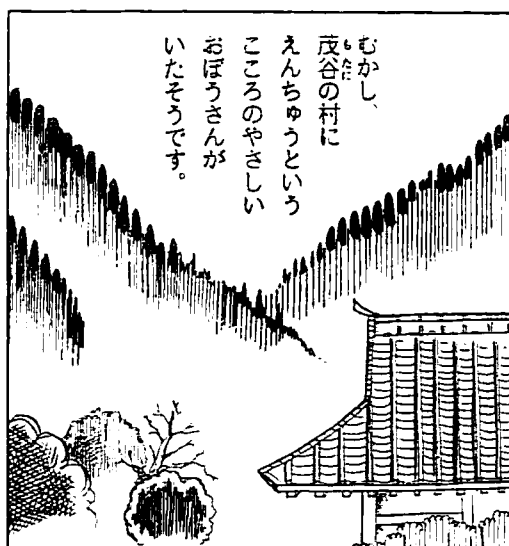


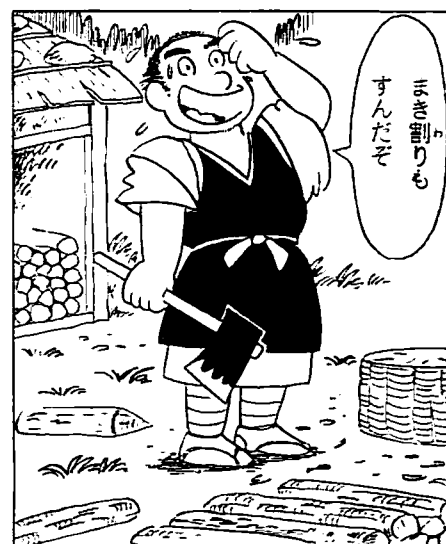
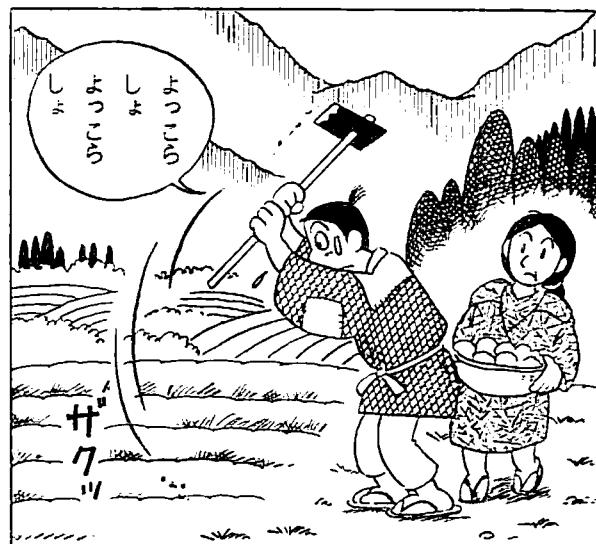
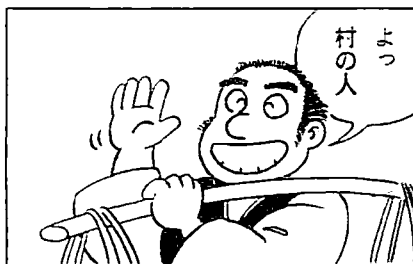


地福寺の仏像 (奥野)

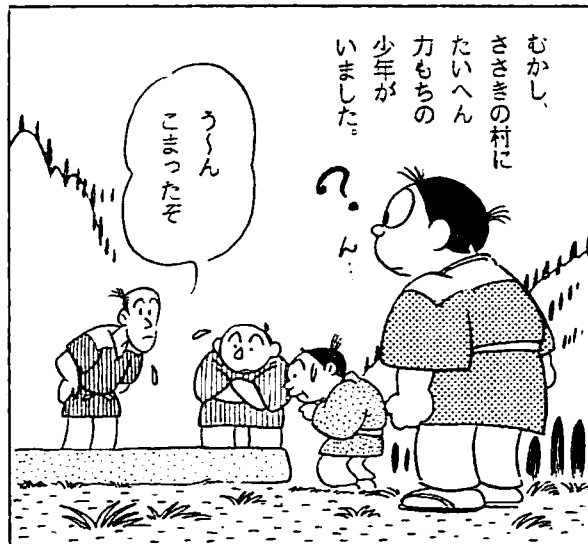
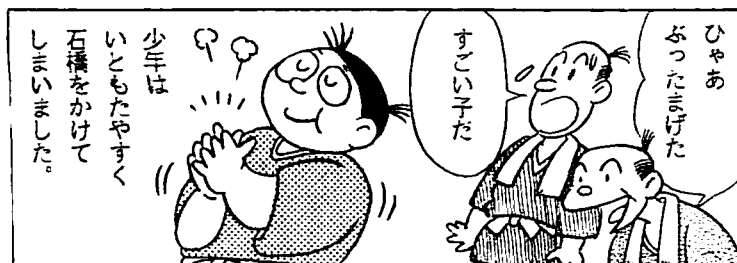
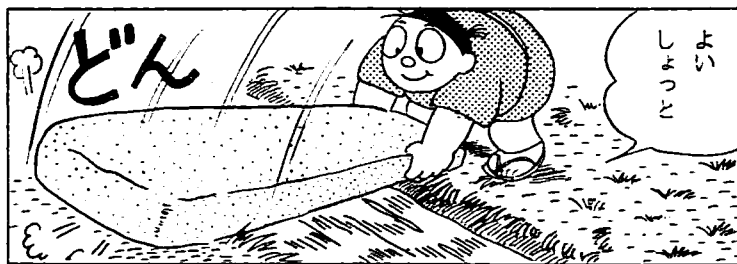
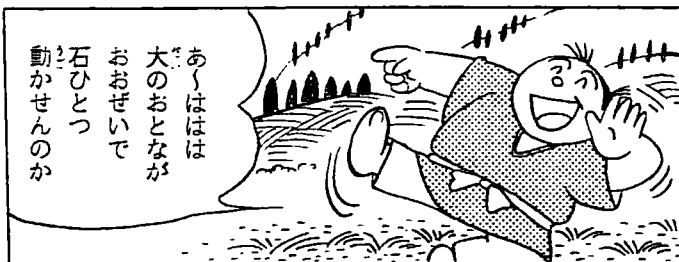


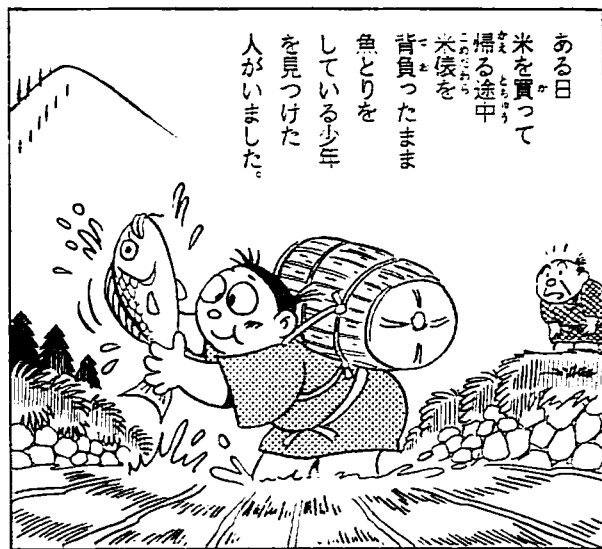
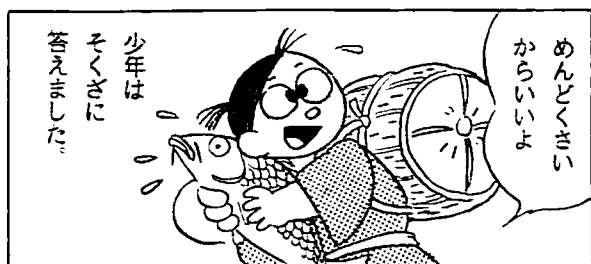
えん ちゅう
円智の金かし（茂谷）



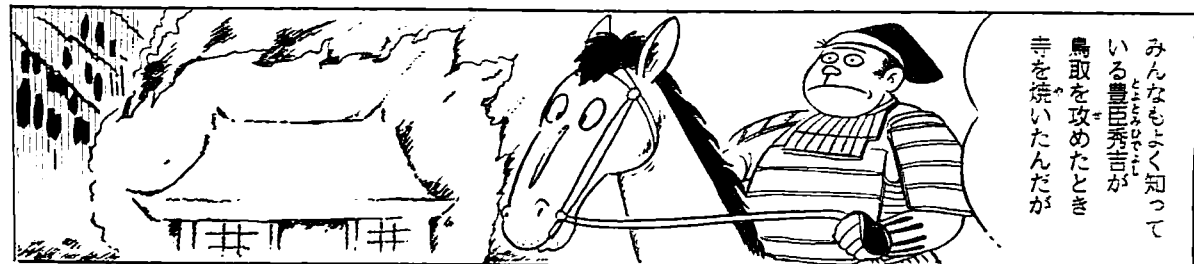
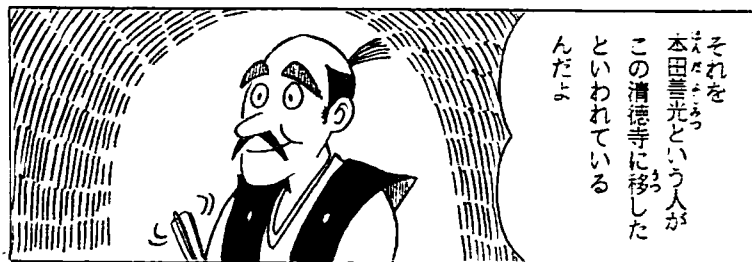
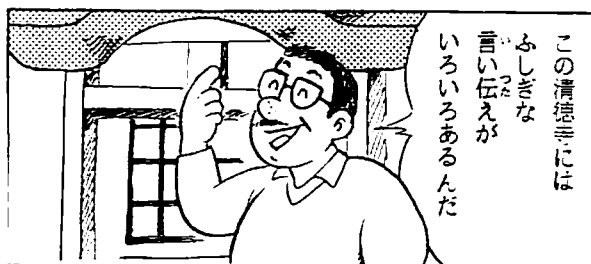


さ さき
佐崎のすもうとりの話 (佐崎)





清徳寺のふしぎ（清徳）





もうひとつ
同じような話が
あるんだ



あー
よかった
ほっ



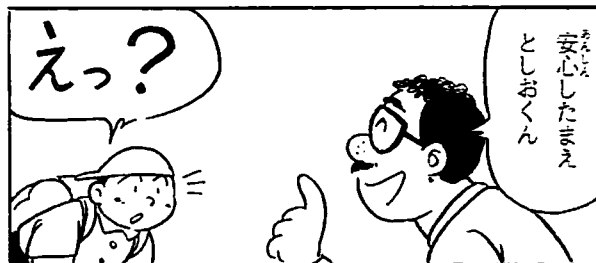
如来さまはご自分で
アンタの岩にのがれて
おられたんだよ



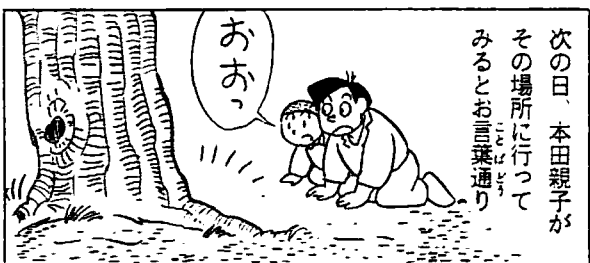
秀言って
ひどいやつだ
如来さまが
丸焼けじゃ
ないか
そうだ そうだ



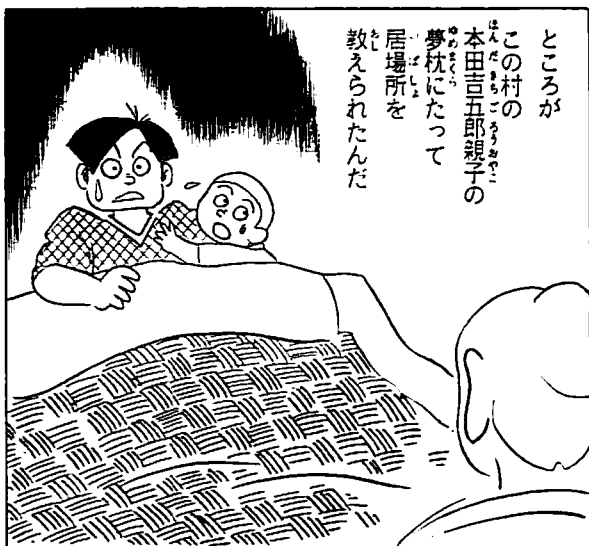
明治二十三年に
やはり寺が焼け
たんだ...
ところが
焼け跡には如来
さまの姿はみえず



安心したまえ
としおくん
えっ?



次の日、本田親子が
その場所に行つて
みるとお言葉通り
おお



ところが
この村の
本田吉五郎親子の
夢枕にたつて
居場所を
教えられたんだ



みんなは
焼失したもんだ
とあきらめ
ていたんだ

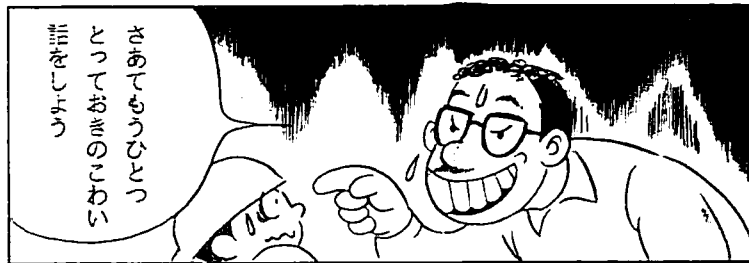


無事、境内の
菩薩の像本におられ
たというのだ



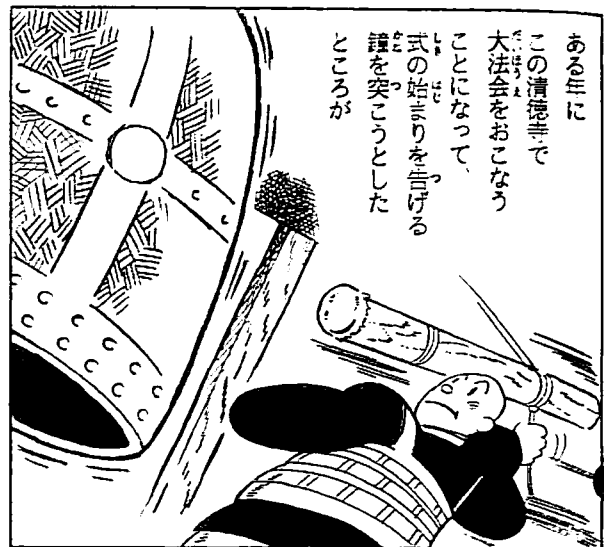
如来さまの
話よりずっと
昔のことだ...

逃げ出す
なら
いまの
うちに



さあもうぐぐぐ
とつておきのこわい
話をしよう

ある年に
この清徳寺で
大法会をおこなう
ことになって、
式の始まりを告げる
鐘を突こうとした
ところが



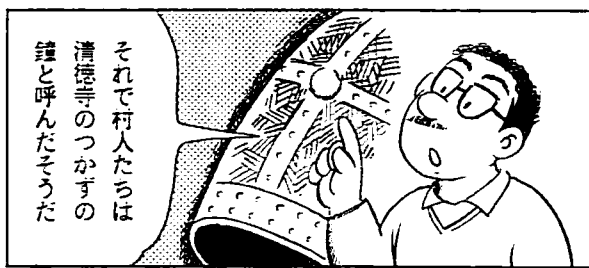
急に巨響が
わいて、激しい
雷とどめに



大雨、大風が
ふいて鐘を
突くことが
できなかった
そうだ



それで村人たちは
清徳寺のつかずの
鐘と呼んだそうだ



その後
どうせつけない鐘
なら、地面に埋め
その上にお堂を
建てた



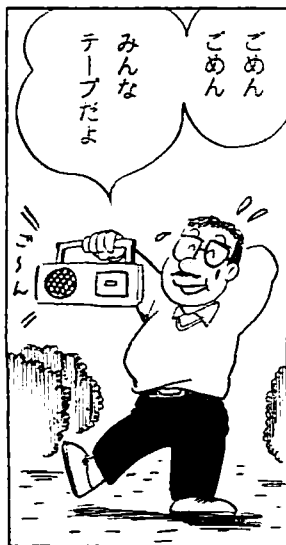
池中に埋めた鐘が
ときたま
ひとりでに鳴る
ことがあるんだ



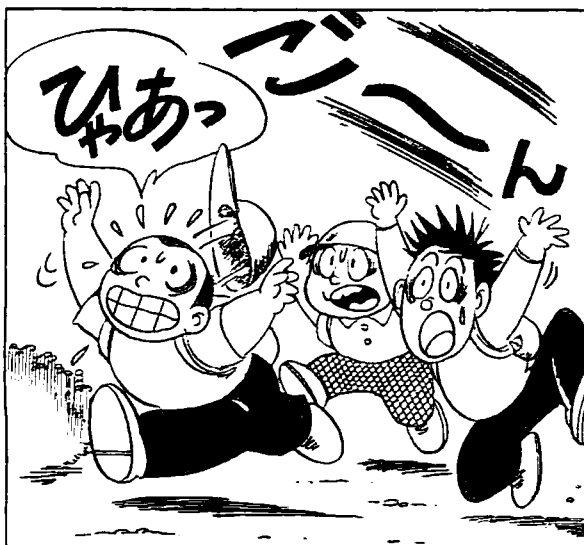
この音を聞いた
言は必ずその年の
うちに死ぬとい
われて
いるんだよ



あー苦しい
たたたりだ
鐘のたたたりだ

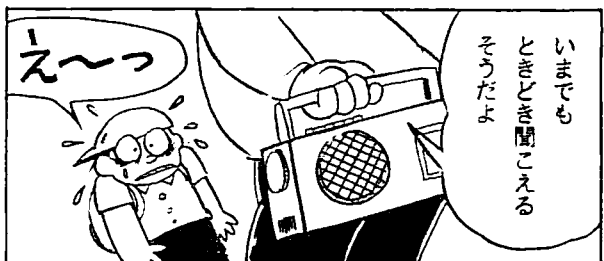


ごめん
ごめん
みんな
テープだよ



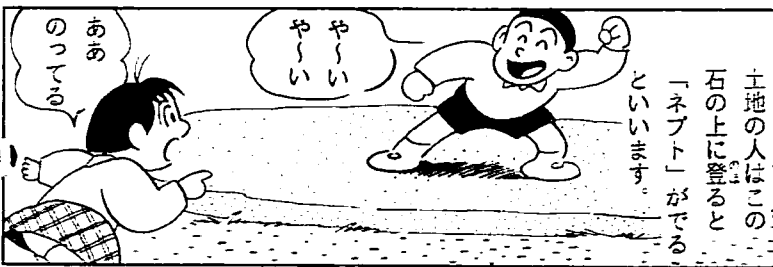
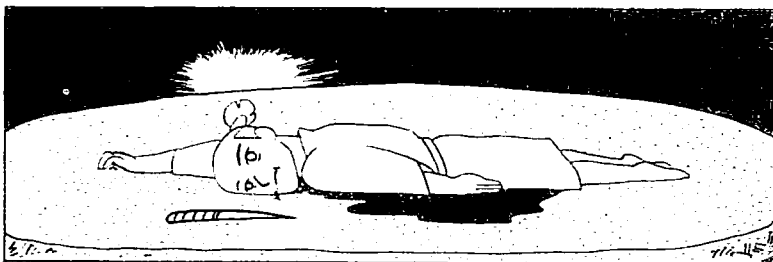
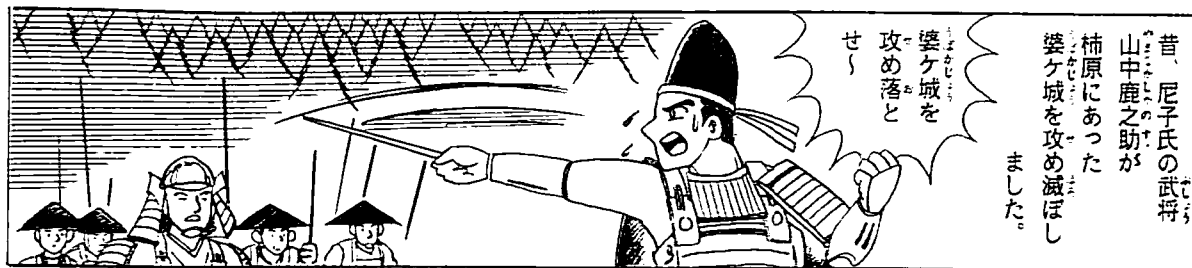
ひゃあ
びゅん

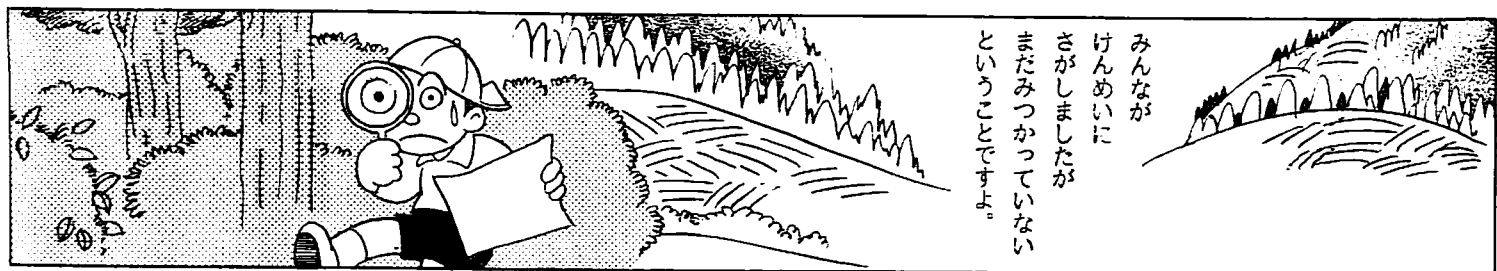
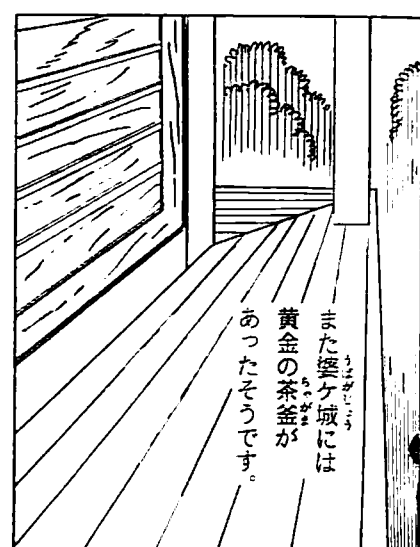
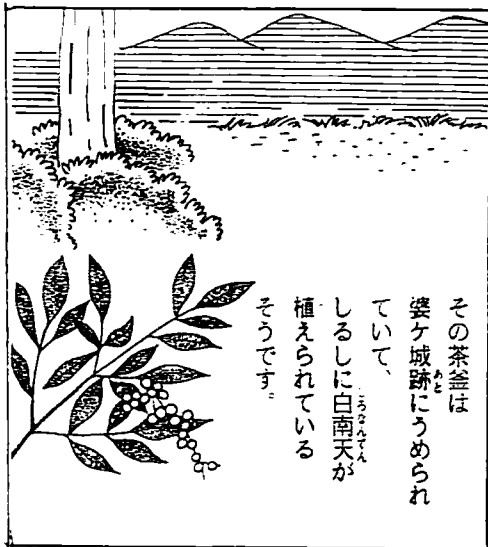
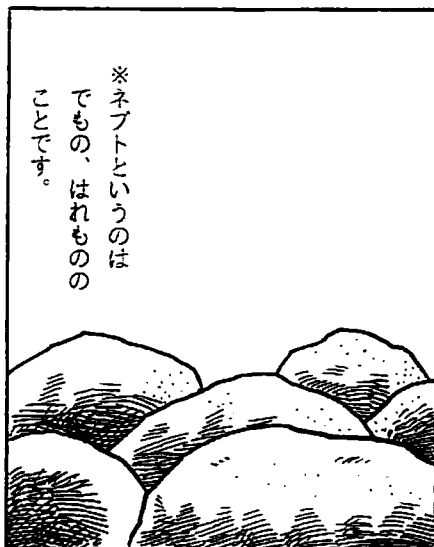
いまでも
ときどき聞こえる
そうだよ



え〜っ

ネ ブ ト 石（柿原）





お雪つばき(三山口)

むかし三山口の
庄屋の娘
お雪さんは色白で
評判の小町娘
でした。

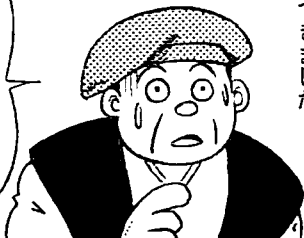
ところが
このお雪さんは
いつの頃からか
わけのわからない
病気でねこんで
しまいました。

父親の嘉左衛門は
医言や祈とうしを
招きよしたが
いっこうによく
なりません。

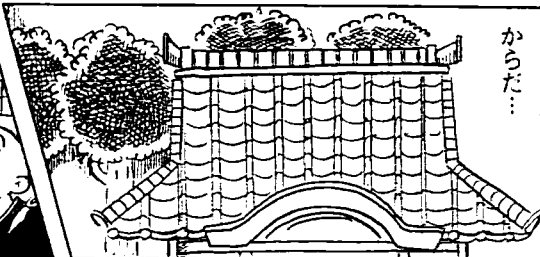


ある日のこと
嘉左衛門は
あることに気が
つきました。

そうだ お雪が
おかしくなったのは
あの日からだ



寺へお雪をつれて
いった翌日
からだ...



ナンマイタ
ナンマイタ



もしやあの
大勢の僧の中の
だれかに心を
うばわれたの
かもしれないな



さっそく
嘉左衛門は
お雪さんに
問いただし
ました。



わたしは
順安さまのことが
忘れられなく
なりました



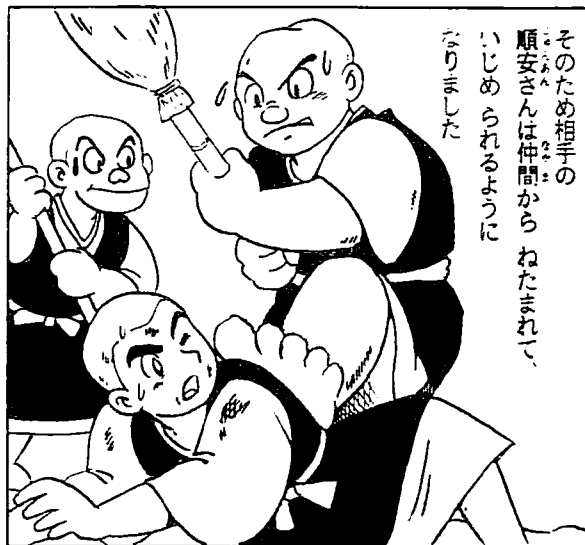
何を見ても
順安さまの
お顔に見えて
しまいます



お雪さんの
恐ろしいのうわさは
またたくまに
村中に広がりました。



そのため相手の
順安さんは仲間からねたまれて、
いじめられるように
なりました。

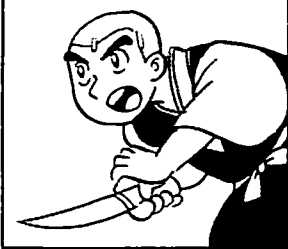


いじめは日まじに
ひどくなり 順安さんも
耐えきれなく
なりました。

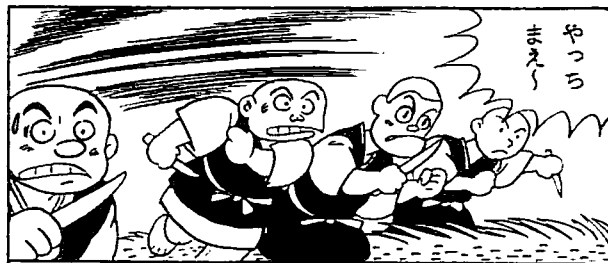
おれが何を
したというんだ



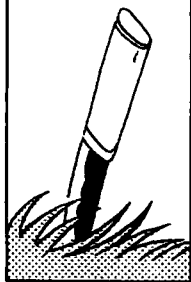
ついに
仲間の坊さんと
決闘をすること
になりました。



やつち
まえ



この決闘で
大勢の坊さんが
死にました。



いっぽう順安さんも
死んだと聞いた

お雪さんは

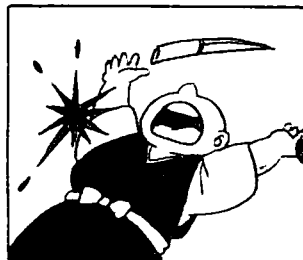
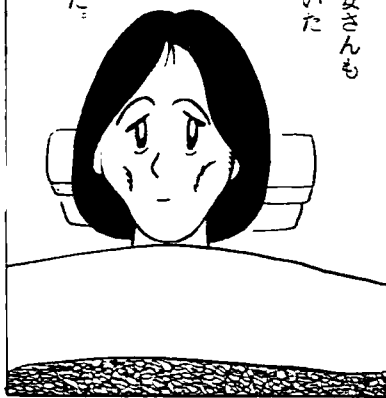
生きる

気力を

なくして

寝込んで

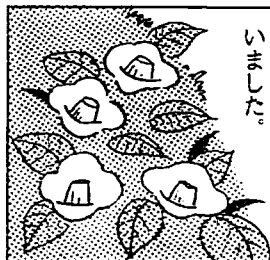
しまいました。



母親はお雪さんを
なぐさめようと
椿の木を植え
ました。

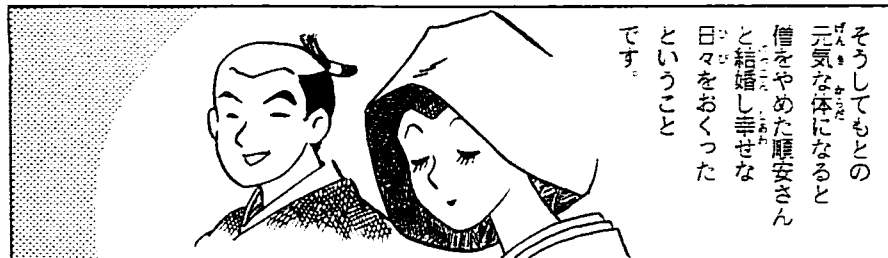
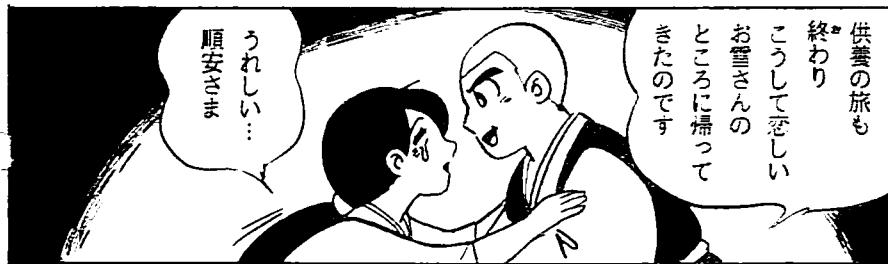
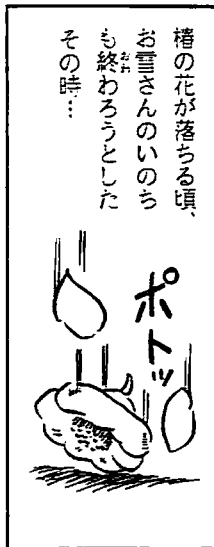
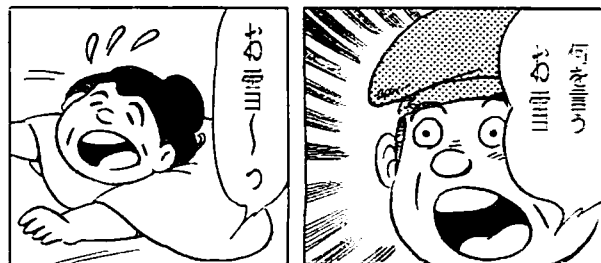


だが花が咲くように
なった頃には
明日もわからない
ほど病は悪化して
いました。



まあ お雪
見てごらん
椿の花がきれい
に咲いたよ





サルとどんびき (三浦)

あつや
むかし愛宕山のおねに住むサルが谷へ水を飲みにおりて、一匹のどんびきと友だちになりました。

やあ
サルさん
こんにちは

一匹は
しばらく
遊んで
いました

腹がへったので
何かうまいもんを
食おうという
ことにな
った。

そうだ
もちを
ついて
食わあか

一匹は
下の村でキネと
ウスをかりて
山のなるで
もちつきを
はじめました。

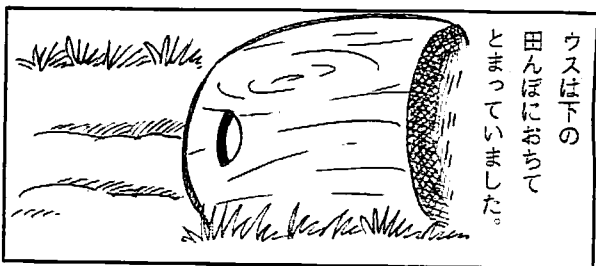
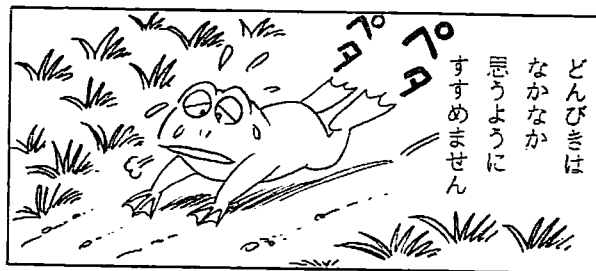
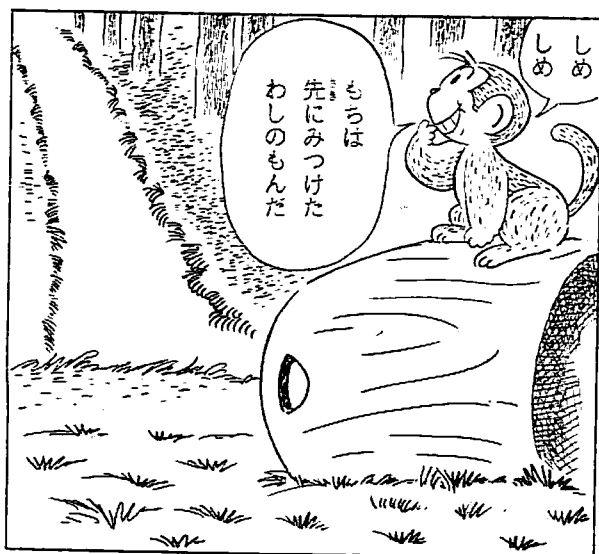
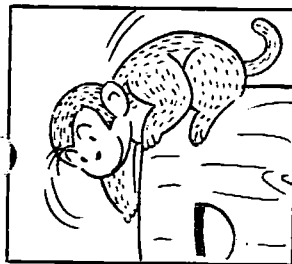
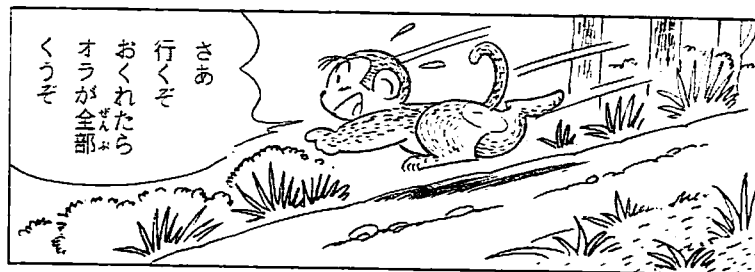
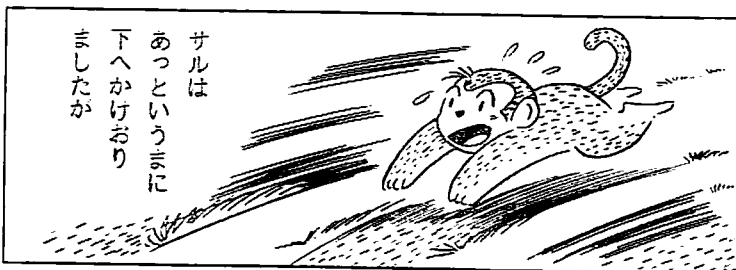
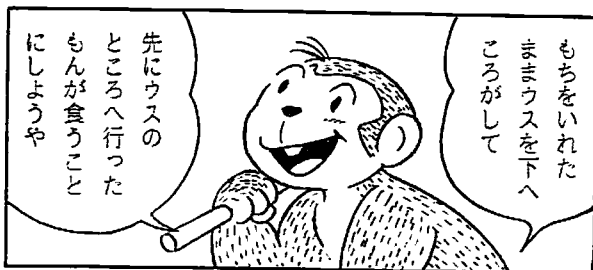
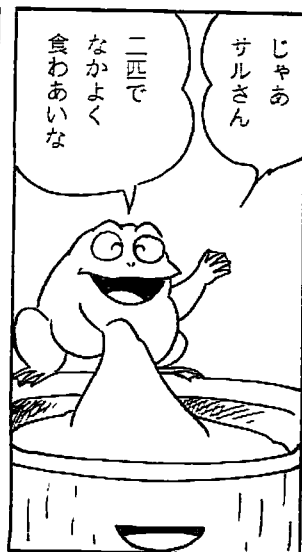
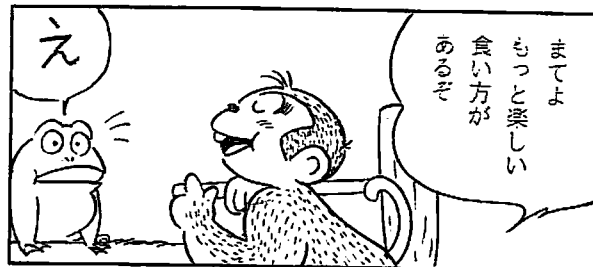
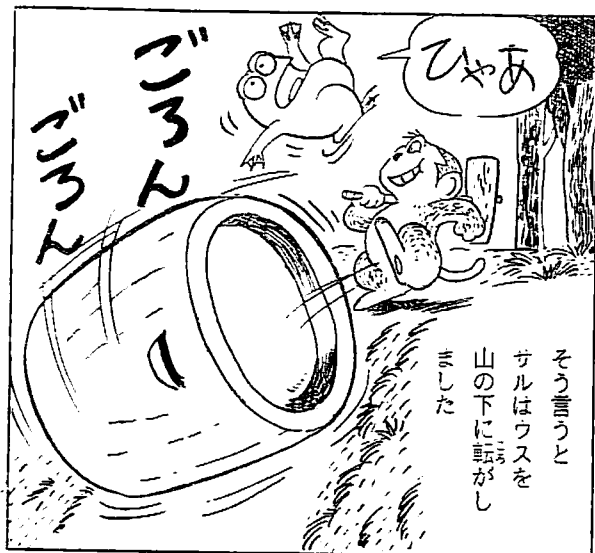
さるが
きねで
もちをつき

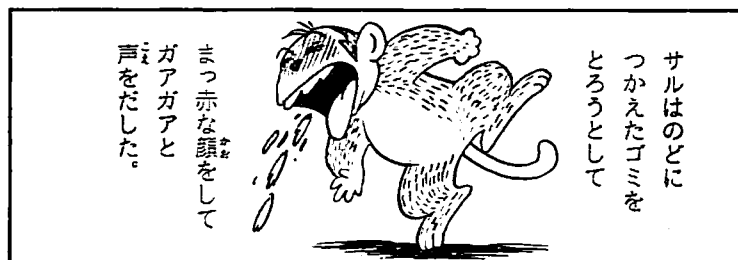
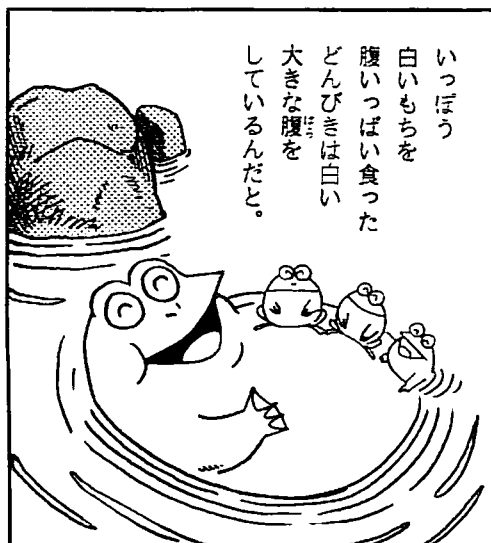
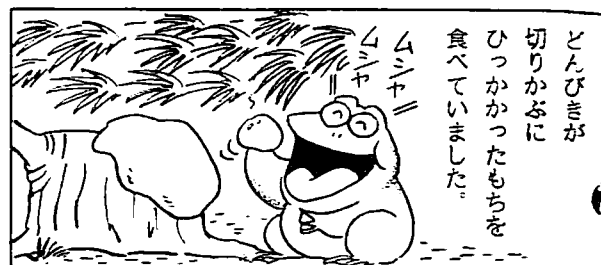
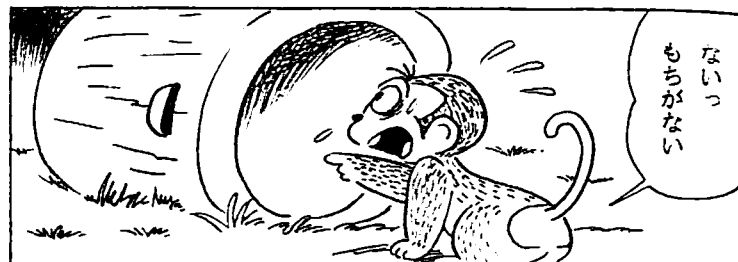
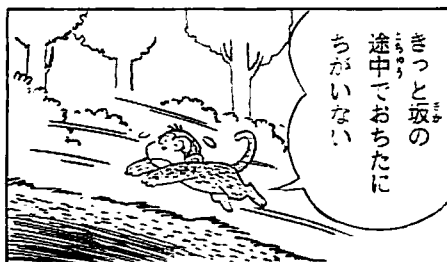
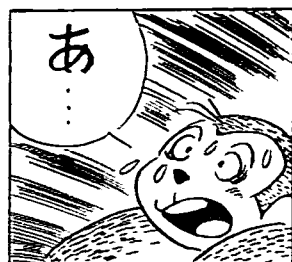
どんびきが
大きな手で
まぜまぜす

こりや
ええもちだ

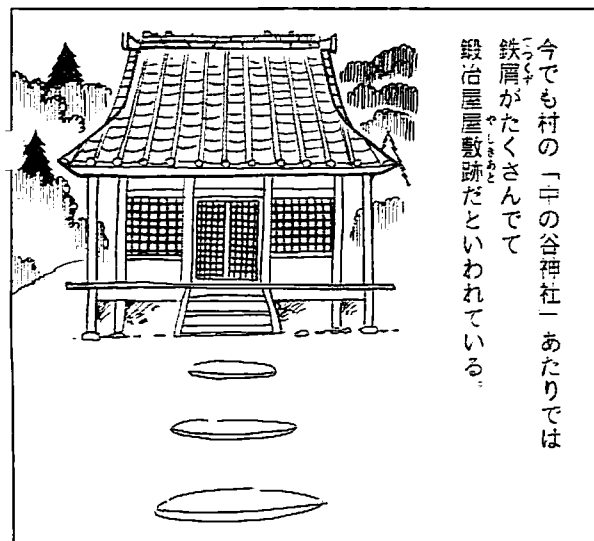
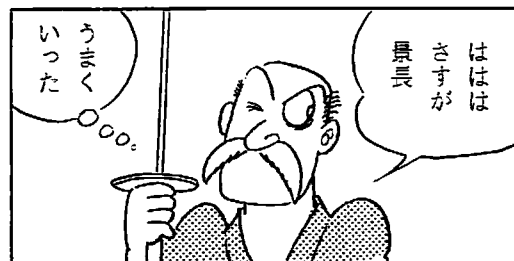
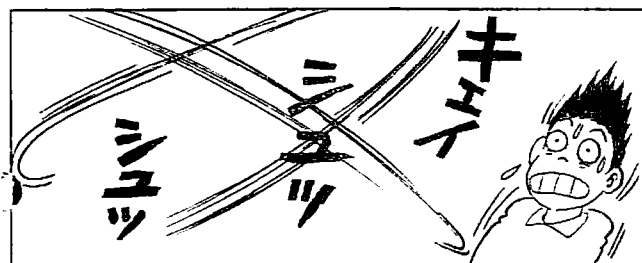
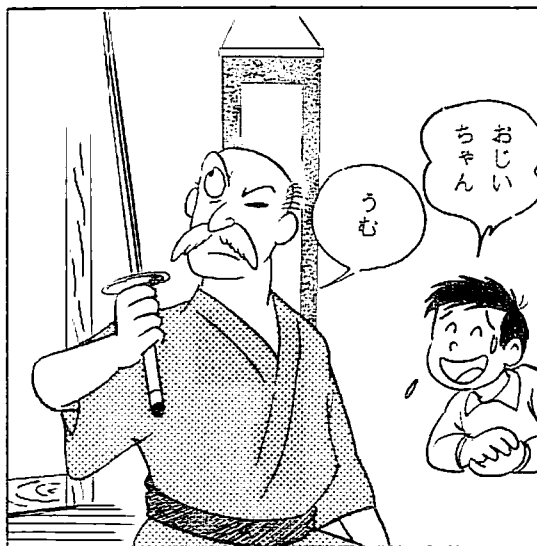
さあ
つけたぞ

一匹が力を
合わせたので
白いええ
もちがで
きました

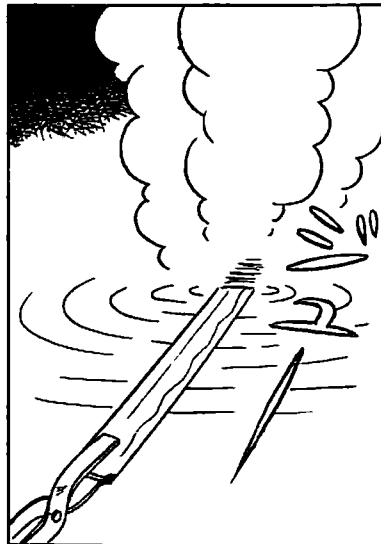




因幡小鍛冶景長（鍛冶屋）



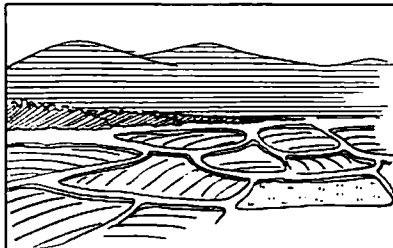
景長の初代は法美郡（今の国府町）
宮の下、宇倍ノ山に住んでいた。



二代目は高草郡湖山村新川
池口ノ上ノ上ノ山の山上に住み



三代目は
高草郡味野村に
住んで
竹生小鍛冶と
よばれた。



景長が四代目を
継いで、当地
八東郡小治田谷
（小畑）鍛冶屋に
移り住んだ。

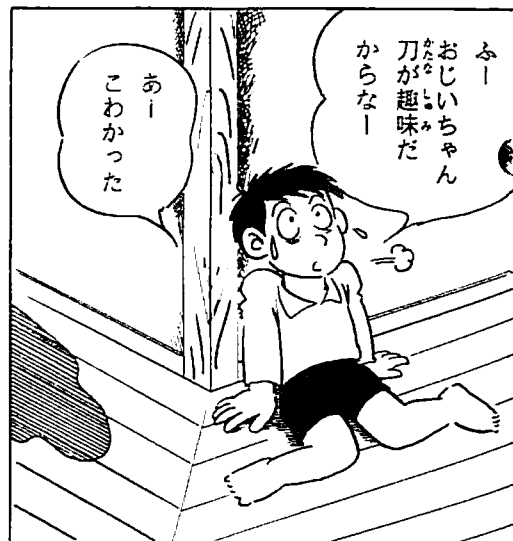
これはよく
きれそう
じゃ

よい
太刀が
できた

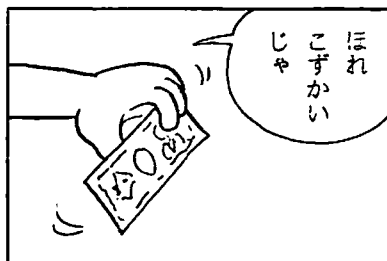


ふー
おじいちゃん
刀が趣味だ
からな

あー
こわかった



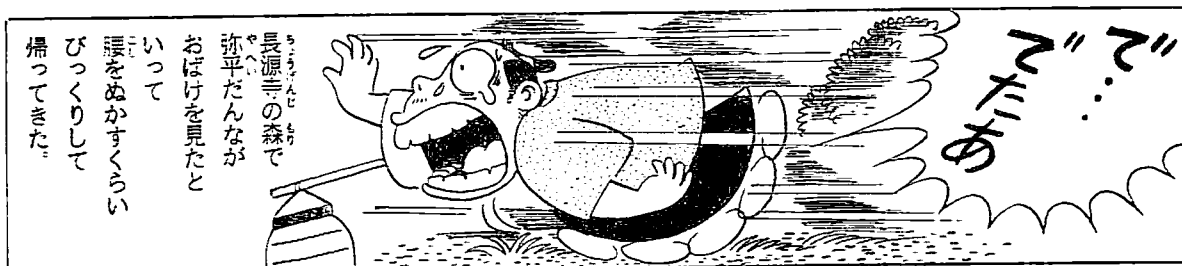
ほれ
こずかい
じゃ



景長さま
ありがとう
ございまーす



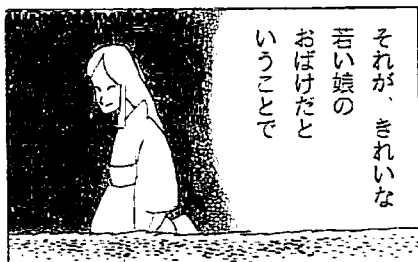
長源寺の森（岩渕）



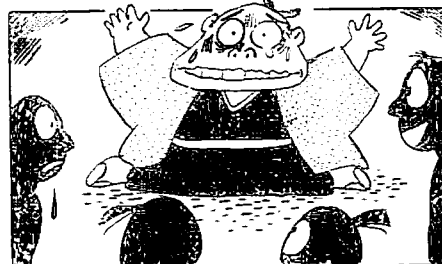
長源寺の森で
弥平さんが
おぼけを見た
といって
腰をぬかすくらい
びっくりして
帰ってきた。



なんでも
綿くりを
やって
いるんだ
そうなの



それが、きれいな
若い娘の
おぼけだと
いうことで



その話を聞いた
村の若者一人が
長源寺の森へ
でかけていった。



ははは
そりゃあ
おもしろえ

ウ
シ
ッ

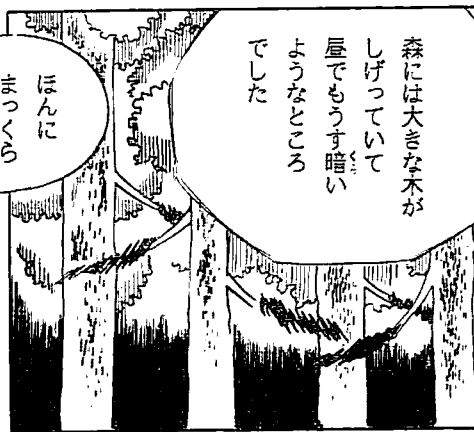
若い娘の
おぼけと
聞いちゃあ
じつと
してられねえ



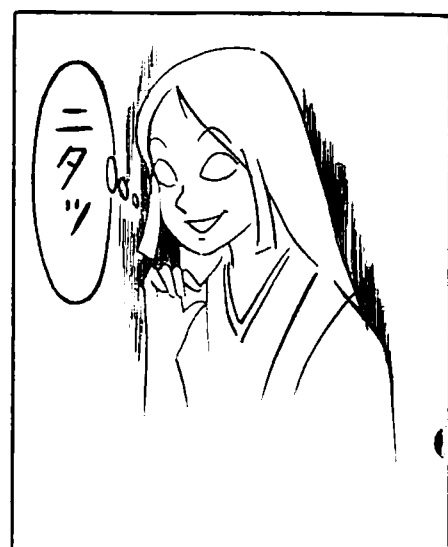
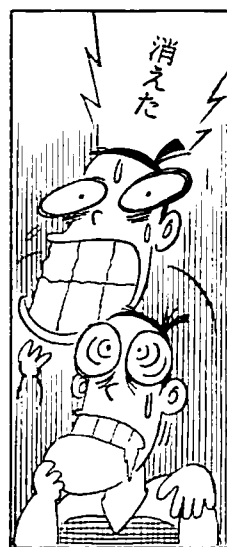
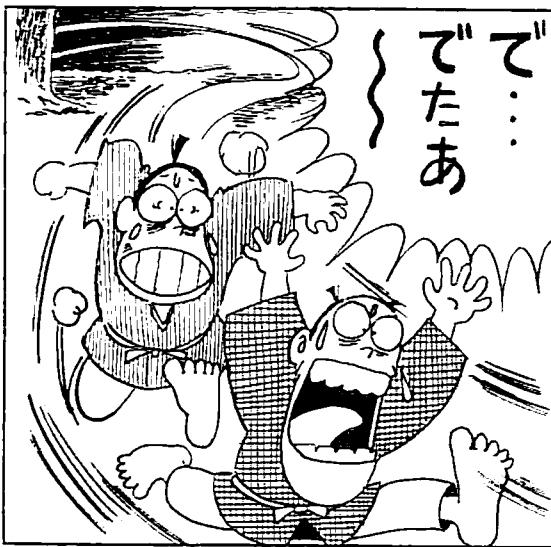
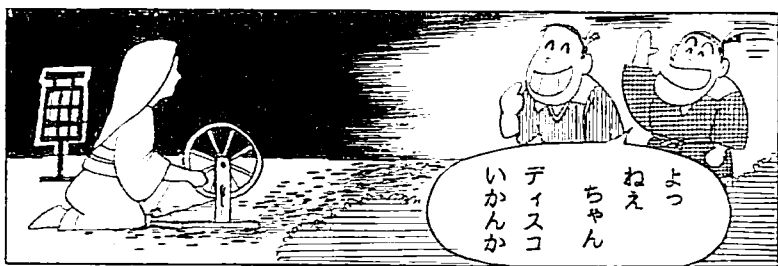
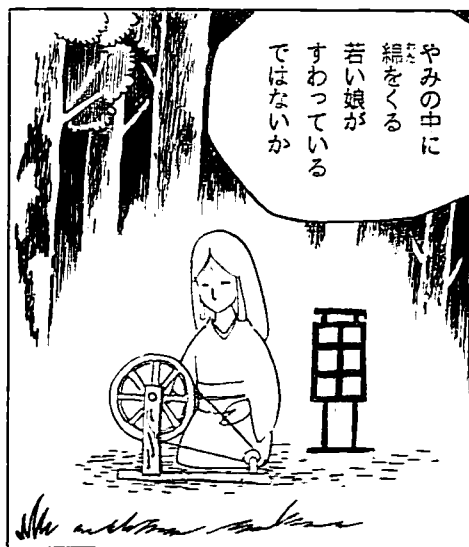
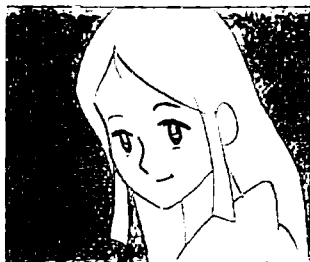
たのし
みだ
なあ

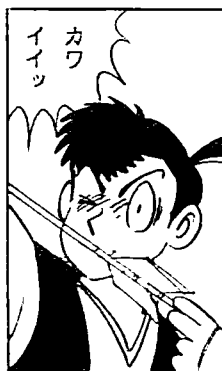
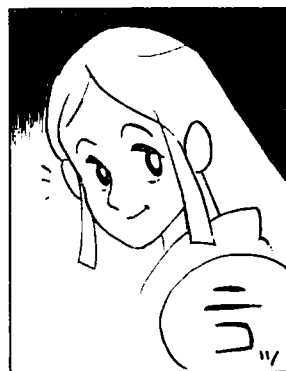
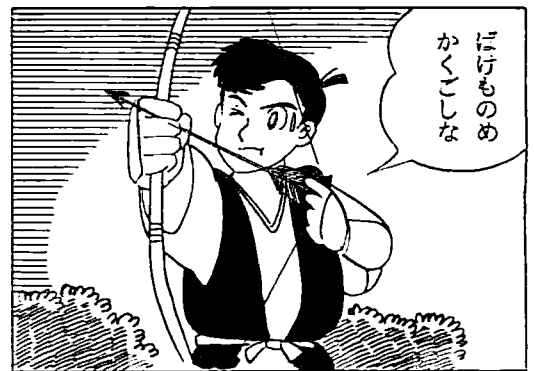
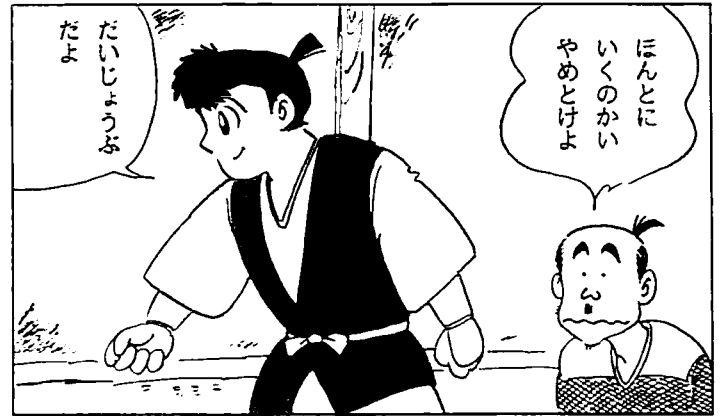
もうすぐ
森につく
で

ほんに
まっくら
だなあ

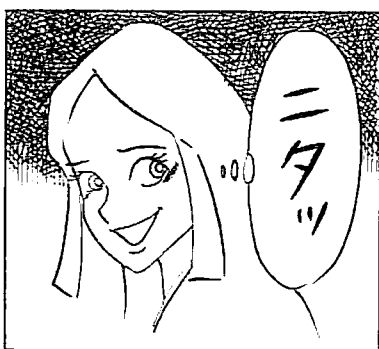
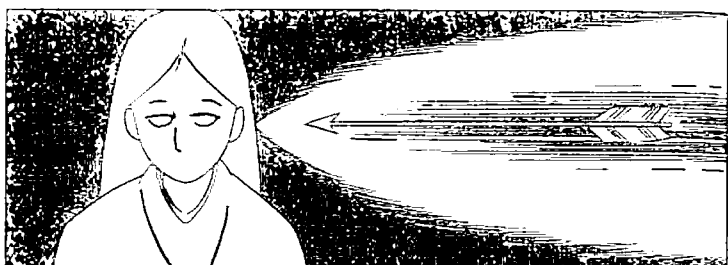


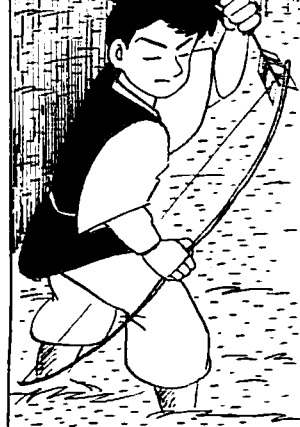
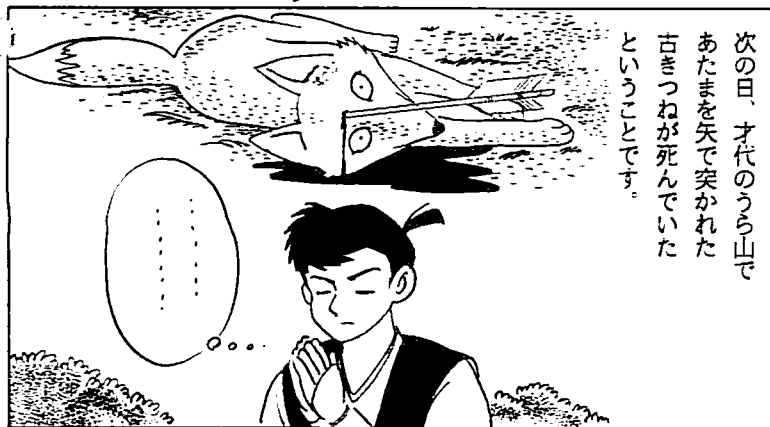
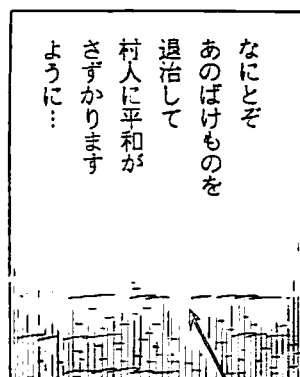
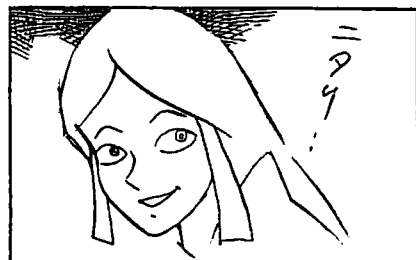
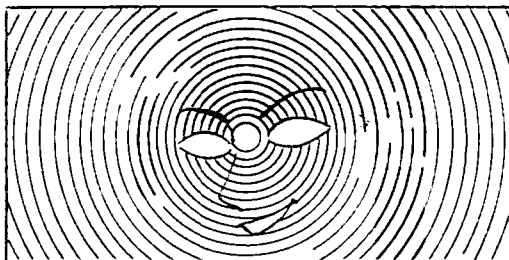
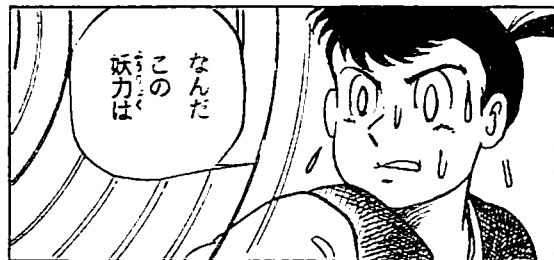
森には大きな木が
しげつていて
屋でもうす暗い
ようなところ
でした





シユ一



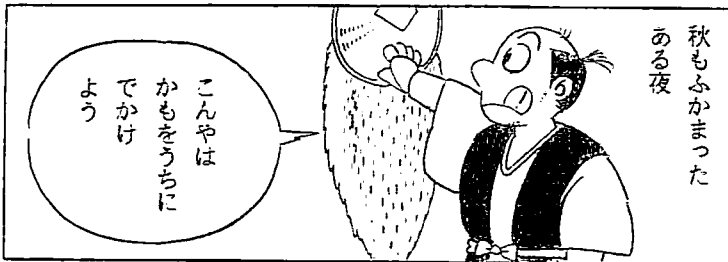


獵師りようしの清左衛門せいざえもん（岩淵いわぶち）

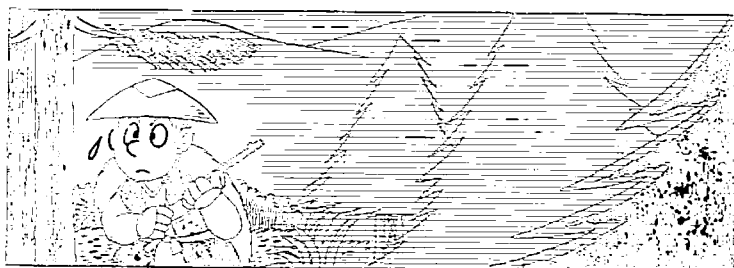
むかし 岩淵のむらに
 清左衛門という
 りようしが
 おりました。



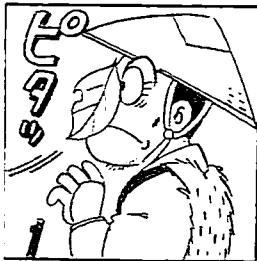
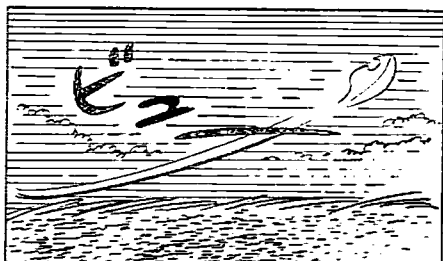
秋もふかまった
 ある夜



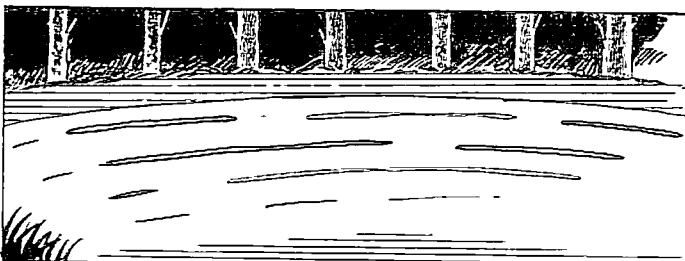
こんやは
 かもをうちに
 でかけ
 よう



夜の森は
 なんだあ
 気持ちが
 わるいなあ



やがてお幸の奥の
 はやしが谷という
 つつみにつきました。



はは
 はは
 かあ

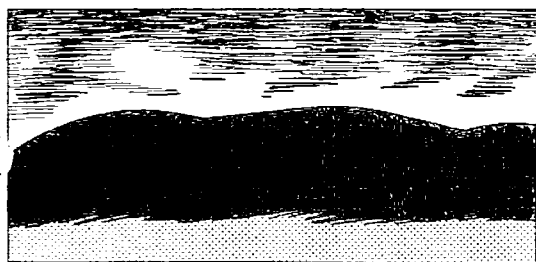
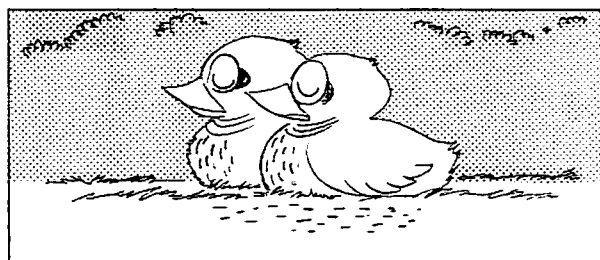
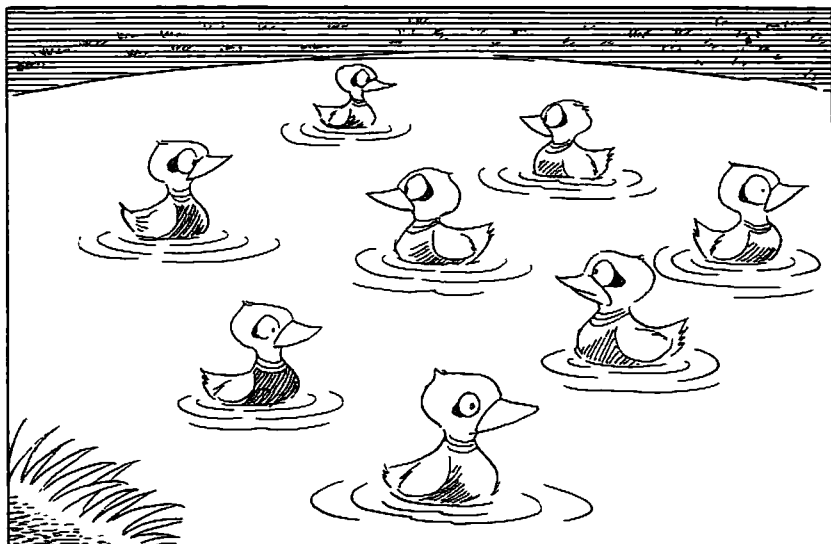
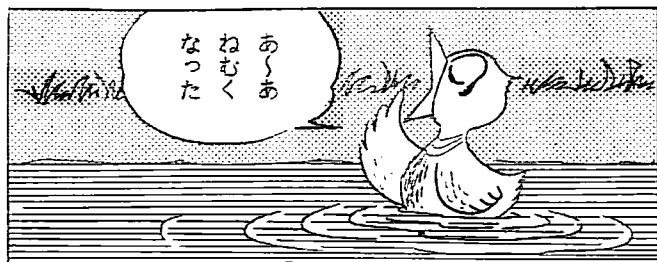


おろ
 おろ
 おろ
 おろ
 おろ
 おろ

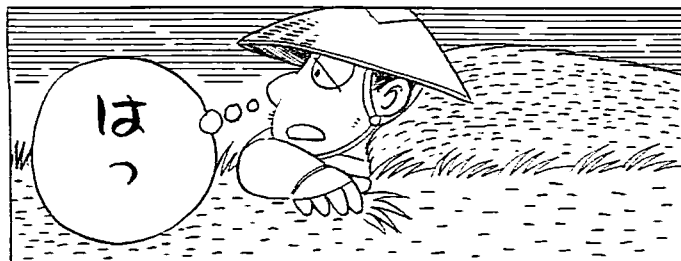
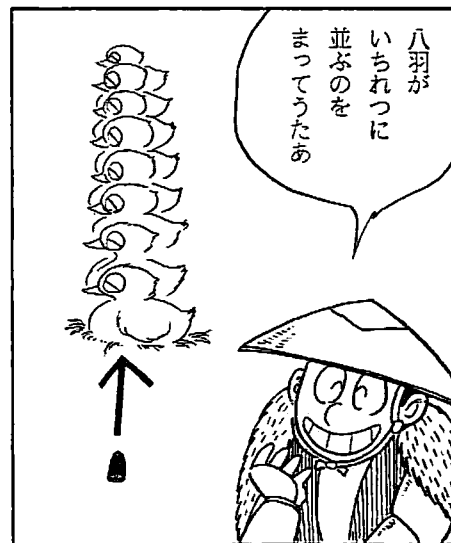


みうて

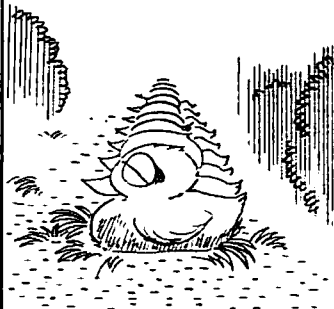
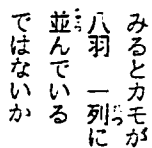




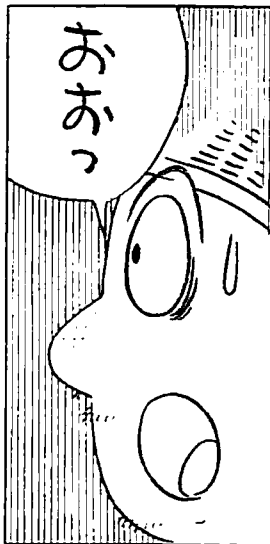
やがて東の
空が明るく
なりだした。



おおきな音が
谷間にやまにひびい
タマはみごと
八羽やうの力ちからを
みごと
一直線いちよくせんに
うちぬいた。



あ
あ
っ



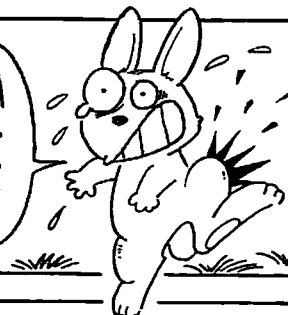
なんちゅう
ことだ
ねむって
しまった



けんめいにもがいた
かいた土の中から
やまいもが
いっぽん
出てきた。

それだけではないに

い
て
て



クマはむこうの
土手のへりに
ねとったうさぎの
うしろ足にあたった。
うさぎは
にげようとして
前足で いっしょう

こんな人を
名人めいじんって言う
だらあかなあ



また
かいた土が
井出の水を
せき止めた

この井出には
ドジョウが
いっぱい
おったさあな



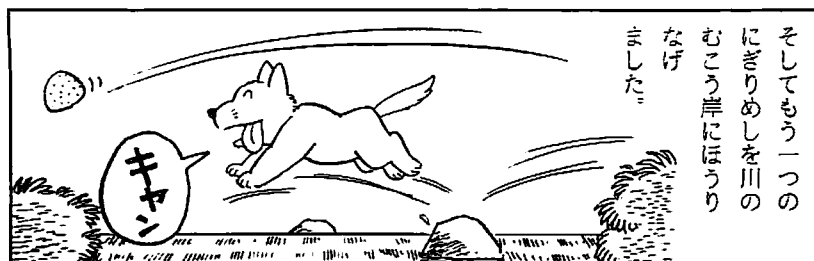
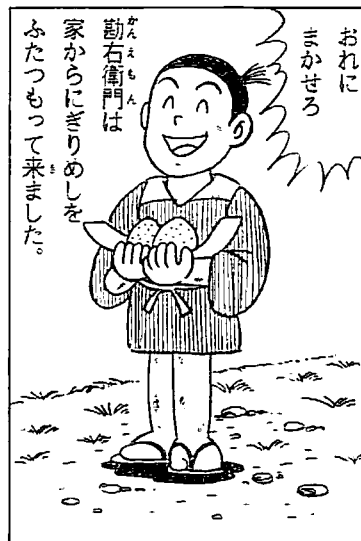
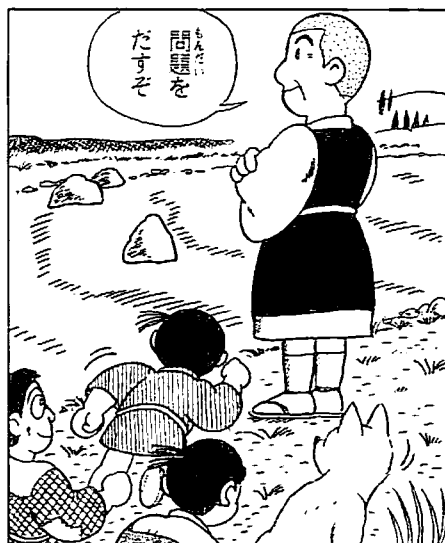
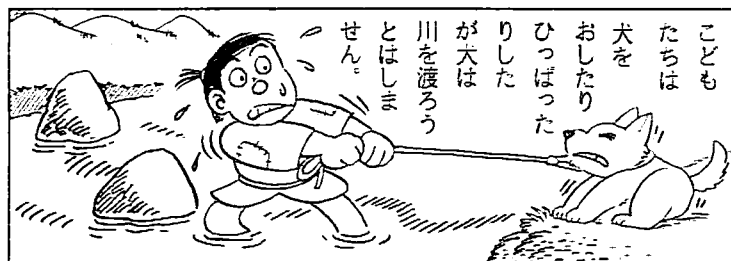
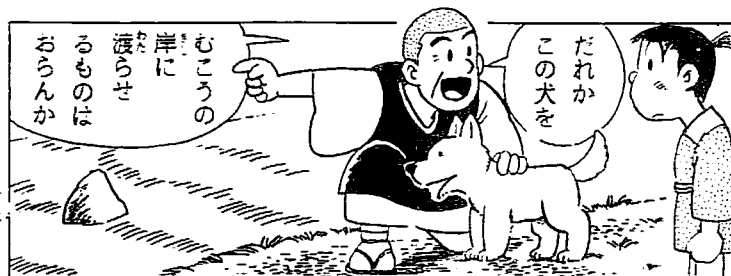
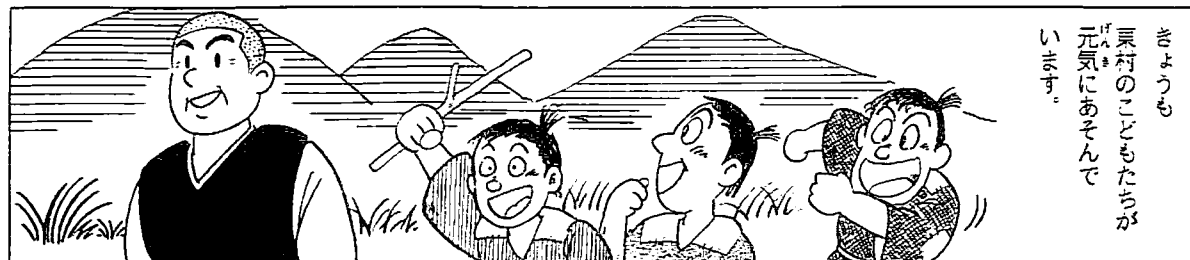
清左衛門は
 いっぱつのタマでカミを八羽と
 うさぎ一羽、やまいもを
 一本、ドジョウを三升、
 いっぱんに
 とったという
 ことだ。

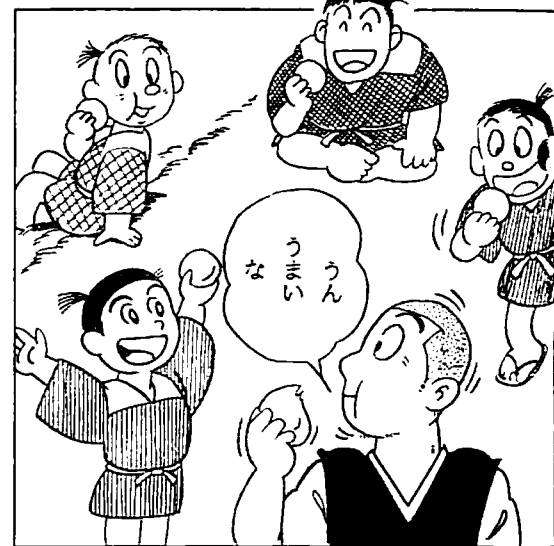
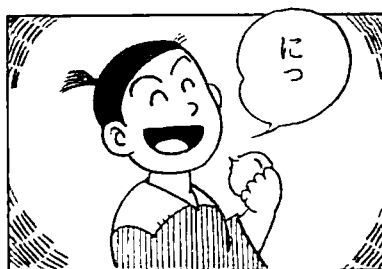
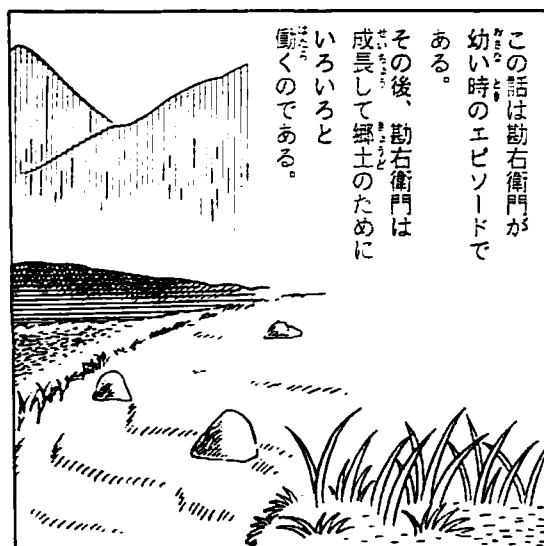
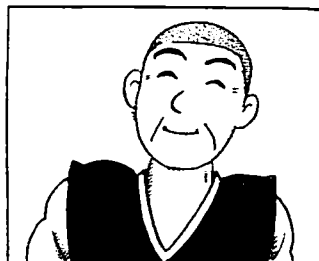
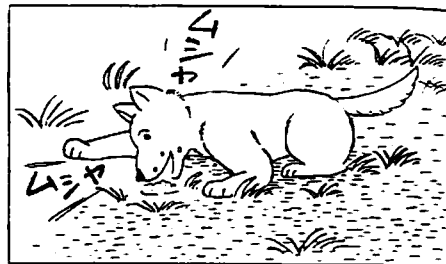


ハ　ワ
ハ　ツ
ハ　ハ

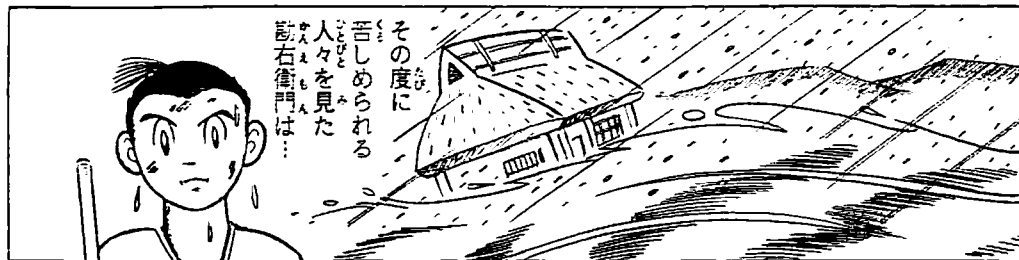


松田勘右衛門(東)





元禄から享保にかけて
八東川は十数回もの
大洪水となり田畑を
流した。



その度に
苦しめられる
人々を見た
勘右衛門は...



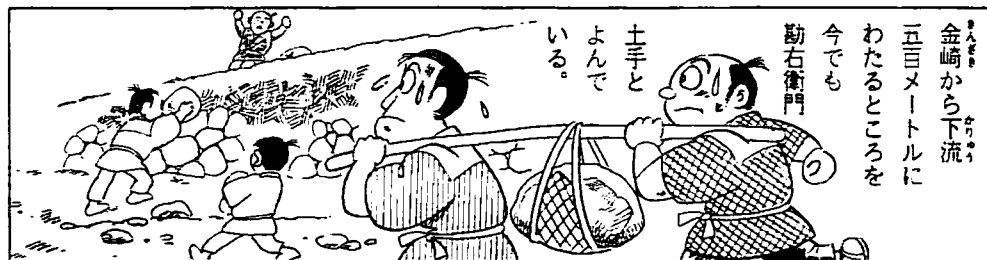
藩に願い出
私財をなげうって
堤防工事を
完成させて
いる。

どうか
農民をお助け
ください

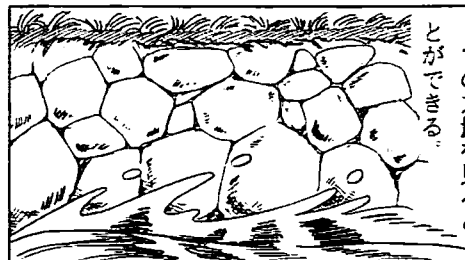


金崎から下流
五百メートルに
わたるところを
今でも
勘右衛門

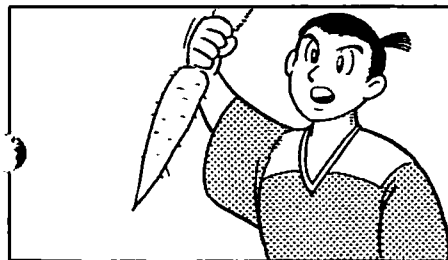
土手と
よんで
いる。



巨石を使った構造や
腰かずらやニラを
植えて地盤の強化を
はかったことなど、
勘右衛門の技術者とし
ての力量を見るこ
とができる。

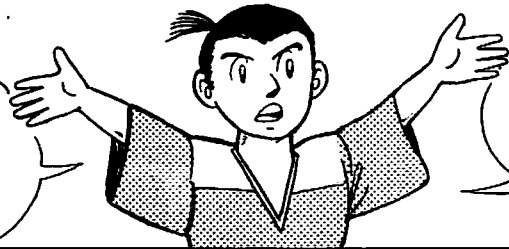


干し柿の
保存方法とか
新しい作物を
しようれいする
など農民の
生活安定の
ために努力した。



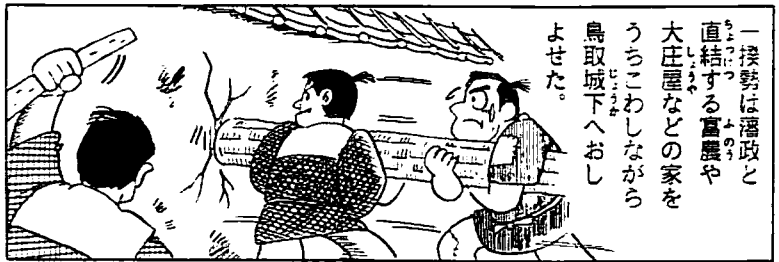
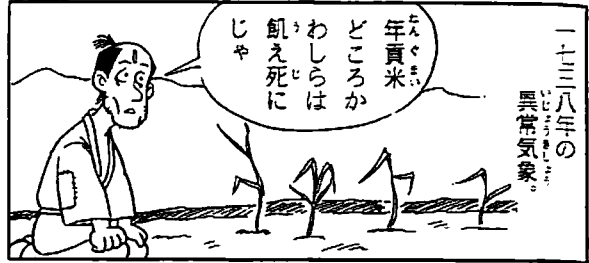
また、藩政に対して
数々の提言を行って
いる。
農民の立場を有利に
するものばかり
でなく藩の財政を豊
かにするための提案
も少なくない。
郡代に何度も
もとめたが！

海岸には
風よけの松を
山や川原
には桑の
木を植え
よう

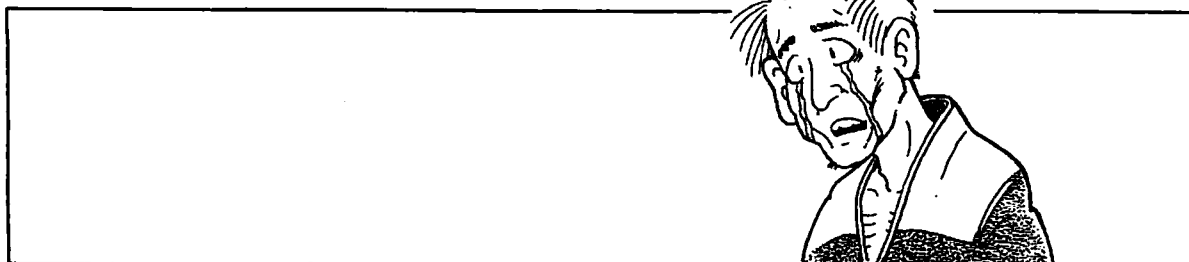
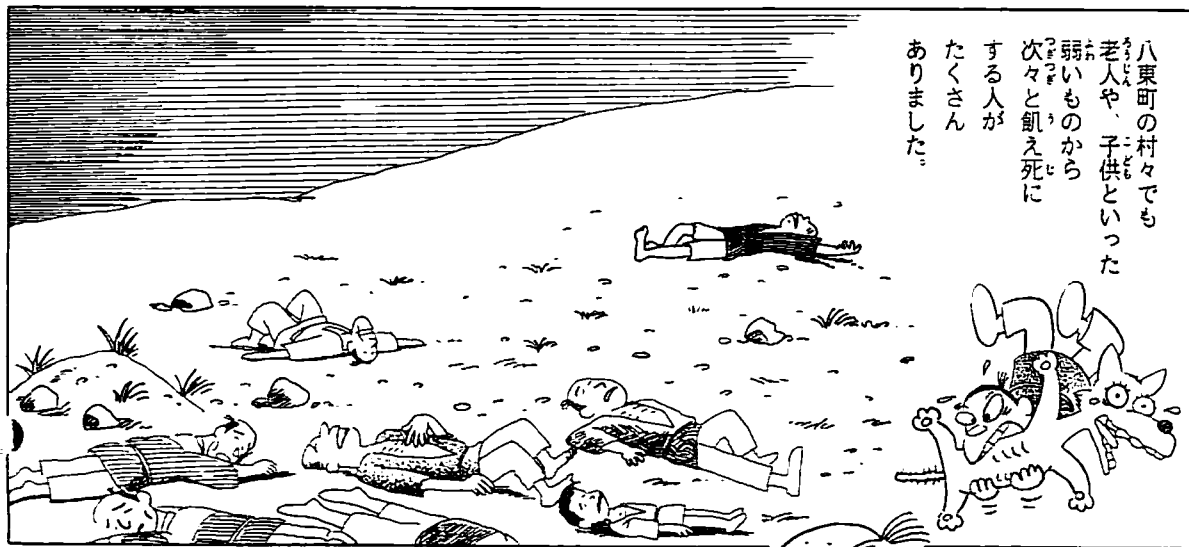
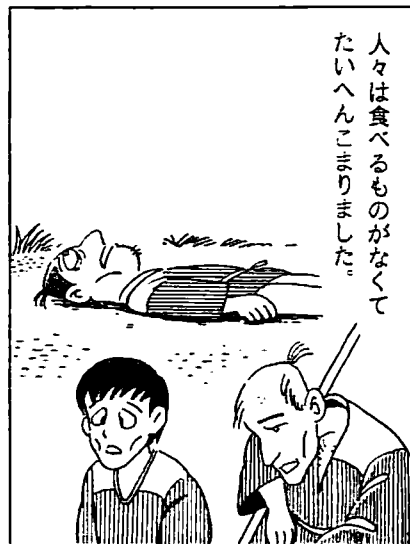
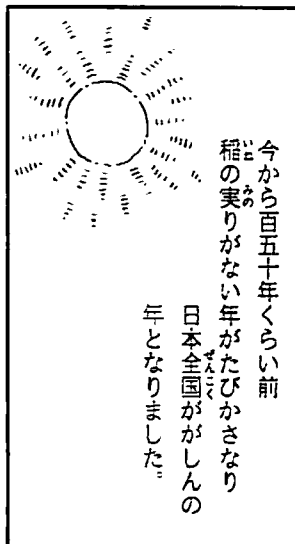


公用紙の
色を統一
したほうが
役所を
ひとつの
場所に
まとめた
ほうがよい

一三三八年の
異常気象。

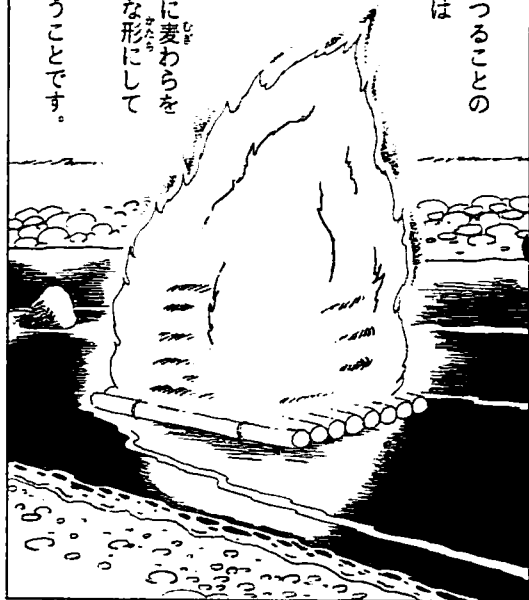


万灯流し(東)

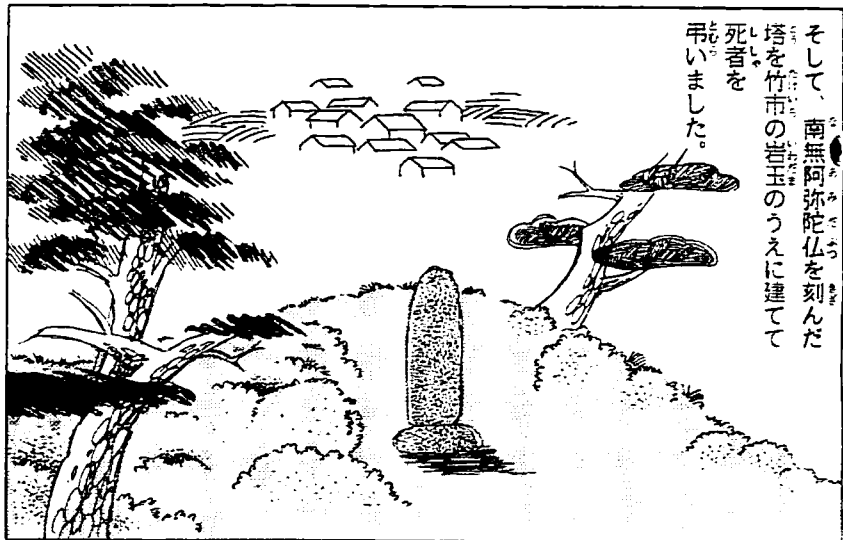


ひとりひとりをまつることは
できない村人たちは

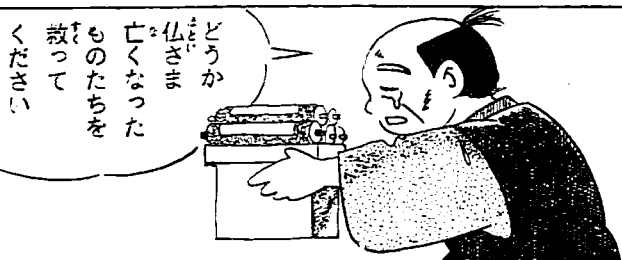
村の前の河原で
木の枠をくんだ上に麦わらを
重ねて、塔のような形にして
八束川に流し
仏をおくったということです。



そして、南無阿弥仏を刻んだ
塔を竹市の岩玉のうえに建てて
死者を
弔いました。



才代の大庄屋は
亡くなった人を弔う
ために阿弥陀経を
写して清徳寺に
奉納し念仏供養を
おこないました。



どうか
仏さま
亡くなった
ものたちを
救って
ください



南無阿弥

南無阿弥

南無阿弥

南無阿弥

南無阿弥

この万灯流しは、その後
仏をおくる行事として
永く続いていましたが
竹市発電所ができて
川の水量がへったりしたので
いつのまにかなくなって
しまったと
いうことです。

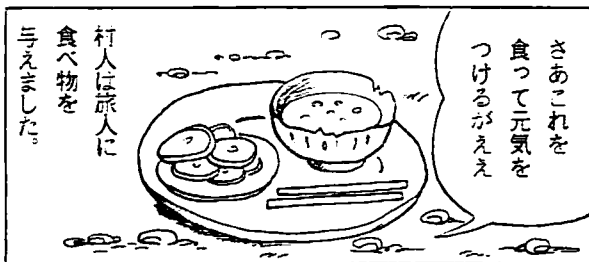


イボ地蔵(才代)

むかし、才代の村はずれに
ひとりの老いぼれた巡礼の人が
行き倒れていました。
これを見つけた村人が
親切に看病を
しようとしました。

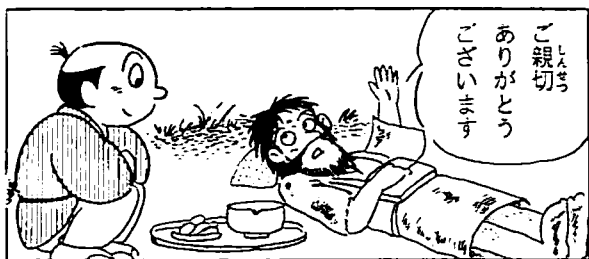


さあこれを
食って元気を
つけるがええ



村人は旅人に
食べ物を
与えました。

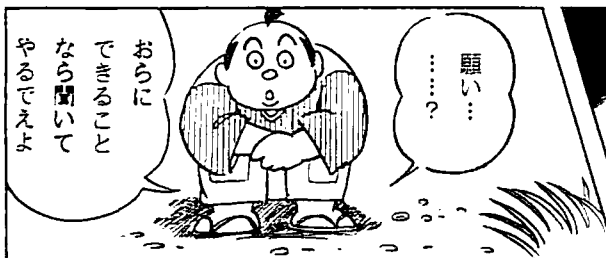
ご親切
ありがとうございます



わたしは
まもなく死に
ます
死ぬ前にひとつ
お願いがあり
ます



願い……
……?



おらに
できること
なら聞いて
やるでええ

ありがとうございます



じつは
今生のなごりに
女の人の乳を
飲ませて
ほしいのです。

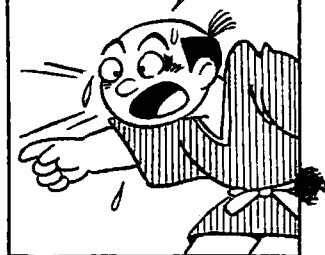


乳女！

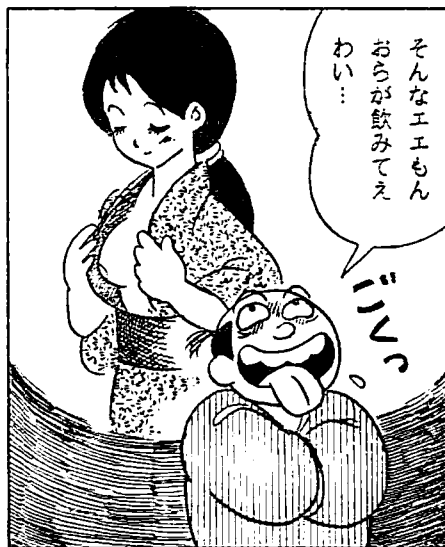
おめえ
言うにことかいて
十二言うだす



おまえに
ちちを飲ませる
ものがいる
もんか



そんなエエもん
おらが飲みてえ
わい……



ところがこの話を
耳にした才代の
大庄屋の
若奥様が
やってきました。



わたくしは今
子持ちですから
乳がでます
わたくしの
乳でよければ
……



すると今にも
死にそうな巡礼の
人は、若奥様を
おがむようにして

まことに
もったいない
ことです



わたしは
もと武蔵の国
江戸川下の
石井十兵衛と
いう侍です

お聞きください

十八年前に
女房と死に別れ
てから諸国を
巡礼していました。

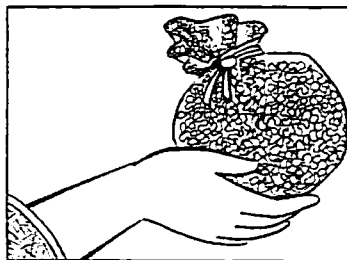


その間に
あたたかいお恵み
でためたお金が
あります

その金を情けの
深い方に渡して
この世を去るのが
わたしの願い
でした



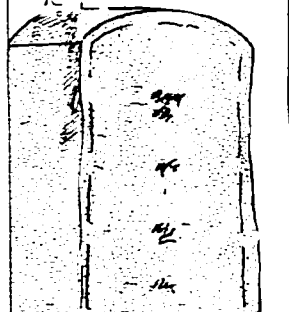
旅人はそういつて
若奥さまに
お金を渡すと
息をひきとり
ました



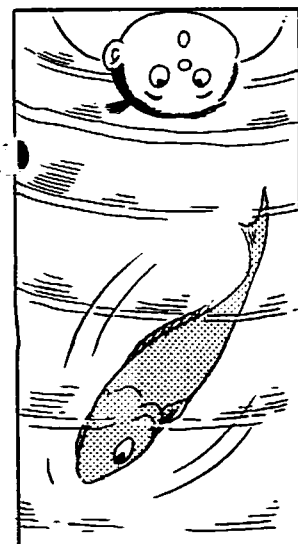
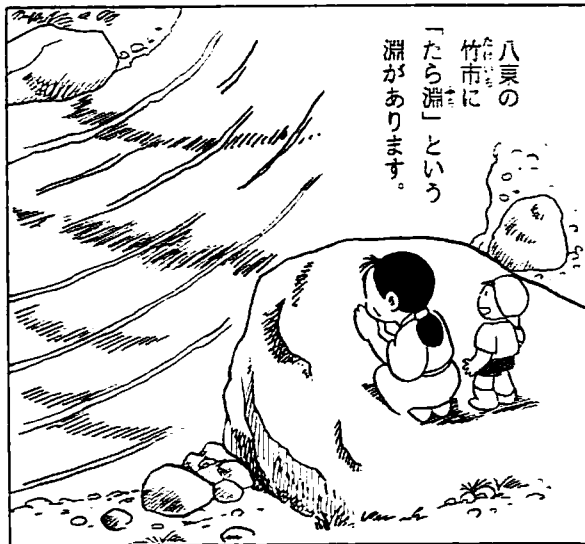
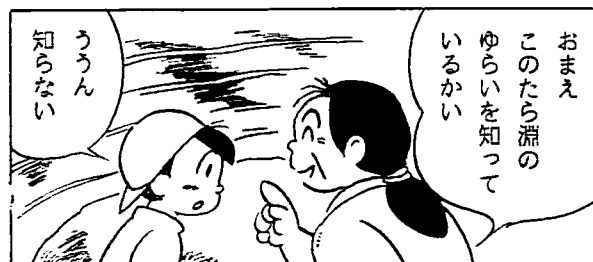
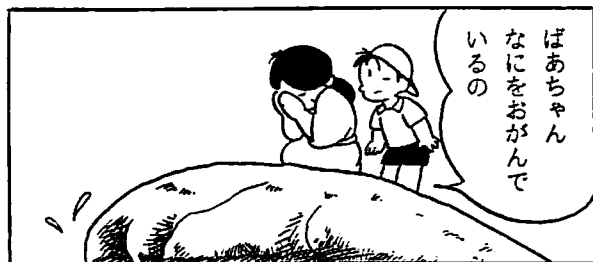
大庄屋さんは
旅人をていねいに
吊い、供養塚を
たててやりました。

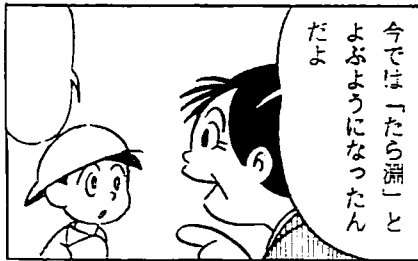
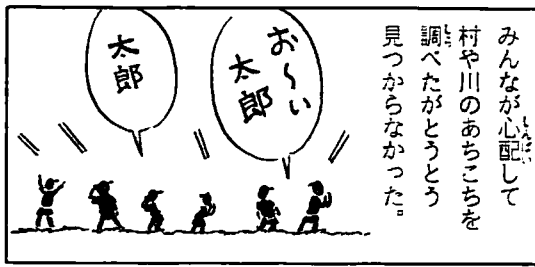
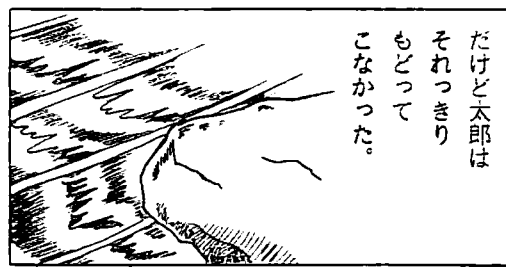
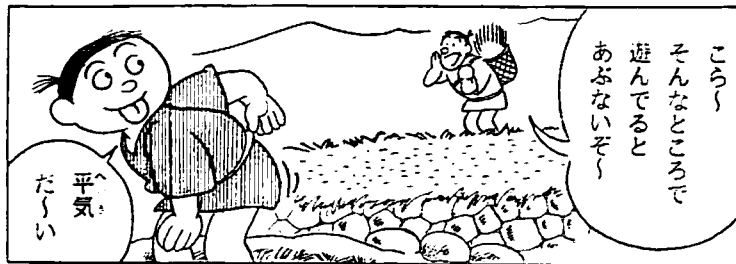


のちに、この
供養塚は参詣すれ
ばイボが落ちると
いう噂がたち
村人から「イボ地蔵」
と名付けられました

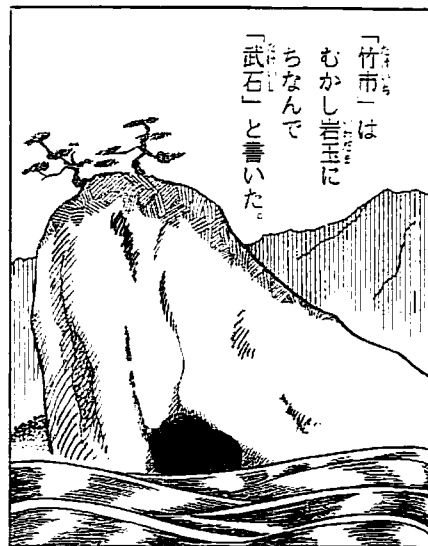


た ら 湍たふしのゆらい（才代）

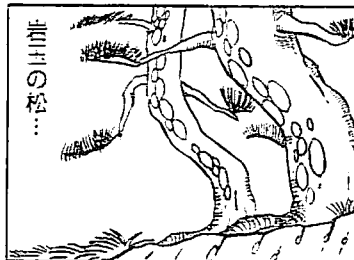




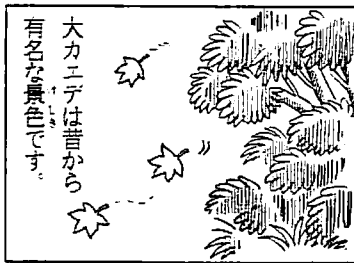
竹市たけいちの渡しわたしし（竹市たけいち）



「竹市」は
むかし岩玉に
ちなんだ
「武石」と書いた。



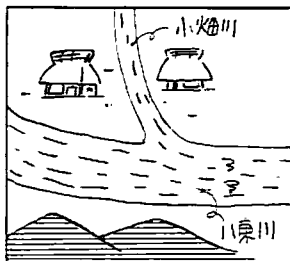
岩玉の松…



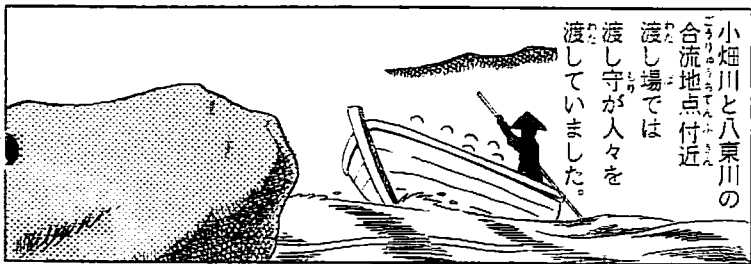
大カエデは昔から
有名な景色です。



岩玉には大きな
洞くつがあり
天文一揆のとき
一揆勢に追われた
役人がかくれて
いました。



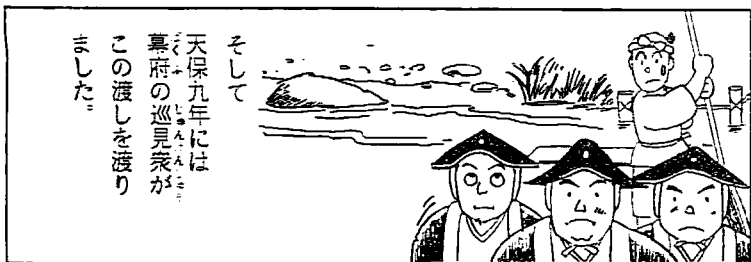
また岩玉の下の
川原は一揆の
百姓衆が休んで
大庄屋に食事を
助けてもらい
ここから船岡へ
向かいました。



小畑川と八束川の
合流地点付近
渡し場では
渡し守が人々を
渡していました。



若桜の糸白見
からでたイカダと
小畑からでた
イカダを組み
なおして鳥取へ
おくりました。



そして
天保九年には
幕府の巡見衆が
この渡しを渡り
ました。

鉾山こやまがあつたはなし（茂田もぎ）

伊呂山いろやまの森の岩場に
まつられた小さな社から



茂田村の
若言わがことの肩かたにのった
櫛くし（さかき）のみこしが
元氣よく村へ
おりてきます。

春はるの一日、親類縁者おんれいゑんじやをまわいて
にぎわう家々をおとすれ
櫛くしのみこしをねるのです。



朝鮮ちやうせんから来た
アメノヒボコは
すぐれた鉾山師こやましで
あった。



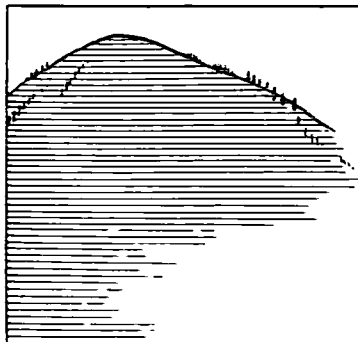
アメノヒボコの子孫しよんは
但馬たじまに住んでいたが
皆原みなはらの奥おくにきて
鉄てつを掘り出した。



やがて茂田まできて
金きんのでる山を見つけた。



彼らは金が出たことを
喜んで、この山に
朝鮮の金山「イログ山」の
名をつけた。
やがてイログがなまって
イロウ山（伊呂平山）と
言うようになった。



茂田の櫛くしが出発する
小社の櫓やぐらに
「山上年王社」と書かれ
ています。これは、
鉾山技術者の崇拜する
二柱の神の名を
結んだ社名です。



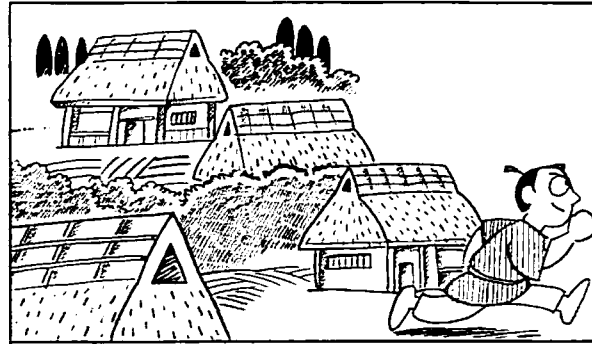
樽のみこしを誰もみのように
はげしく回します。
これは鉦脈削岩の「ノミ」を
うちこむ作業の神事化では
ないかと考えられています。



茂田村の観音さんや高田の仏像は
掘り出された金で
塗りあげてあると
いわれています。

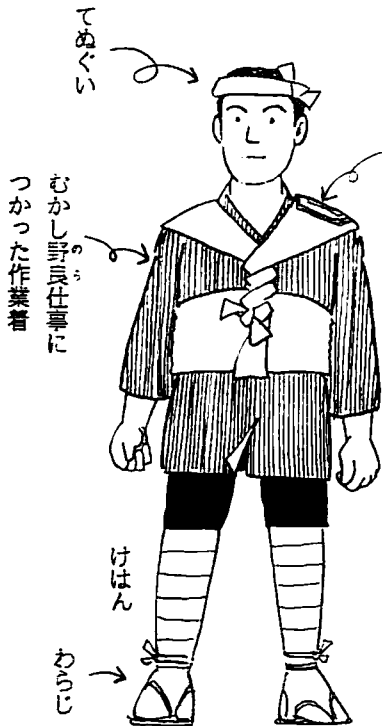


茂田村は金山の
おかげで栄えた。
この鉦山は大正期まで
つづいたそうです。
いまでも坑道は
残っています。



茂田村のまじりの服装

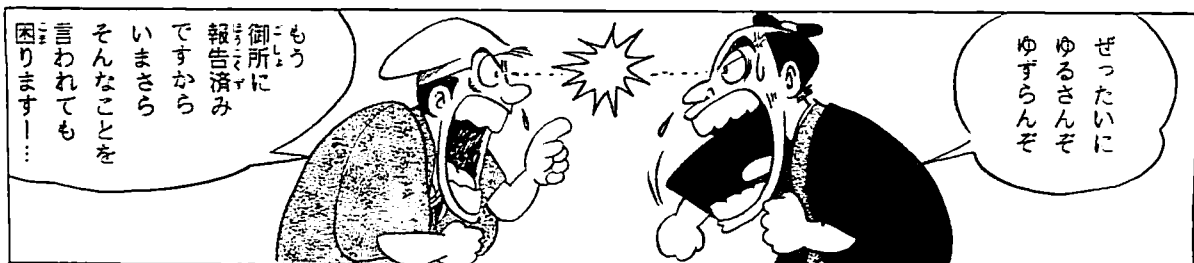
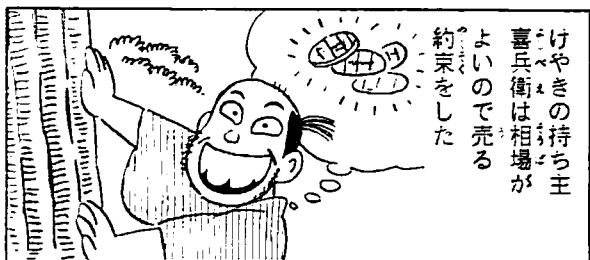
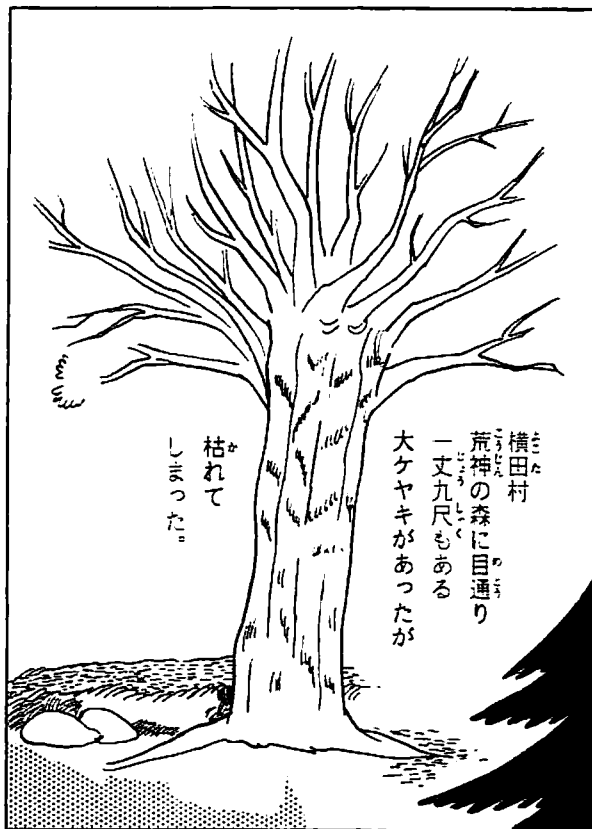
五月のほりを、
家紋が右肩にくるようにして
たすき状にかける

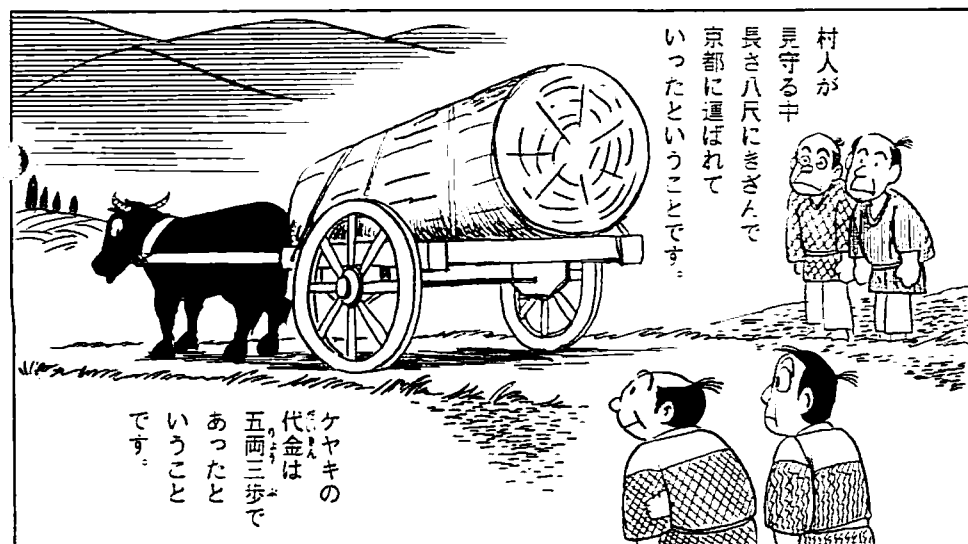
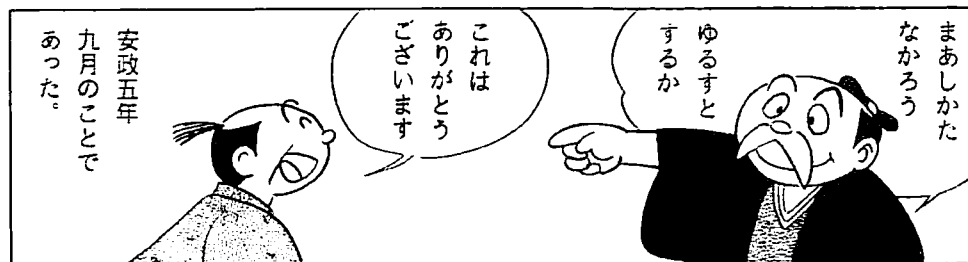
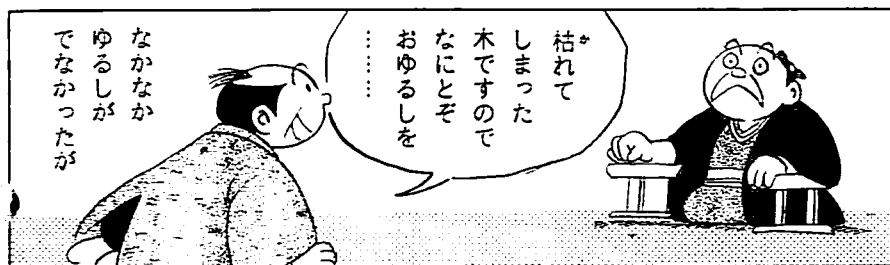


皆原村には
「口、中、奥但馬」という地名が
あり、高良神社も高麗の転化とも
考えられる。鍛冶屋村の阿蘇神社
の「アソ」とは朝鮮語の鉄という
言葉であると学者が言っています。



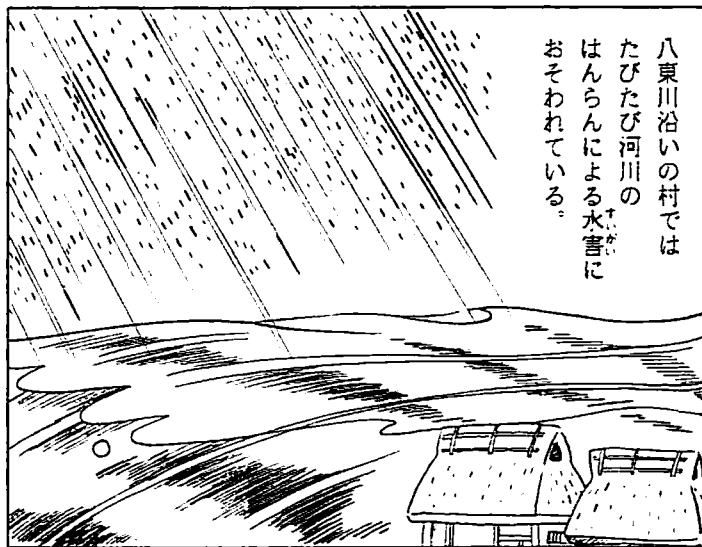
太鼓たいこになった大けやき(横田)



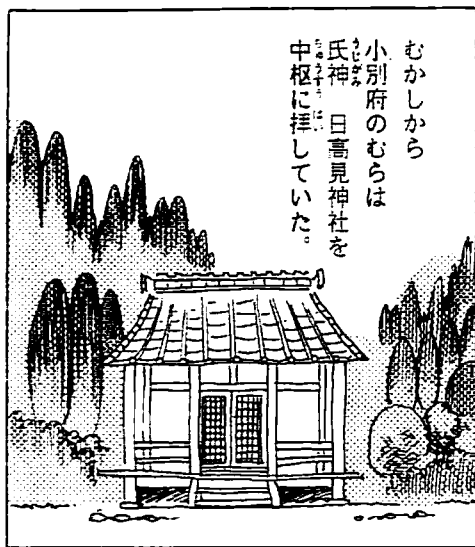


小別府村の移住（小別府）

八東川沿いの村では
たびたび河川の
はんらんによる水害に
おそわれている。

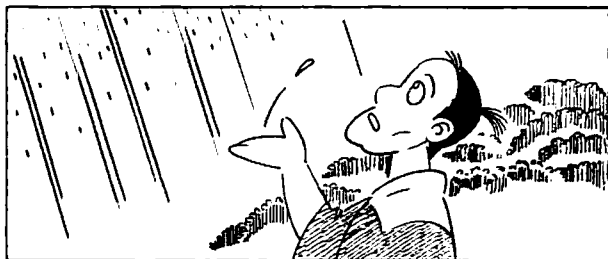


むかしから
小別府のむらは
氏神 日高見神社を
中樞に拝していた。

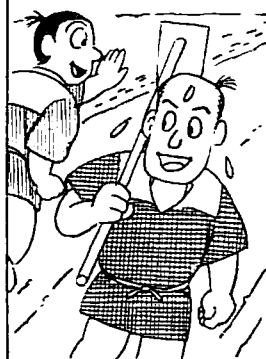


日高見神社は
八東川と新興寺むらとの
あいだの田んぼのなかに
あります。

つまり小別府むらは
新興寺谷川沿いに八東川と
新興寺のあいだに村を
つくって生活していた。



むかし、大雨がつづいて
こうらい水という
大洪水がおこった。



国道29号線

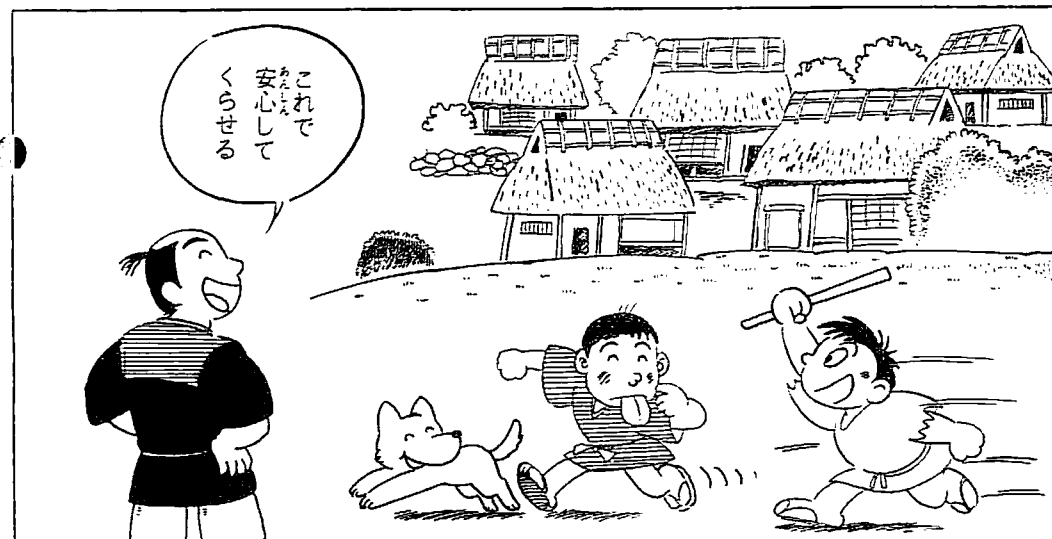
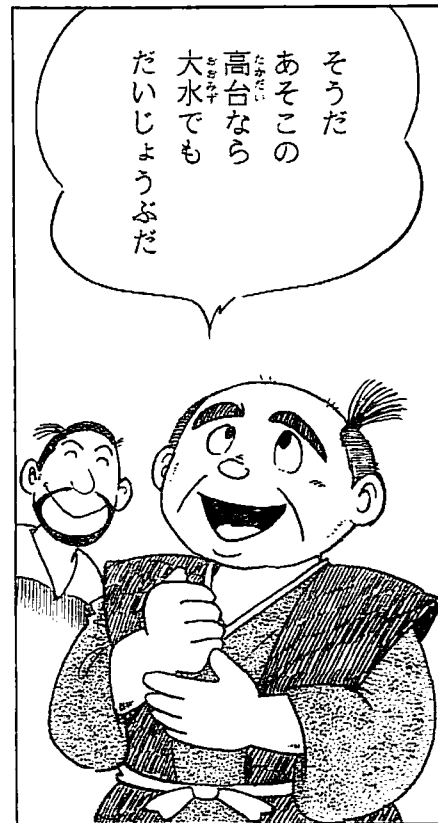
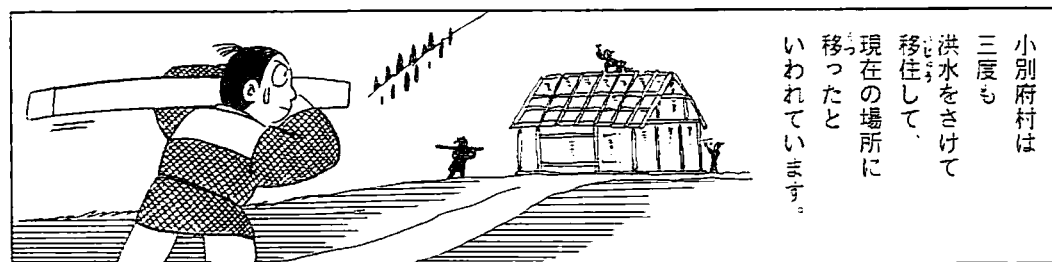
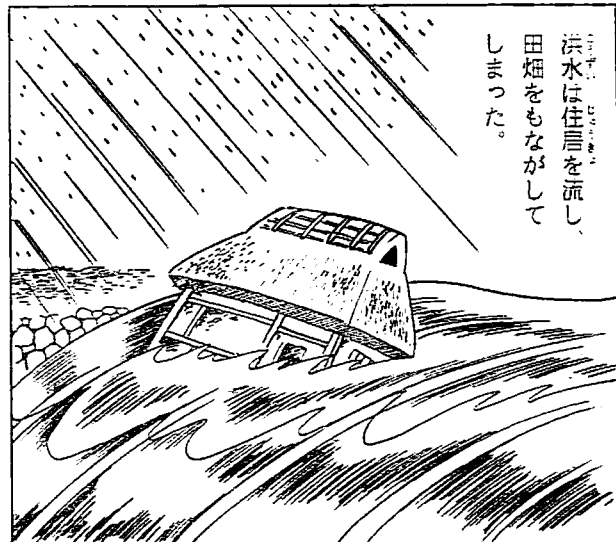
新興寺

鳥取

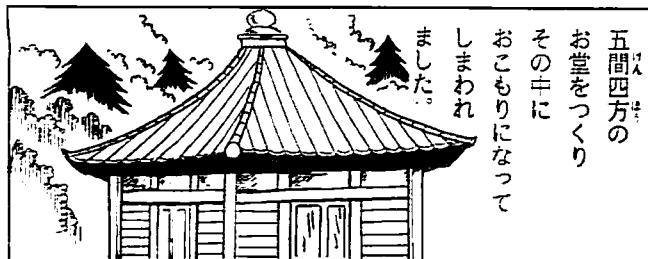
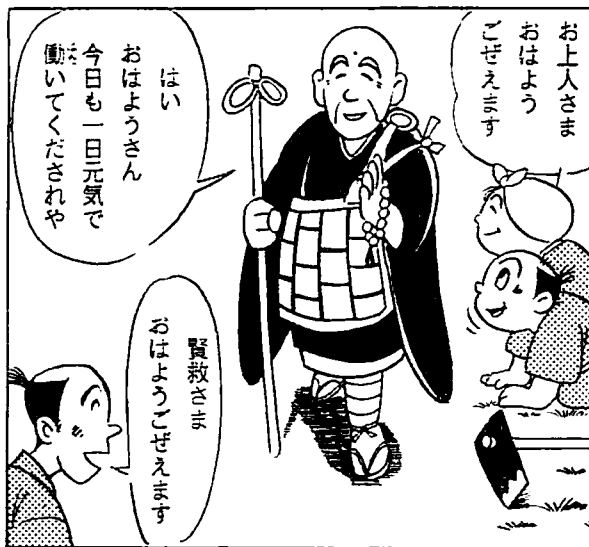
若松

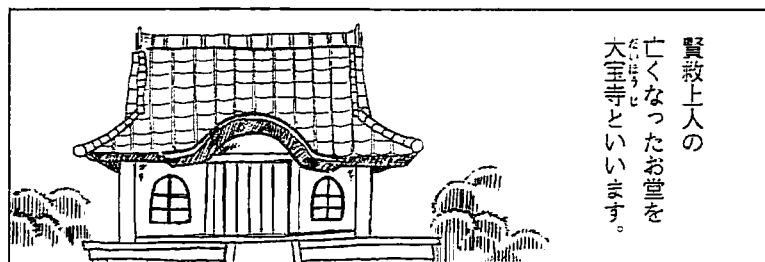
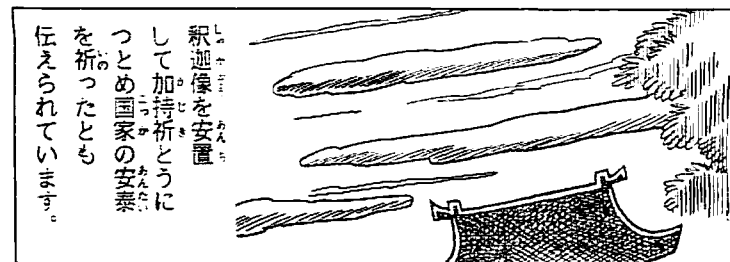
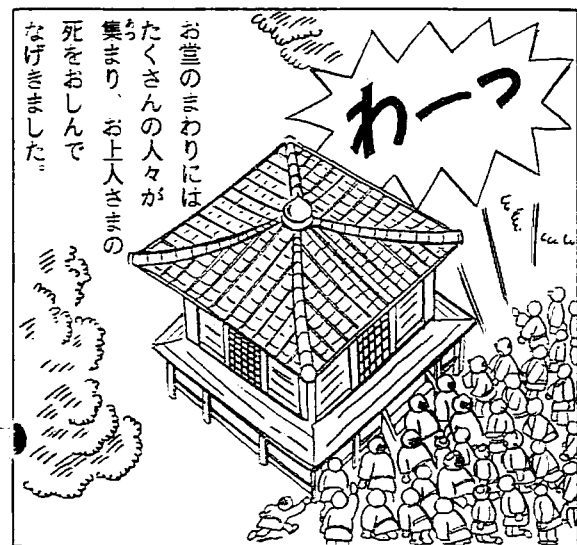
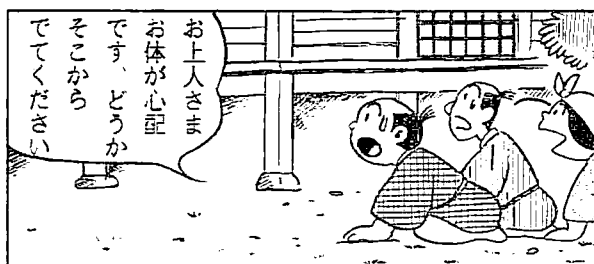
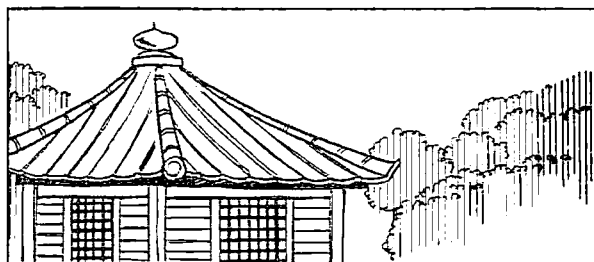
八東川

日高見神社



大宝寺の賢救けんきゅう（新興寺）





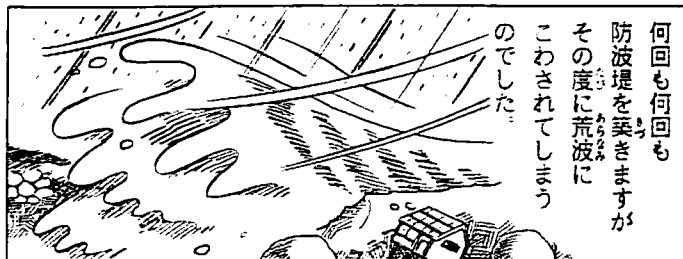
大内田家の井戸（安井宿）

宝暦二年（一七五三）
今の兵庫県月島に
防波堤をつくれと
時の幕府が命令を
出しました。

りっぱな
ものを
つくれ



何回も何回も
防波堤を築きますが
その度に荒波に
こわされてしまう
のでした。



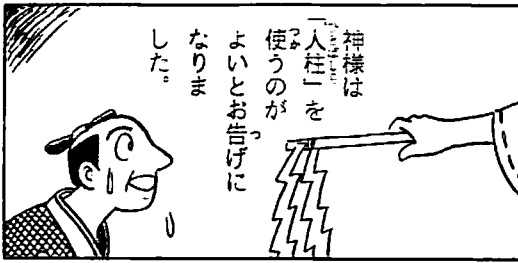
普請奉行は
たいそう
こまりました。



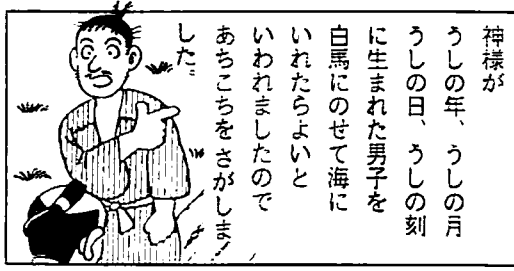
どうしたらいいのか
神様にきいてみる
ことにしま
した。



神様は
「人柱」を
使うのが
よいとお告げに
なりました。



人柱とは生きた
人間を堤防の中に
うめることです。

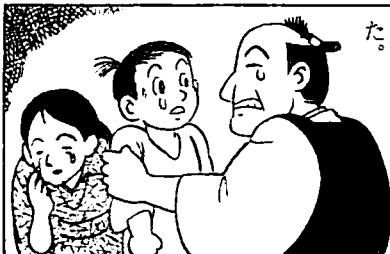


その条件にあう
男子が安井村の
大内田家にあったの
です。

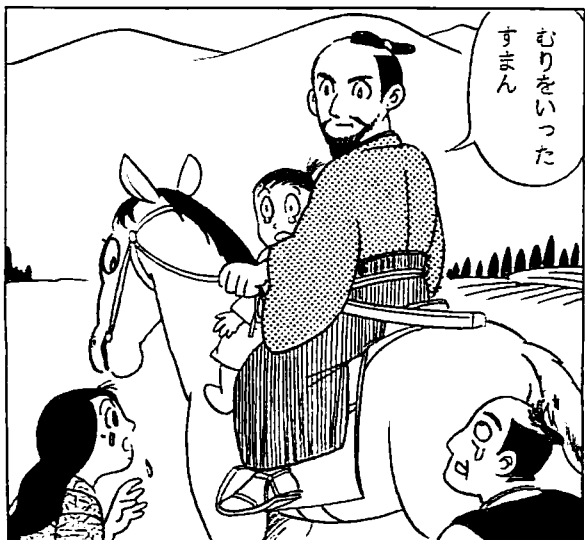
そんなことは
できません



大内田家では
ずいぶんと悩まし
たが、お国のために
しかたなく幕府の人
に子息をあずけま
した。

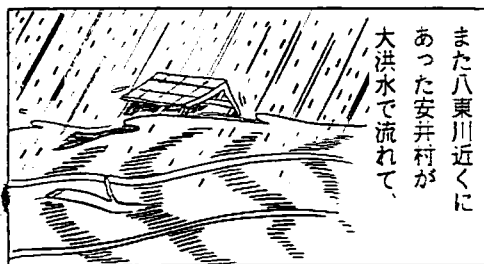


むりをいった
すまん





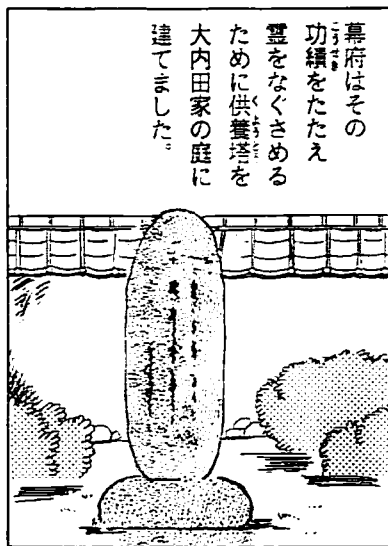
すると
今まであれで
いた海は
しずまり、
防波堤を
きずくことが
できました。



また八東川近くに
あった安井村が
大洪水で流れて、



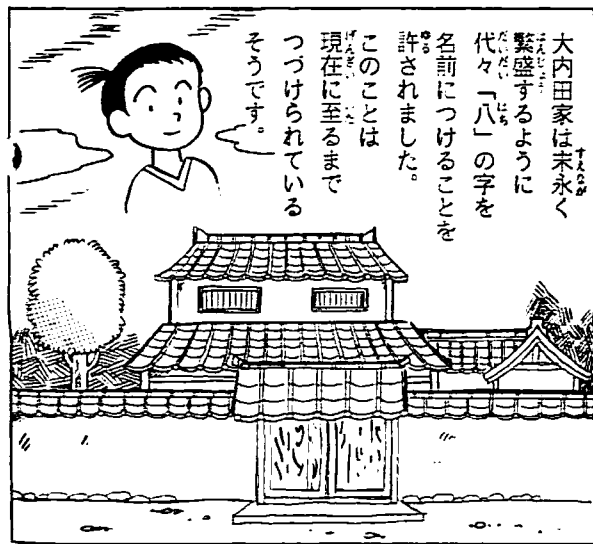
現在の高台に移って
いたので水に乏しく
不便でしたので、
深い井戸を掘って
村人の難儀を救いま
した。



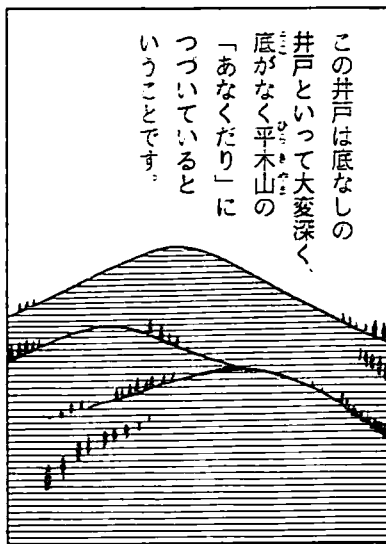
幕府はその
功績をたたえ
豊をなくさめる
ために供養塔を
大内田家の庭に
建てました。



幕府の人は内田家の子息に
白衣を着せ、白馬にのせて
海にしずめました。



大内田家は未永く
繁盛するように
代々「八」の字を
名前につけることを
許されました。
このことは
現在に至るまで
つづけられている
そうです。

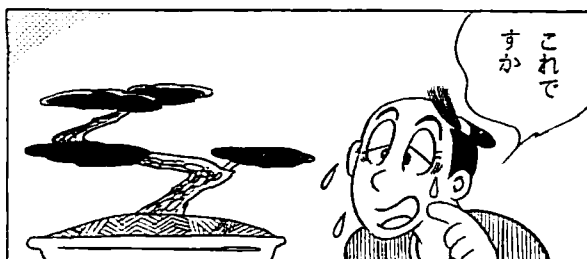
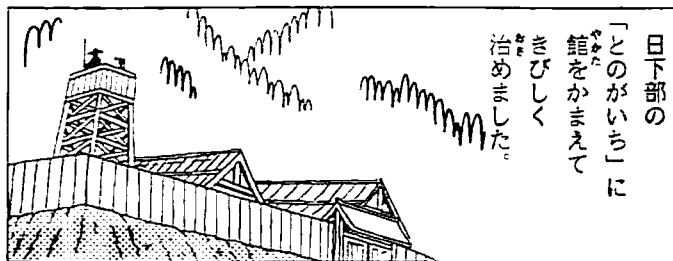
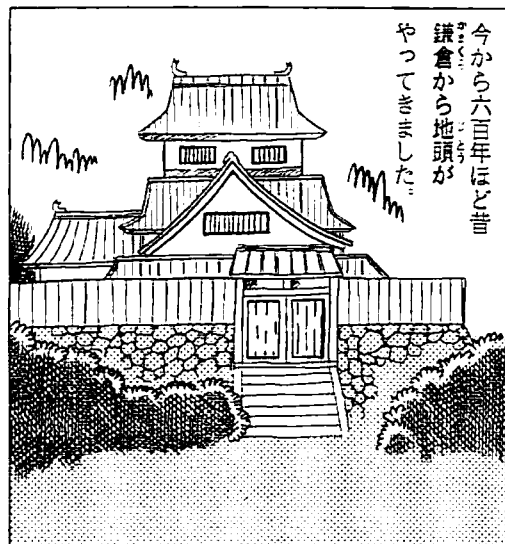


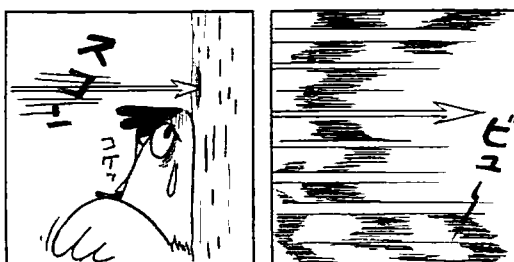
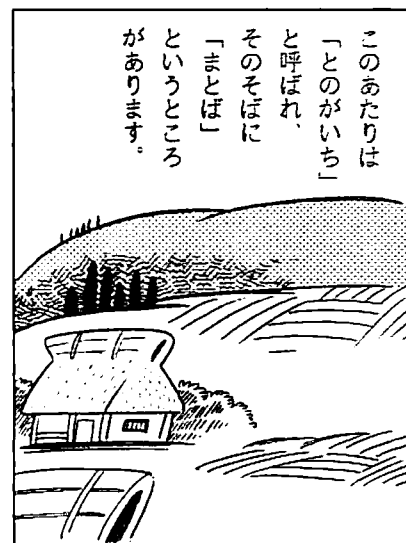
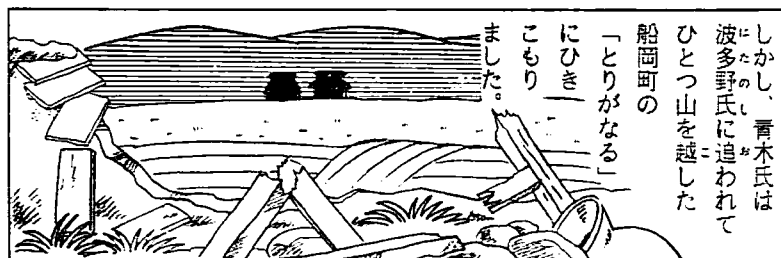
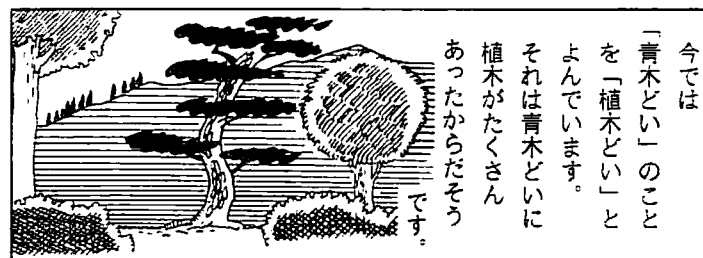
この井戸は底なしの
井戸といって大変深く、
底がなく平木山の
「あなくだり」に
つづいていると
いうことです。



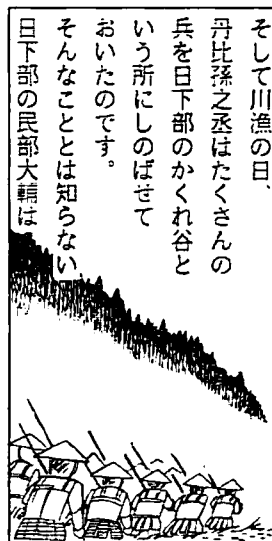
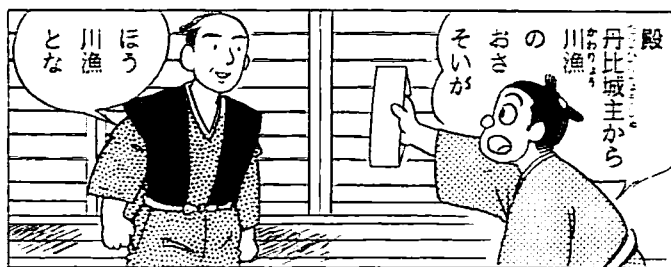
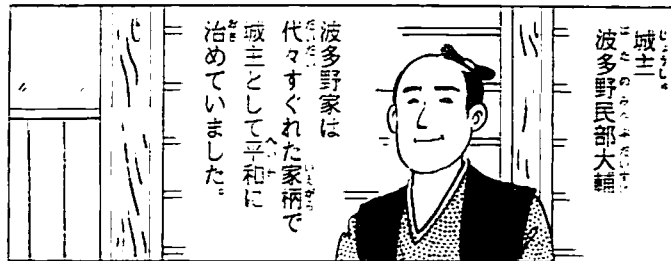
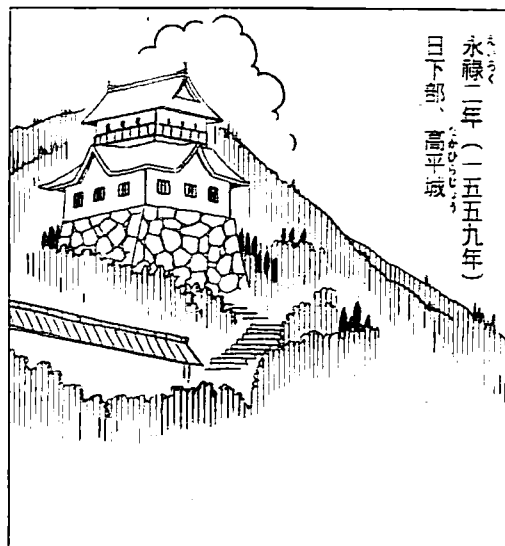
ありがたい
ことだ

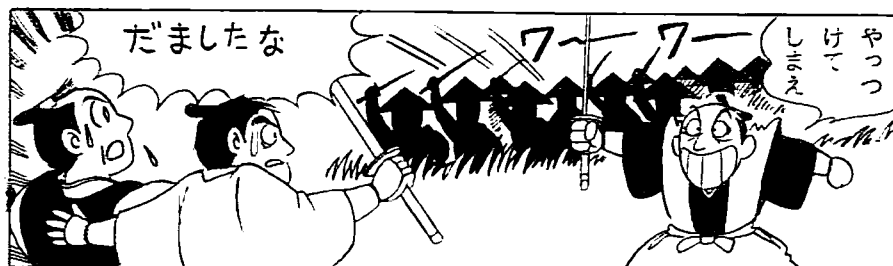
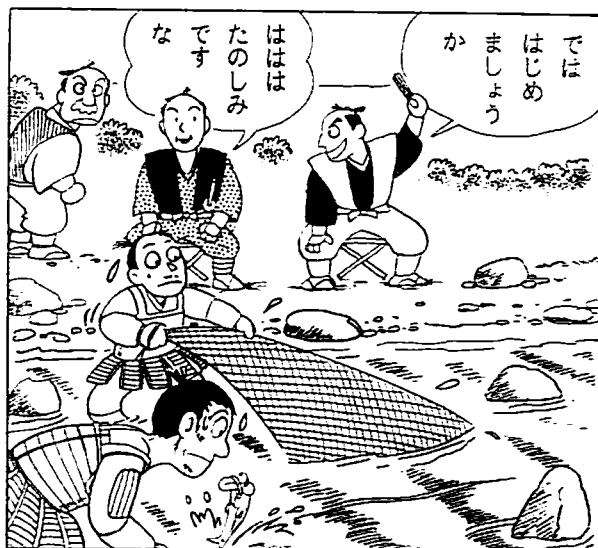
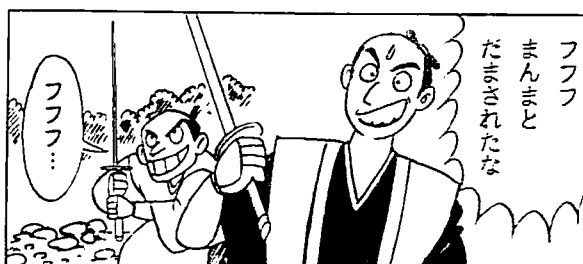
日下部の青木とい（日下部）





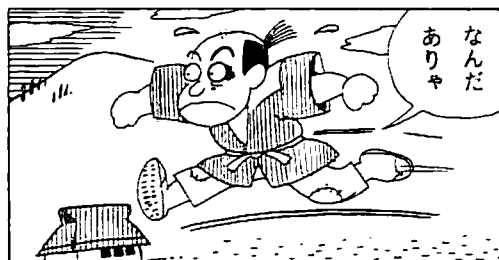
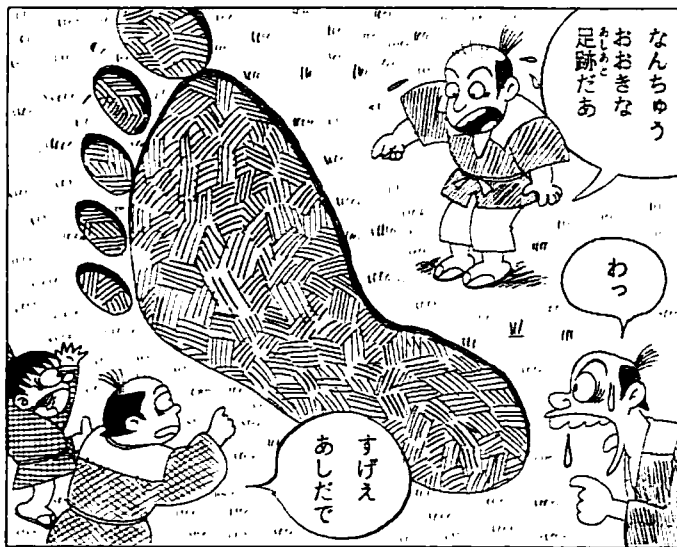
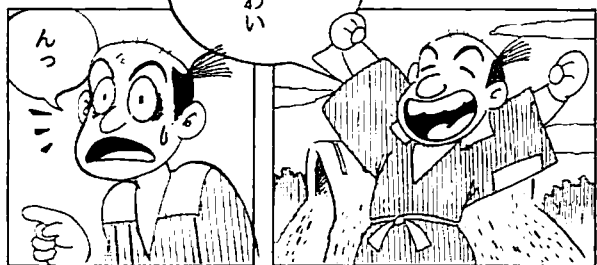
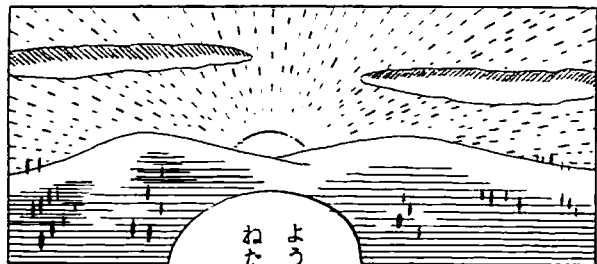
千人塚（日下部）

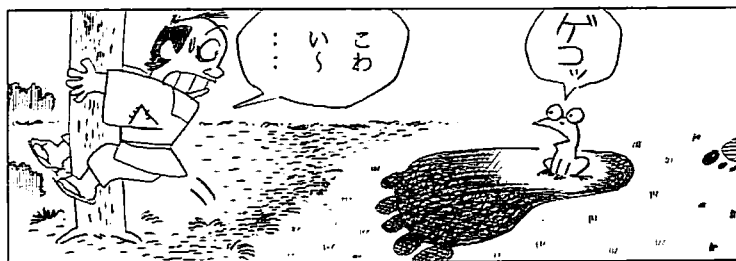
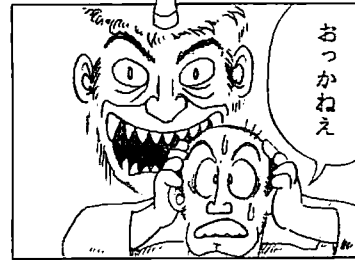
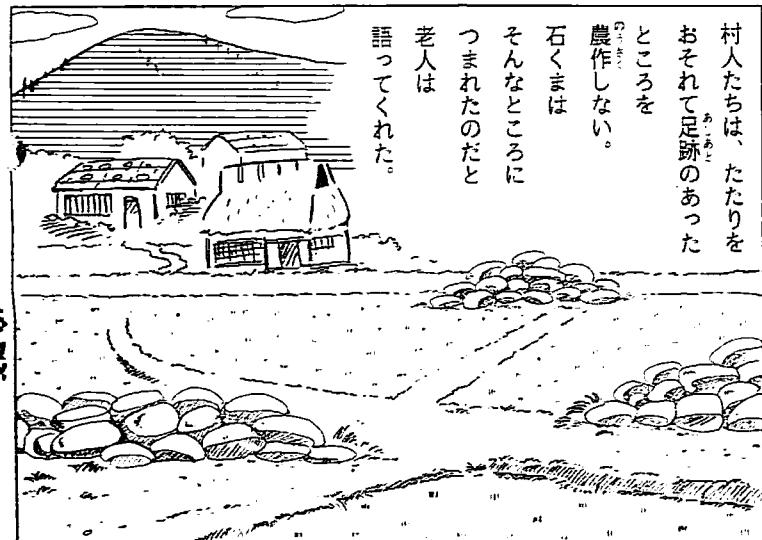
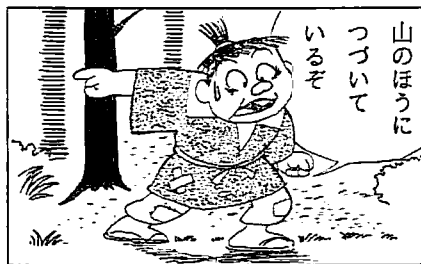
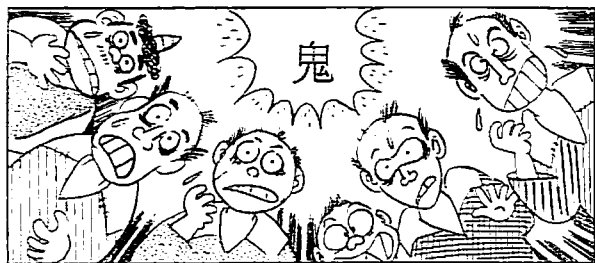




巨人の足あと

八東の村々は、
たんぼの中に
石くまが
たくさんある。
ほかの町にも
あるけれど、
八東にはとりわけ
多いように見える。
「どうしてか」
と老人にたずねると……





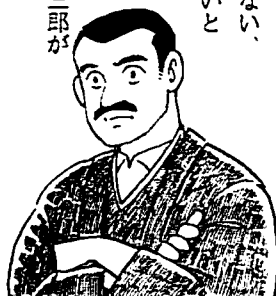
播州街道

明治時代のはじめ播州街道
(現在の国道二十九号線)は
街道とは名ばかりで、



イバラが
道をかくし、いわがでつばつていたり
若桜の落折坂ちかくは大木が
おいしげって空が見えず、屋でも
暗いというようなありさまでした。

安井信の村長、小林勘三郎という人は
道路の改修を急いでしなければ
産業も特産品も育たない、
人に積極性が育たないと
考え、
落折坂にトンネルを
ほろうと主張した。
工事実現のために勘三郎が
行動をおこしたのは
明治十二年であつた。



「急いでしなくてもよい」
という意見が多い中でも
これにめげず反対の人々を
説得してまわった。



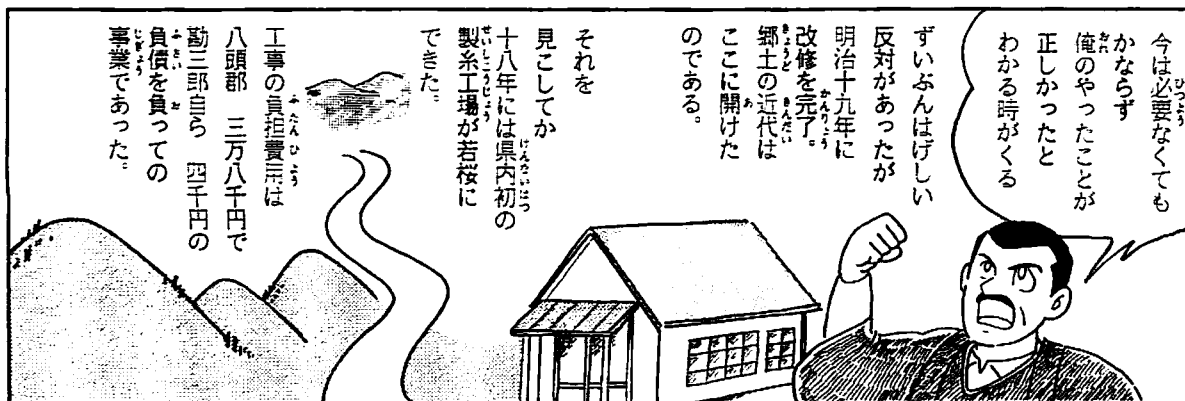
おまえが
言い出さなければ
田んぼもへらす
家も移さんで
よかつたのに



今は必要なくても
かならず
俺のやったことが
正しかったと
わかる時がくる
ずいぶんはげしい
反対があつたが
明治十九年に
改修を完了。
郷土の近代は
ここに開けた
のである。

それを見こしてか
十八年には県内初の
製糸工場が若桜に
できた。

工事の負担費用は
八頭郡 三万八千円で
勘三郎自前 四千円の
負債を負つての
事業であつた。

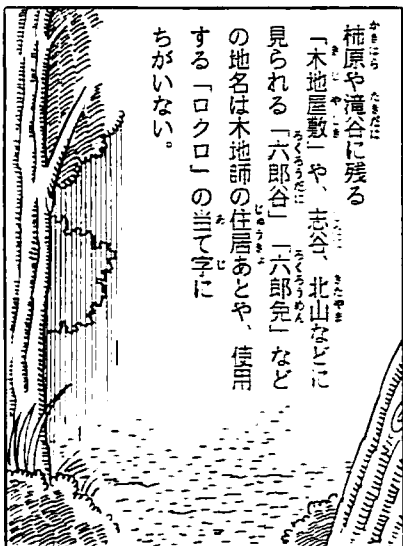


木地師のはなし

山林を生業の場とする
木地師が かつて
私たちの八東町にも
住んでいたことを
物語る、いくつかの
地名があります。



柿原や滝谷に残る
「木地屋敷」や、志谷、北山などに
見られる「六郎谷」「六郎先」など
の地名は木地師の住居あとや、使用
する「ロクロ」の当て字に
ちがいない。



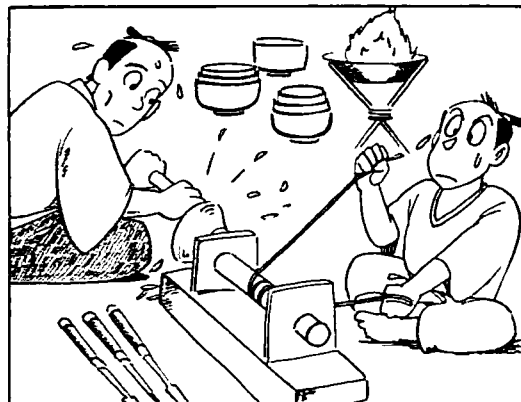
また、木地師の細工に使用する
刃物を作る鍛冶屋の存在が
なくてはならなかった。
鍛冶屋の存在は
木地師のいたことを
示すことに
ならないだろうか。



町内に「小椋」という姓が
ありますが、この姓は
木地師が姓としたもので
ある。



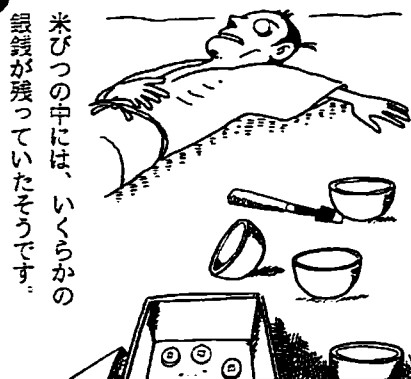
一般の
人々に苗字のゆるされ
なかった時代に姓を名のつて
いることは、
木地師がその由緒を誇りとし
一種の別社会をつくり、
人々と一線を画していた
ことを示すのである。



細見谷奥に伝わる
「かさんが蔵」の伝説も
木地屋に関するものです。



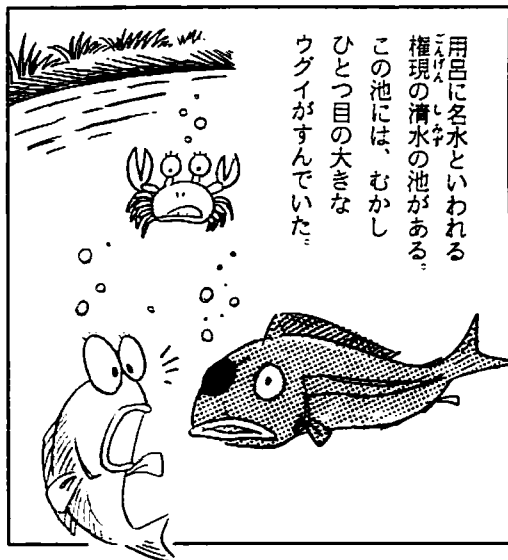
妻鹿野の古老の話によると
天保の申年がしんの時、
細見谷木地師は、カウの
米びつをかこんで餓死し
断絶したそうです。



米びつの中には、いくらかの
銀銭が残っていたそうです。

ひとつ目のはなし

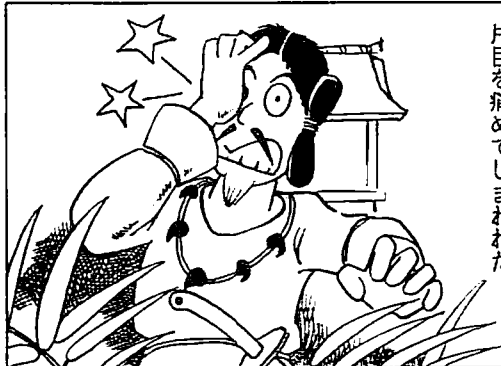
用品に名水といわれる
権現の清水の池がある。
この池には、むかし
ひとつ目の大きな
ウグイがすんでいた。



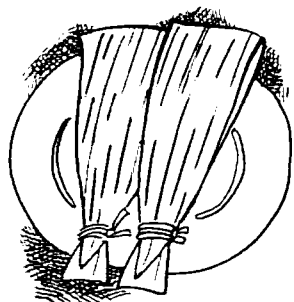
めずらしいウグイだから
村の人たちは
権現さまのお使いで
清水を清めているのだと
いっていた。



安井の伊蘇乃佐口神社の
神さまは山を歩いていて
笹の葉で目を突かれて
片目を痛めてしまわれた。



神さまが目をいためられたのは
笹のせいだからというので
安井では五月の節句につくる
ササ巻（餅）を
つくらない。



実はこのふたつの、
「ひとつ目」の話は
昔、その地域で製鉄が
行われていたことを
伝える話である。



鉦山で採掘した
鉦石や川砂にまじった
砂鉄などからよい鉄や銅を
つくりだすために溶鉱炉を
きずいた。

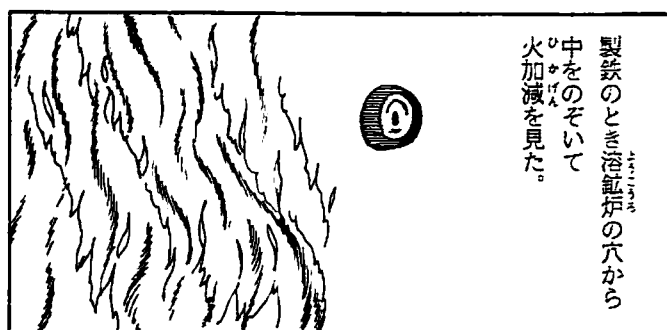




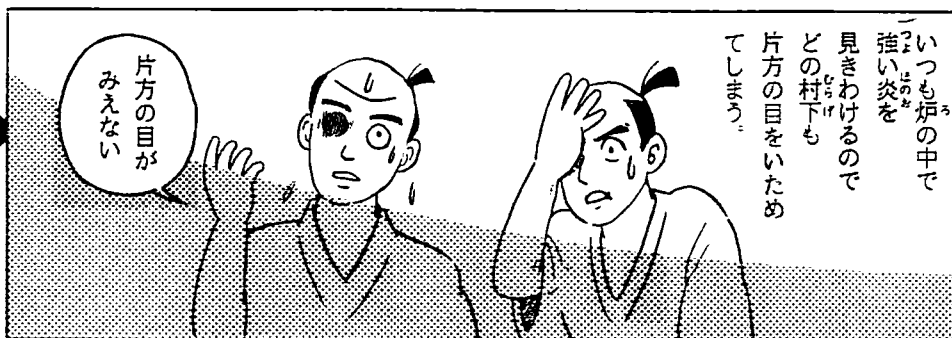
ああ



どうだ
調子は



製鉄のとき溶鉱炉の穴から
中をのぞいて
火加減を見た。

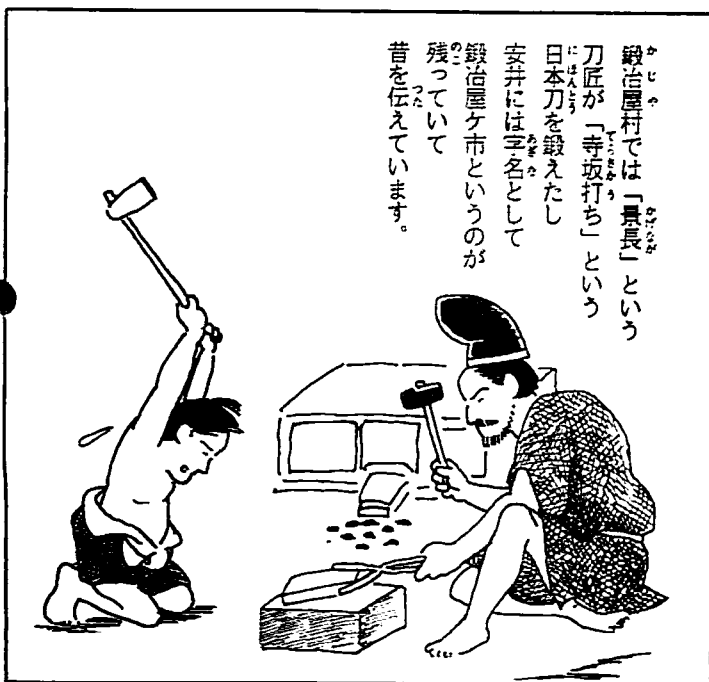


片方の目が
みえない

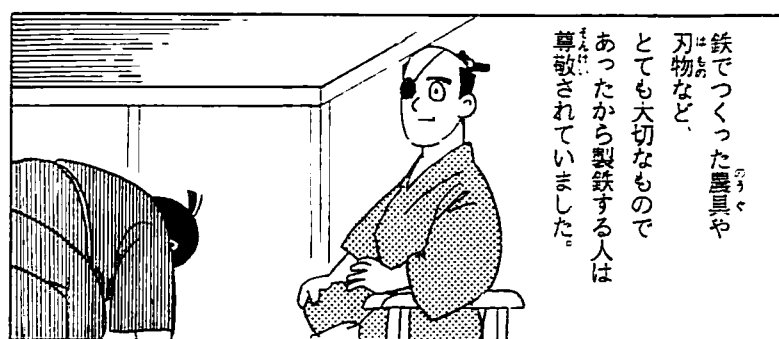
いつも炉の中で
強い炎を
見きわけるので
どの村下も
片方の目をいため
てしまう。



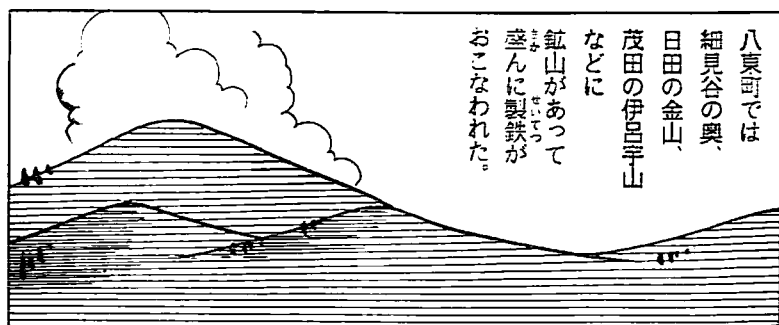
この火加減を
見る人のことを
「村下」（むらげ）
といって
いちばん
大切な仕事で
あった。



鍛冶屋村では「景長」という
刀匠が「寺坂打ち」という
日本刀を鍛えたし
安井には宝名として
鍛冶屋ケ市というのが
残っていて
昔を伝えています。



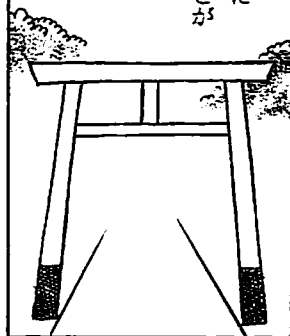
鉄でつくった農具や
刃物など、
とても大切なもので
あったから製鉄する人は
尊敬されていました。



八束町では
細見谷の奥、
日田の金山、
茂田の伊呂平山
などに
鉱山があつて
盛んに製鉄が
おこなわれた。

伊勢みち道標

昔、お伊勢さんにおまいりすることがさかんにおこなわれた。

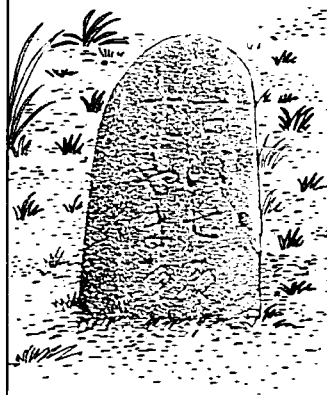


お伊勢さんにおまいりするまえに丹波の元伊勢（はじめにお伊勢さんがあつたところ）に参り、それから伊勢の国にまわった。

若桜街道（播州街道）から水ノ山を越えていくのがおきまりで、この道を伊勢道という。用瀬や智頭谷の人もこの道を通りました。



参宮の人が道にまよわないように案内の道標が八景町内に三か所ある。



そのひとつ皆原の村はずれにある道標は皆原村の半兵衛さんがつくったものであり、あと二基は安井村にある。小別府や日田の前には道のりを知らせる一里塚があつて樺や松を植えて目印とした。



お宝参りの記録である
道中日記が北山の横野家に
残っている。

北山庄屋

横野宇三郎が書いた

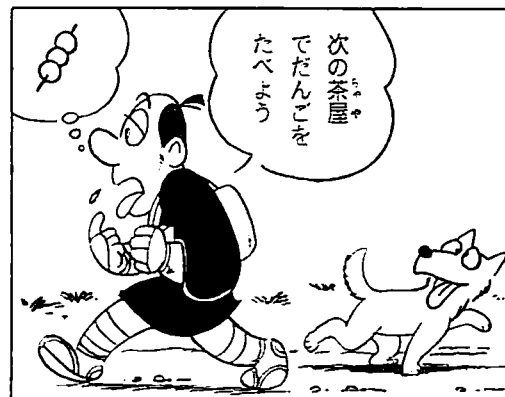
道中日記



村の人の代表としてご参宮。
九人ずれの旅であった。
七月十日に出発して
八月三日に帰っているから
二十四日の旅である。
宿代はひとり百五六十文から
二百文を払っている。
途中洪水などで
足止めされる
こともあった。



一日およそ六、七里から
多くて十一里を歩いた。
(一里は約三、九キロメートル)



帰りに若桜で
宗天まんじゅうや針を
土産に買ったと
いうことです。



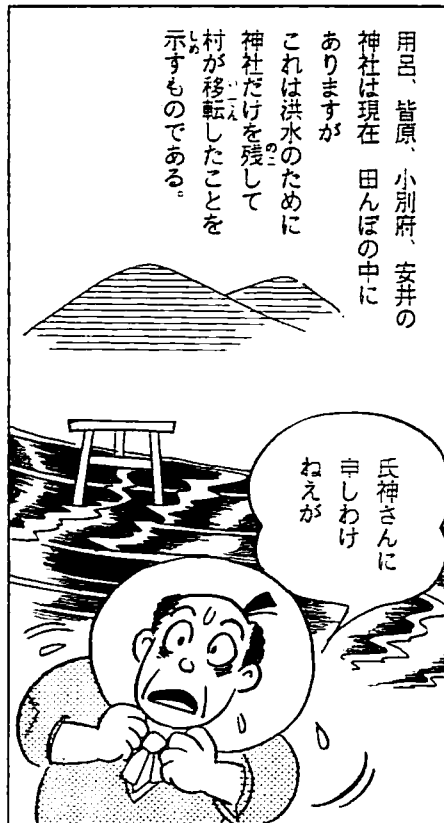
当時はどんな旅でも
村方根帖を持つ村の庄屋に
計画を報告して往来手形を
発行してもらった。



昔の旅は
どこへいくにも
足で歩いて
いったんだ

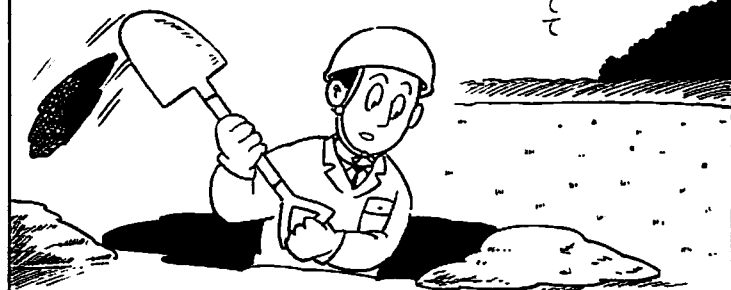


あばれる八東川



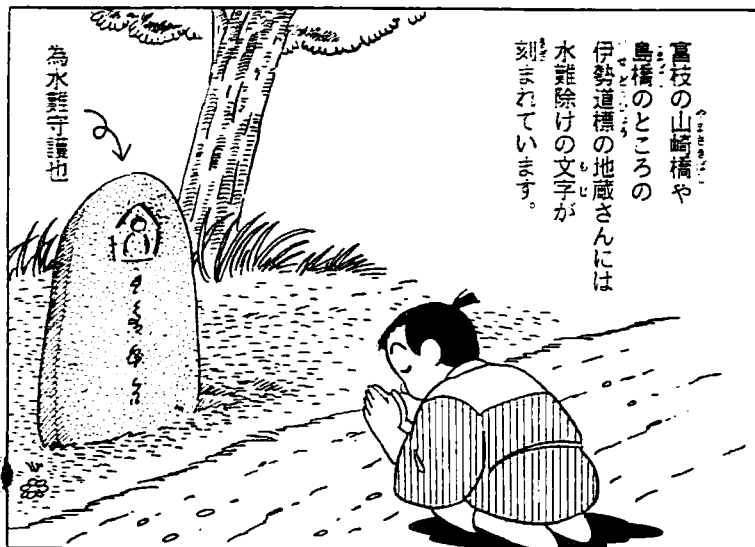
小別府の
日高見神社の
近くの地の底を
ゴウゴウと音をたてて
川が流れている。

地の底の川とは
おどろいた
言の川が
流れているんだな



富枝の山崎橋や
島橋のところの
伊勢道標の地蔵さんには
水難除けの文字が
刻まれています。

為水難守護也



才代の川原の
近くにある地蔵
さんも水難除けの
祈りをこめたもの
であろう。



今では
八栗川のあちこちも
改修されて
広くなった
いたるところ

あたらしい
堤防などを
築いて
みんなの生活を
守っています

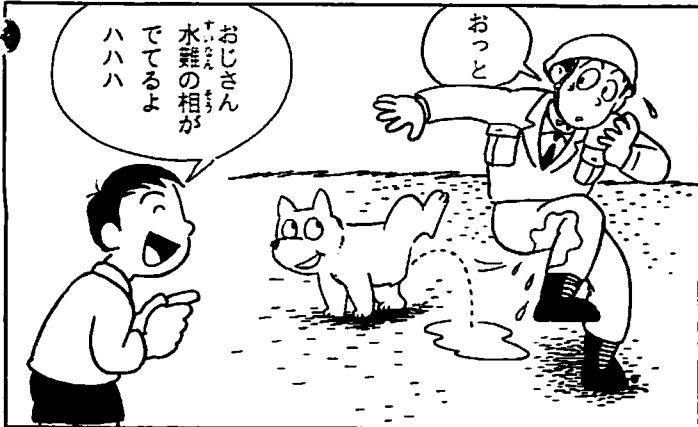


洪水が
でも
大丈夫って
わけか



おっと

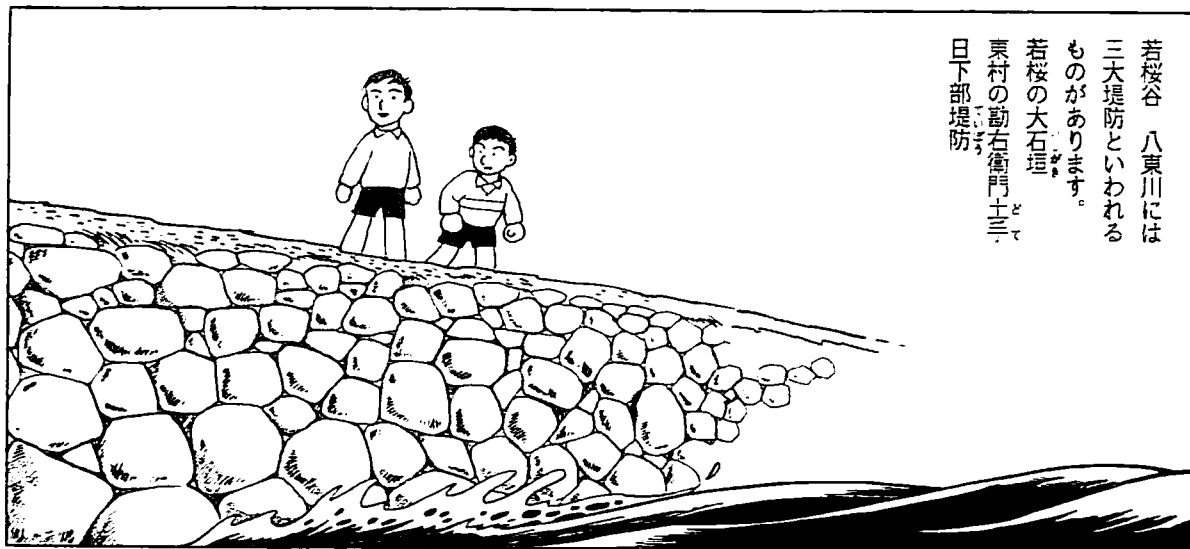
おじさん
水難の相が
でてるよ
ハハハ



八東川の三大堤防

てい ぼう

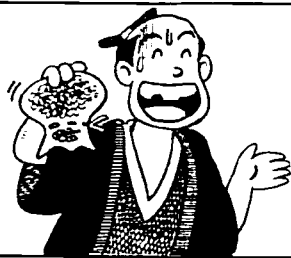
若桜谷 八東川には
三大堤防といわれる
ものがあります。
若桜の大石垣
東村の勘右衛門十三
日下部堤防



若桜の大石垣は
段さまが築いた
ものです。



東村の勘右衛門
十三は
藩に願いでたが
なかなか許され
ないので自費で
とりかかった。



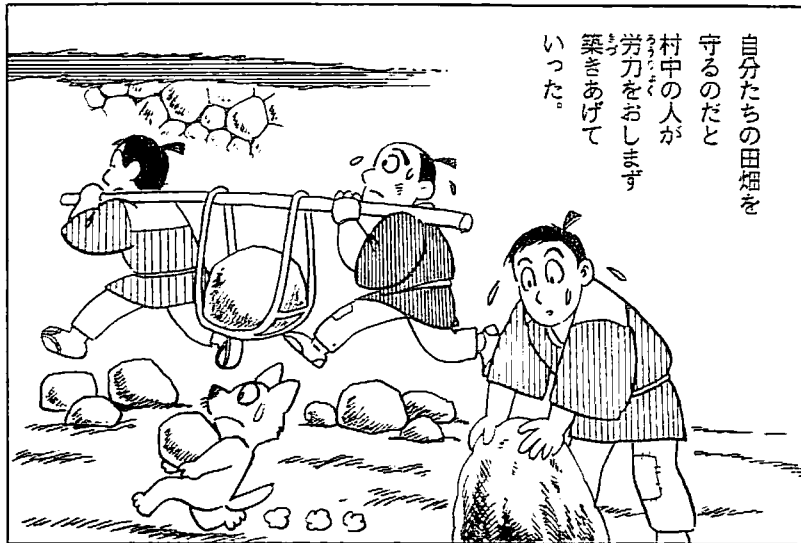
人夫だけは藩のほうで
出してもらって
大石を組み
腰を植え、
一七三八年頃
完成している。



日下部でも
村の田畑が
たびたび洪水で
流されるので
堤防を築く
ことになった。



自分たちの田畑を
守るのだと
村中の人が
労力をおします
築きあげて
いった。



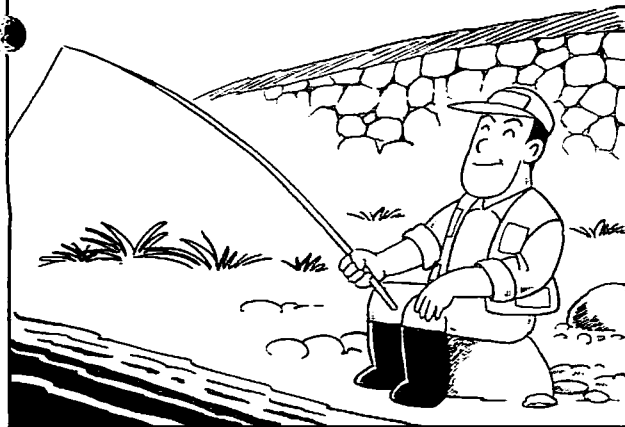
としよりや
女たちも
夜なべしごとに
わらじを
作ったりして
工事に
協力して
いった。



八東川は
何度かの
洪水を
くりかえし
田畑を流し
人家を流して
人々を苦しめて
いたのだらう。



島村が洪水で
一夜のうちに
日田村から流されたとい
うような話からも
うかがえます。
人々は生活を
守るために
より強固な
堤防を築いた
のです。



小別府の神社や
安井の神社
皆原の神社の
位置が田んぼの中に
あることなどを
考えると想像
できる。



氏神さんに
もうしわけ
ねえが山すその
ほうにひっこし
しますで

むかしの学校

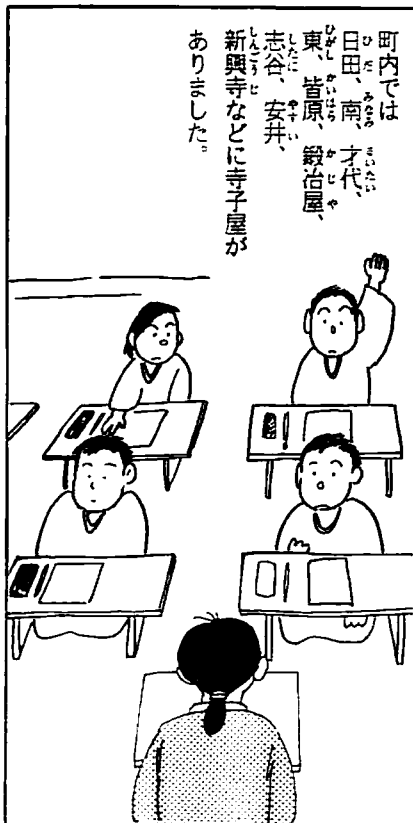
鎌倉時代から明治時代になるまで、一般の人々の教育は寺子屋という私塾でおこなわれていました。

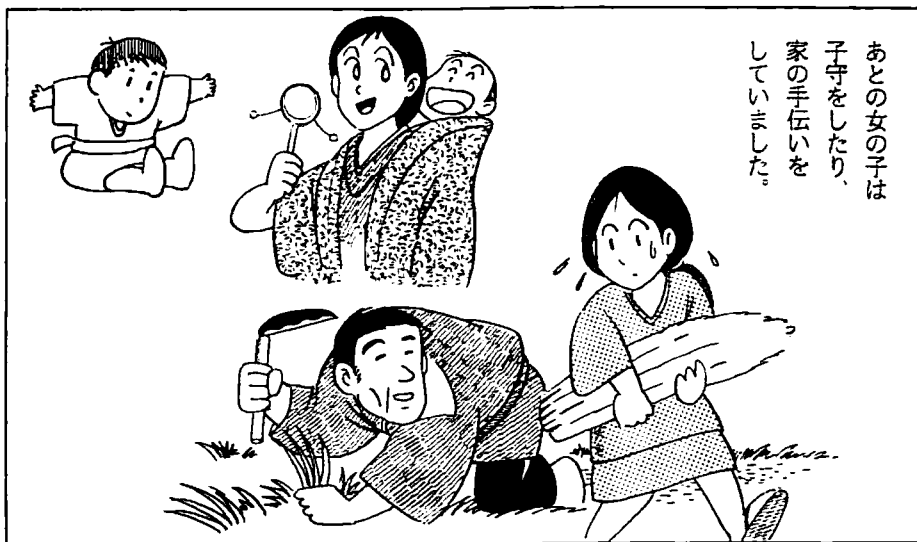
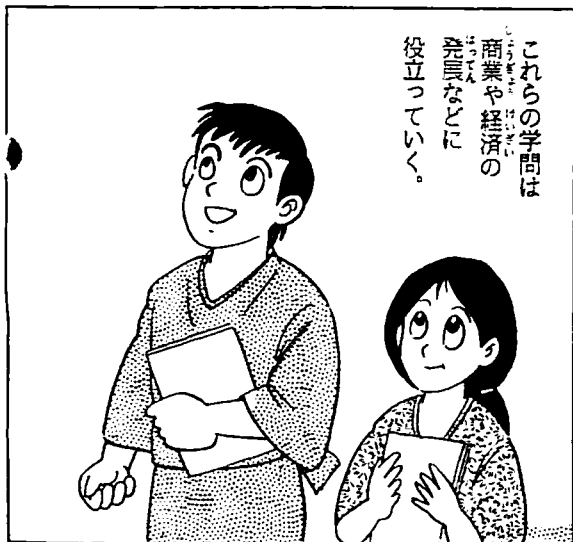
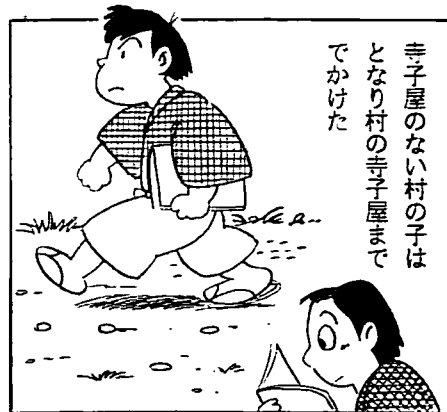
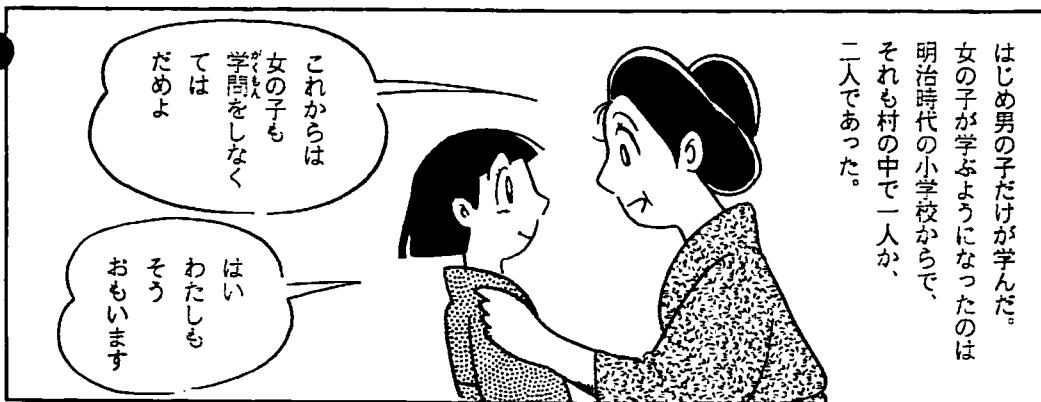


わずかの寺子たちが地域の神官や僧侶、医師などについて読み（読書）書き（習字）そろばん（算数）と心の教育をうけていました。



町内では日田、南才代、東皆原、鍛冶屋、志谷、安井、新興寺などに寺子屋がありました。





寄宿舎と分校

山村開発センターがある
あたりに、中学校の
寄宿舎がありました。



冬になって
雪がちらつきはじめる
頃になると
遠くからかよって
くる生徒が
寄宿舎で
共同生活を
するのです。



小学校では
清徳と柿原
横地に
分校が
ありました

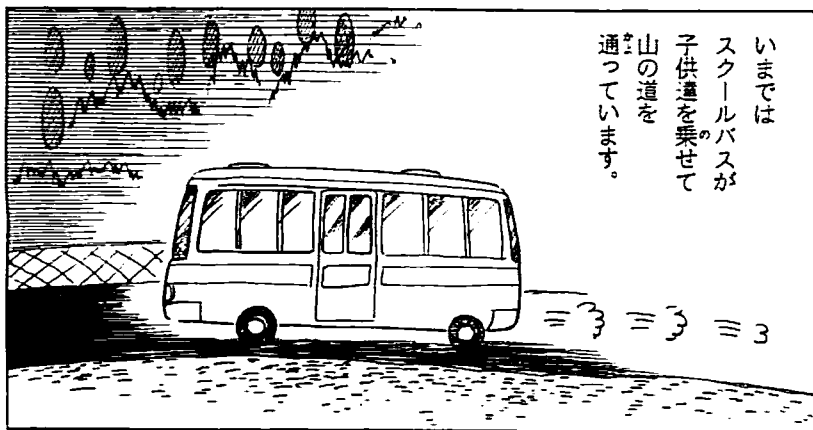
本校にかよう
のがたいへん
なので
分校で
勉強した
のです。



時代が
かわって
寄宿舎や
分校は
なくな
りました。



いまでは
スクールバスが
子供達を乗せて
山の道を
通っています。



八東町 まんがマップ

●部落名 ○参考地名

扇山▲

ふるさとの森
はこのへんだな



○広留野



今はもう
なくなった
村もあるね

ずいぶん
はつとも
かわった
もんだ

フルーツが
たくさんとれる
そうだ

妻鹿野
(めがの)

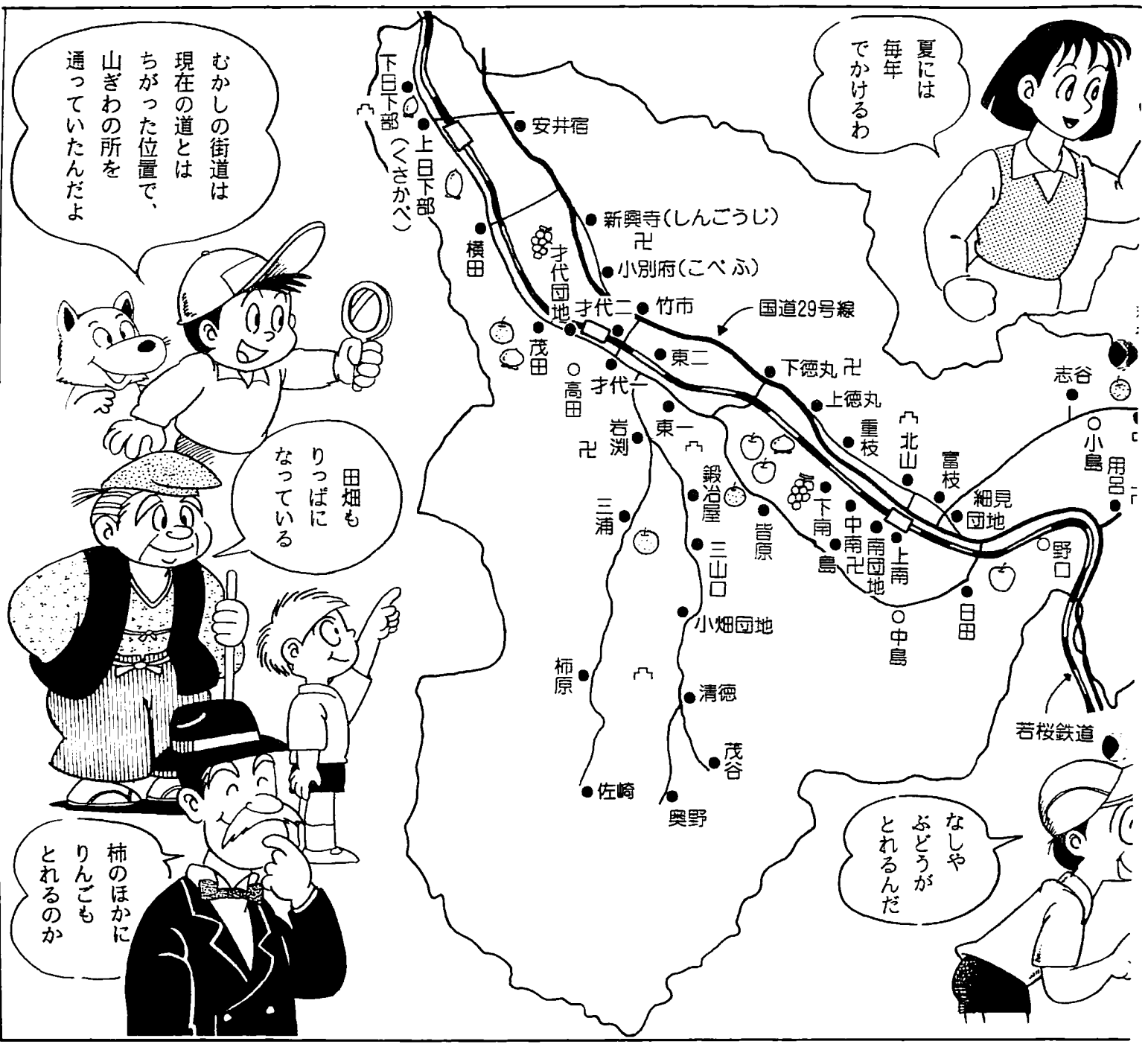
○柞原(たらわら)

○滝谷

○横地

○園

山(まやま)



まんが「はつとうちょうのむかしばなし」編纂委員

小 谷 五 郎
西 山 忠 実
浜 豊
大 平 晃
公 賀 春 實
田 中 隆 夫
中 田 武 司
木 下 讓 治 (丹比小学校長)
中 村 哲 夫 (八東小学校長)
寺 谷 敏 光 (安部小学校長)

まんが「はつとうちょうのむかしばなし」

編 集 まんが「はつとうちょうのむかしばなし」編纂委員会

まんが 上 田 と し お

発 行 ハ 東 町

鳥取県八頭郡八東町大字北山六三ノ一番地

印 刷 中央印刷株式会社

鳥取市南栄町三四

発行日 平成五年三月二十五日

企画国際課

